289-Sa855ウ
1200500732401

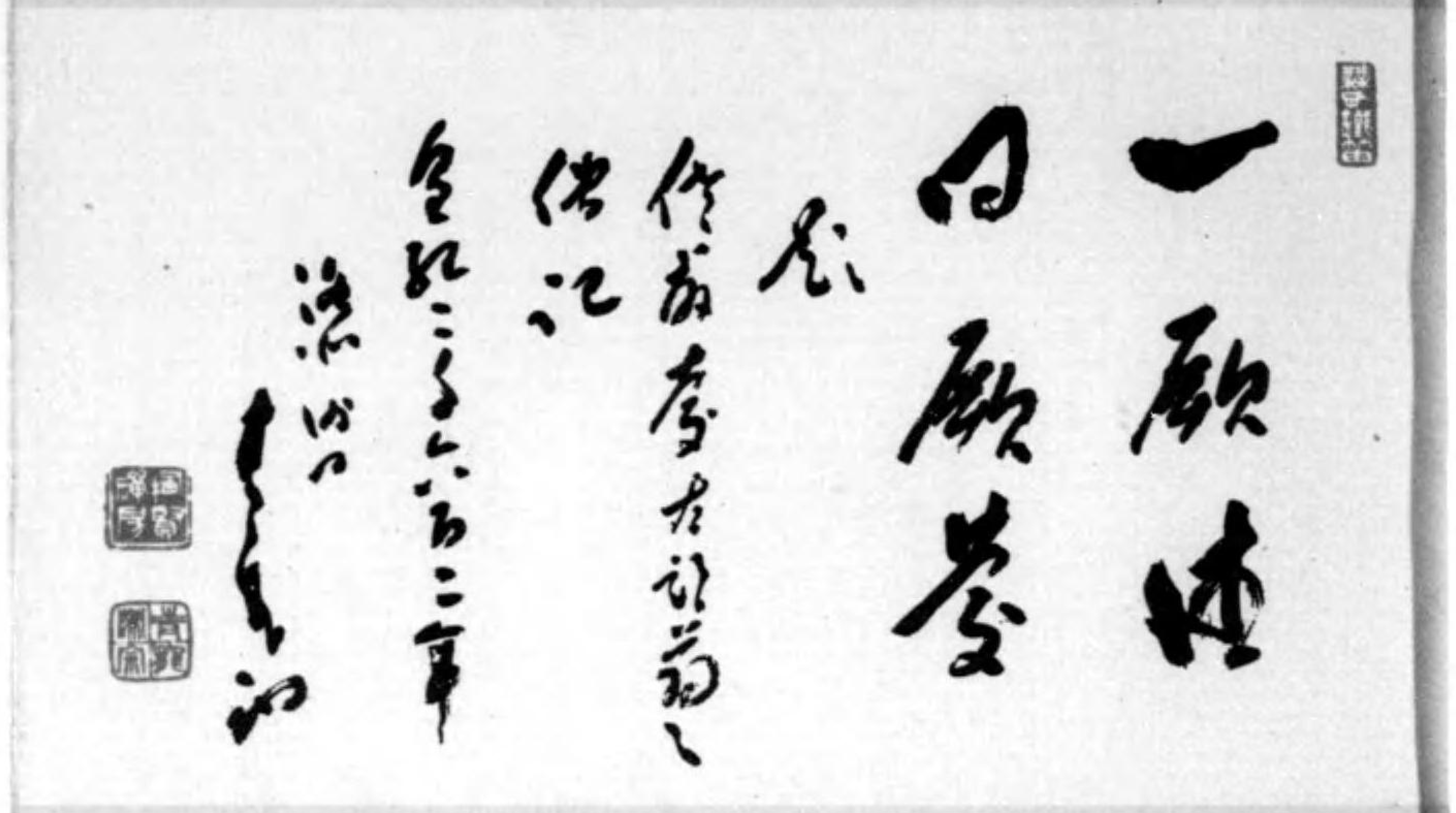
始

4D-31

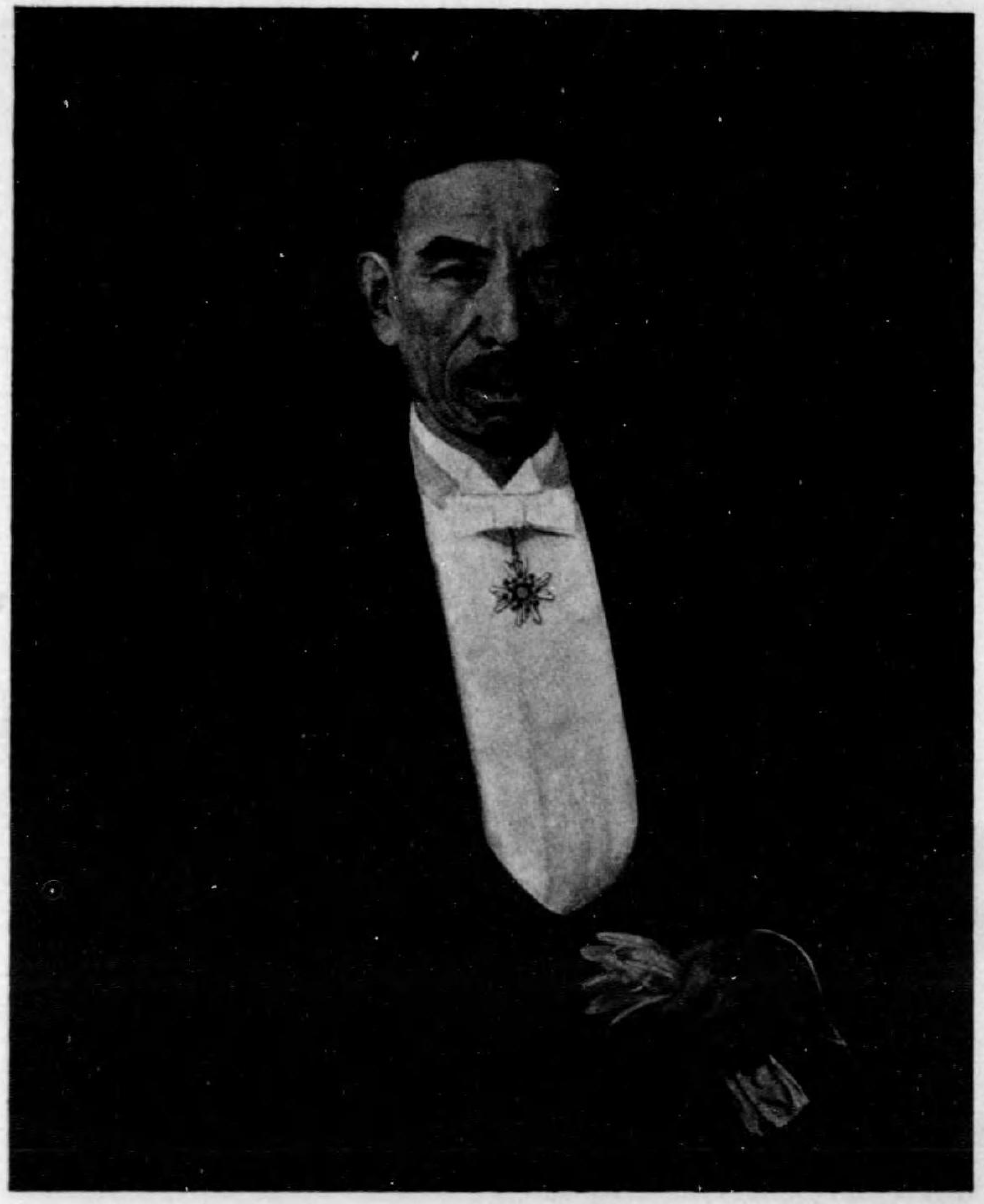
帝國圖書館藏

289
SA855
ウ

後藤芝太郎



題字　間宮英宗師



佐藤慶太郎肖像　岡田三郎助畫伯筆

946
4

序

佐藤慶太郎翁逝いてはや二年、今その三回忌がめぐり來ようとしてゐる。

臨終の際まで、食糧問題を口にし、苦痛と鬪ひながら烈々愛國の至情を吐露して止まなかつた翁の靈は、今何處にあつてこの一億火玉の驀進を、見守つてゐられることであらうか。

思へば翁は、眞實の國士であつた。尊皇愛國を躬を以て實踐した翁の如きは、眞珠灣頭に散華した勇士にも比すべき、國寶的な存在であつた。しかもその時流を見拔き、國家の缺陥に身を挺する慧眼に至つては、今更の如く畏敬の念を禁じ得ない。

翁の最後の事業であつた生活刷新の大運動は、大東亞戰に突入した國民にとつて、今日以後の最大問題である。あれを思ひこれを思へば、翁に藉すに更に數年の壽を以てしたかつたと、口惜しく思ふもの私のみではないであらう。

翁の事業は、世の富豪の如く、單に持てる財を投げ出したといふ簡單なものではなかつた。自ら立志傳中の人として、額に汗して積み上げたものを、社會萬民に寄與せんとの精神から、散ずべき場合に潔く散じたのである。人を愛し世を愛するために、自らの用を節して出されたものであつた。

私は翁を思ふごとに、「其の分に從ひて財用を節し、儉素を守るは、天道を敬し人福を享くる所以なり」といふ幼學綱要の一句が思ひ浮ぶのである。天を信ずること厚く、常に天明を知り、ひたすら皇道精神に生きやうとしてゐた晩年の佐藤翁は、まことに床しい風格を備へてゐた。

私は、翁に於て初めて、日本精神をそのまゝに生きた實物標本を見る心地がするのである。

翁の遺風を慕ふ我等が、翁の眞姿を後世に傳へ、その精神を後昆に遺すべく、翁の傳記編纂を企圖したのは、昨十五年の九月であつた。爾來約一ヶ年餘の歳月を費して、ここにその全貌を傳へる傳記が完成したのである。勿論短日月のことではあり、資料もまた不十分で、萬全を期し得ないのを遺憾とする。しかしながら、關係者一同全力を傾注してなつたものである點に於ては、定めし地下の翁も御滿足下さることゝ信ずる。

我等は翁の三回忌に際し、心から翁の靈にこれを捧げ、更にこれを社會に提供して、第二、第三の佐藤翁の出現を待望するものである。

昭和十六年十二月

佐藤慶太郎翁傳記編纂會

代表　横田章

凡例

一、昭和十五年九月二日、故佐藤理事長記念事業委員會が開かれ、記念事業の一つとして、傳記編纂のことが決定された。

二、傳記は大日本生活協會から出版することゝし、その執筆には、同會主事加藤善徳が專任これに當ることになつた。その際特に申合せたことは、ともすれば無味乾燥に陷り易い執筆態度を避け、興味をもつて讀めるやうな手頃なものをつくらうといふことであつた。同時に、中心はあくまでも、翁の最も力を注いだ生活改善の部面に置くことにしたのである。

三、以來執筆者は、文書により、實地踏査により、數百の關係者から資料の蒐集につとめた。しかし資料の現存は少なく、關係者の談話以外殆んどこれを得るの道はなかつた。それ故、出來上つたものは、斷片的な資料の按排であり、その上資料補綴の技未だ完きを得ない。ひたすら故人の德を傷けることなきやをおそれる。

四、執筆者に終始堅持せしめた態度は、あくまで客觀的な立場に立ち、嚴正に資料を排列することであつた。そして極力主觀的な記述を避け、故人の言行を誇張宣傳するが如きを排した。見やうによ

つては、餘りにも冷淡なるかの如き印象を、一部の人に與へてゐるかも知れない。しかし敢て信ずるところあり、この態度を選んだのである。

五、實業人としての翁には、殆んど筆をつけなかつた。これは本書執筆の態度から云つて、當然別人の努力に俟つべきものと考へたからである。更に生活館（大日本生活協會）關係の記述についても、翁の直接關係したもの丶一部にとゞめ、事業の一般には及ばなかつた。これまた他日出づべき大日本生活協會史に、ゆづるべきものと思つたからである。

六、本書中に於ては、獨立までの翁を慶太郎と呼び、その後を佐藤と稱した。更に引用文以外は本書中に出る人々の敬稱をすべて略した。これは歷史的記述の一般法則に從つたわけで、關係者各位の御諒恕を願ふ次第である。

七、巻頭岡田三郎助畫伯筆の翁の肖像は、東京府美術館開館十周年記念として、東京府より贈られたるもの丶複寫である。

八、本書執筆に當つては、喜代子未亡人、嗣子佐藤與助氏、佐藤信隆氏、野口雄三郎博士を始め、多くの方々の一方ならぬ御協力を忝うした。謹んで感謝の意を表する。

九、背文字の揮毫を賜つた宇佐美元東京府知事、題字を寄せられた間宮英宗師、裝幀其他に御盡力を下さつた森田美術學校教授に、深甚の謝意を表する。

一〇、本傳記の編纂に責任を持つた委員は、次の六名である。

横　田　　章
丸　本　彰　造
岸　田　軒　造
中　島　朝　雄
江　田　勝　巳
加　藤　善　德

昭和十六年十二月

佐藤慶太郎翁傳記編纂會識

目次

一、素描……一
元旦……三
掘出物……一四
香煙……二九
二、苗圃……三五
家訓四十四ケ條……三七
年始盃……四五
父と母……四九
三、朔風……五七
酢屋の子……五九
はぜ紅葉……六四

朝雁……七〇
四、試煉……七五
青雲……七七
道いばら……八二
轉回……八六
涙……九六
五、凱歌……九九
旗あげ……一〇一
育英……一〇六
斤先掘……一一四
みちしほ……一二一
六、奉仕……一二五
新たなる發足……一二七

美術館……一三九
咀嚼の行者……一七五
郷土愛……二一七
七、大旆……二四一
海越えて……二四三
妻逝きぬ……二七一
新しき大旆……二八二
八、落暉……三三五
おもかげ……三三七
餘榮……三七六

素描

元旦

大正十四年一月元旦の夜、佐藤は買ひ求めておいた博文館のポケット日記を取り出し、その最初の頁に、使ひ古しの萬年筆で、第一日の足跡を書き初めた。例の通り箇條書きに事實だけを書くので、日記といふよりはメモに近い。その文字を辿つてみると、次のやうな文章になる。

☆

早起入浴、家内と屠蘇雜煮を祝ふ。

市役所拜賀式及新年宴會に臨む。

小栗市長宅に立寄る。

小栗夫婦、當方夫婦にて病院に行き、齋藤院長等の案内にて患者を見舞ひ、X光線や標本室を見る。

小栗より貳拾圓、當方より拾五圓を一般入院患者に、尚當方より施療患者六名に貳圓宛見舞金を

贈る。

☆

何氣なく簡單に記したこの數行の背後に、どんなに複雜な人生が秘められてゐたか、彼自身は思つてもみなかつたに違ひない。いやそれよりも、日記を書き終つた佐藤の頭には、その日の病院行はもうすつかりかき消されて、明日出かける豫定になつてゐる狩獵の計畫で一杯であつた。

彼は獵銃を取り出してもう一度見改め、それから犬小屋に行つてお供をさせるジョンを見廻つた。ジョンは主人の足音をきくと、急いで小屋から飛び出して、尾をふりながら佐藤の腰にまつはりついた。彼は犬の頭を二つ三つたゝいてから、安心して部屋に歸つて寢た。

子供のない佐藤の家庭は、元旦といつても至極閑散であつた。朝早く起きて朝湯をすまし、妻の俊子と向ひあつて屠蘇をくみ、雜煮を食べて祝ひ合ふのが、毎年のきまりである。

そして定刻になると市役所に出かけて拜賀式に參列し、つゞいて公會堂の名刺交換會に出席する。この交換會は佐藤等の主唱によつて生れたもので、生活合理化の一つである。こゝで慶詞交換をすませば、相互に訪問し合ふ必要はない。彼はさつさと歸宅して奥の間に端坐し、俊子を相手に朗々と高砂を誦ひ初めるのである。これが毎年のきまつた第一日の日課であつた。

ところが今年は珍らしく夫人同伴で、市長夫妻と一緒に公立病院を訪問した。これにはわけがあつた。といふのは、佐藤は昨年の一月二十六日、金拾萬圓を投じて財團法人若松救療會を設立した。それが五月になつて内務大臣から許可され、既に救療事業が開始されてゐた。その氣の毒な患者たちを見舞ふべく、病院行きとなつたのである。

市長の小栗と佐藤夫妻は、齋藤院長に導かれて病室に入つた。部屋の入口にはそれでも正月らしく注連飾があつたが、一歩足をふみこめば、そこは悲しみの坩堝である。自費患者や社費患者たちに交つて、幾人かの救療會患者もゐた。

院長の齋藤博士が、各患者の容態を委しく説明すると、佐藤夫妻はその一人一人に簡單な言葉をかけて慰めた。三十一號室の最後の寢臺に立つたとき、齋藤院長はその患者に向つてそつと云つた。

「小川君、このお方が君の入院費を出してゐて下さる佐藤さんだから、よくお禮を申上げなさい」

患者は二十一歳の青年であるが、肺患の上に肋骨カリヱスで體重は九貫ばかり、眼は奥に落ちくぼ

んで生ける屍のやうな男であつた。彼は院長の言葉をきくと、その落ちくぼんだ眼の底にキラリと涙を光らせて半身を起した。そしてやせ細つた兩手をつき、涙に言葉をどもらせながらお禮を述べた。

「この深い御恩は、生涯決して忘れませぬ。いつの日か志をとげるやうなことがありましたら、この多額の費用のせめて十分の一でもお返しいたします故、何卒それまでお待ち下さい――」

あとの方の言葉は、半ばすゝり泣きに消されてゐた。佐藤はニツコリ笑つて歩みよりながら、彼の頭をなでて云つた。

「決して金のことなどは心配しなくてよい。早く丈夫になつて、君に忠、親に孝を忘れない立派な人間になつてくれ」

佐藤はこの正直な青年に感心した。といふのは、この他にも救療會の患者がゐたのだが、彼等は他の患者に施療であることを知られる心苦しさから、口に出してお禮が云へないでゐた。それらの者はたゞその眼でだけ、許しを求めるやうなおど／＼した態度を示してゐたので、すぐ救療會患者であることはわかつたが、彼もまたわざとそれにふれなかつた。ところがこの小川といふ瀕死の青年だけは恥も外聞もかなぐり捨てゝ、彼の前に泣き伏したのである。俊子夫人は佐藤と院長の後にかくれて、瞼にそつとハンケチをあてた。佐藤は院長をふりむいて、

「齋藤先生、金はいくらかゝつてもかまひませんから、後で再發しないやうに、十分に治療してやつて下さい」

と云ひながら、部屋の人々に輕く會釋して出て行つた。

佐藤たちが出て行つてしばらくたつと、看護婦が白紙に包んだものをお盆にのせて來て、患者たちに配つて歩いた。小栗市長と、佐藤と、俊子の關係してゐる佛教婦人會からのお見舞だと、看護婦が說明した。小川がそつと自分のもらつた包みを開くと、佐藤から二圓、市長から一圓、佛教婦人會から五圓、計八圓が入つてゐた。他の一般患者には、佐藤と市長から一圓宛贈られたやうであつた。

この病院では醫者も看護婦も大變親切で、極力救療會患者に肩身のせまい思ひをさせまいとして、他の患者にそれを祕してゐた。ところが小川は自分からそれを曝露した結果になつた。「あいつは施療か」といつた冷たい眼で見られるのがつらかつたが、それでも自分の感謝を、その人の前で云ひ得た喜びは、何か重大事をなし遂げたやうな心安さであつた。

二三日後に、彼は同室の竹內から、そつと話しかけられた。それによると、この男も救療會の患者であつた。彼は二十四五の青年だつたが、小川以上に骨と皮ばかりで、右の胸に大きな穴をあけられそこから絕えず濃汁が流れ出てゐた。無口でふくみ笑ひをする、ごく氣の弱い男で、もとは活動寫眞

館の樂手で、ヴァイオリンを彈いてゐたのださうである。

二人はそれからすつかり仲よしになつて、よく惠まれぬお互の身の上を語り合つた。語つてみれば相似た境遇である。小川も今まで誰に聞かれても云はなかつた身の上を、この竹内にだけは何もかも語らずにはゐられなかつた。

四國の香川に生れたこと、九歳の年に父母に伴はれて若松に流れて來たこと、父が醬油の行商をしてゐること、小學校を卒業したとき受持の先生に惜しまれて學校の給仕に採用されたこと、友達が中學に入つて制服制帽で歩いてゐるのをみて、自分も中學に行きたいと父にせがみ「身分を考へろ」と叱りとばされたこと、向學心を捨て得ず勘當されて受驗し、好成績で合格したこと、それから大賣出しのチンドン屋や葬儀の旗持ち、新聞配達、夜間の電報配達等をしながら苦學して、二年生まで頑張つたことなど、話は盡きなかつた。

小川の半生はこのやうに多難であつた。しかし彼には少年の夢と若さがあつた。境遇の暗さを反撥する明るさも持つてゐた。しかし二年ばかり前から、事情は一變した。それは弟の大病であつた。弟は骨膜炎で左足の蹠骨を半分も削り取り、關節にはゴム管が八本も通してあつた。一家は貧窮のどん底に落ちた。さうしたなかで今度は彼が發病したのである。暗い日が毎日つゞいた。父も母もめつき

り考へこんで誰も彼も生きてゐるのが大儀になつた。八方ふさがりの袋路である。そこに追ひこまれた一家には、たゞ一つの道しか殘つてゐなかつた。それは彼の妹の身賣りである。

しかし父も母も、娘を賣る位なら、一家心中をした方がましだと考へてゐた。彼も弟もさうだつた。にもかゝはらず、妹だけは父母の歎きを見るに見かねて、心に深く決意してゐた。

「一家の柱の兄さんには代へられません。どうか私に身賣りさせて下さい。さうして兄さんたちを助けて下さい」

身を兩親の前に投げ出してむせび泣く妹をかこんで、父母は勿論、頑是ない乳呑兒まで聲をあげて泣いた。その夜父親は心を鬼にして、知り合の周旋人を訪ね、娘の身賣りをたのんだのである。そして「から云ふ事情だから、なるだけ手數料をまけていたゞきたい」と疊に頭をすりつけて歎願した。

煙管をくはへて、默つて聞いてゐた周旋人はそのとき顔をあげて云つた。

「小川さん、そんな可愛さうなことは止しなされ」

「止したくとも、これ以外に方法はありませぬ」

「あんた、一人の病人だけなんとかなれば、娘は賣らずにすむんだらう」

「えゝさうなんで。第一人だけなら石にかぢりついてもなんとかやれますが、二人の病人をかゝへて

は、どうにもやつて行けませぬのでなあ」

「いや實は昨日聞いたんだが、あの石炭商の佐藤さんがな、なんでも十萬圓とか投げ出して、貧乏人の治療も入院もたゞでしてくれてるさうだ。明日市役所に行つて聞いてみなさるがいゝ。娘は賣らないでもすむかも知れぬからな」

　父親は往きとは違つた輕々した足どりで、結果如何にと待ちわびる我が家に戻つて來た。かうして妹は賣られずにすみ、彼は公立若松病院に入院した。大正十三年十月二十五日のことであつた。

　小川の病氣は日毎によくなつて行つた。彼は心易い看護婦に、絶對祕密を守るからと約束して、入院患者中の救療會關係者を敎へてもらつた。何れも悲慘な境遇の者ばかりであつた。小川はそれ以來不運のみをかこつてゐた自分の過去に、いくらかでも反省のゆとりが與へられるやうになつた。

　ある夜は六十歳位の老人が、息も絶えるばかりの重態で運ばれて來た。またあるときには、十八歳ばかりの少年が十一二歳の妹をつれて入院して來た。天涯にたゞ二人の孤兒であつた。どこの生れの者であるか自分自身も知らない。病院からは病人である兄の食事しか出ない。二人の兄妹がそれを爭つて食べる姿は、顏をそむけずにはゐられなかつた。患者や附添人たちが自分の食事を餘しては、この兄妹に與へてゐた。しかし一週間ばかりで少年は大喀血をし、妹一人を殘して死んだ。兄の棺が病院の裏門から運び出されるとき、それにすがつて「兄ちやん、兄ちやん」と狂つたやうに泣きつゞけた少女の姿が、小川の眼からはいつまでも消えなかつた。少女の姿はそのまゝ病院に見えなくなつたが、人の噂によれば、惠比須神社の境内に興行中の曲馬團に引き取られて、どこかへ流れて行つたといふことであつた。

　またある日には子供に死別した總白髮の老婆が、運びこまれて來た。八十をすぎてゐると思はれたが、やせ細つて枯木のやうであつた。深夜杖にすがつて、コトコトと音をさせながら、便所に通ふ姿は、この世の人とは思へなかつた。

　かうして小川の入院中にも、幾人かの救療會の施療患者が運びこまれて來た。重態で入院するのが多かつたゝめに、半分以上は棺に入れられて裏門から運び出されたが、半數足らずは、全快して喜びの退院日を迎へることが出來た。彼もまたその中の一人であつた。

　二月初旬、奇蹟的にも命を取りとめ、退院した彼の喜びは、大きかつた。恩人佐藤のためなら、命を投げ出しても働かなければならないと、心祕かに期するところがあつた。退院後半年程の間、病院

に通つた。その中全く健康を取戻したので、父の行商を助けて再び街を飛び歩いてゐた。これが入院の朝、近所の人々に生別の合掌をうけて見送られた同一人の彼とは誰に見えやう。入院前に診た町醫は、倅をとめて彼の顏を眺め「俺はとうにお前が死んだものと思つてゐたよ」と云つた位であつた。

その後小川は鐵道員を志したが、診斷書に乙とあつたため採用にならなかつたので、漬物の行商を初めた。市場から菜ツ葉や大根を買ひ求め、それを海水で下漬けにし、更に糠や食鹽で漬け直すのである。毎日それを二つの桶に入れて肩にかつぎ「漬物屋、漬物屋」と呼賣りをするので、一日一圓から二圓近くの收入があつた。

その中に世話する人があつて火藥製造所に働くことになつたが、これはガスで兩眼を痛め長つゞきせず、いろいろ將來を考へた末、時計屋の弟子になつた。間もなくその時計屋は、四國に移り住むことになつたので、彼も主人に從つて四國に渡つた。

＊

永年住みなれた若松を去り、新しい土地に落ちつくにつけても、思ひ出すのは元旦の日の佐藤の姿であつた。もしあの人なかりせば、現在の自分はない、かう思ふと彼は、矢も楯もたまらず佐藤に手紙を書いた。しかし自分の名は書かなかつた。一人前にもならぬ自分として、名乘り出ることがはゞかられたからである。

その後佐藤のもとには「救療會でお世話になつた者」といふ無名の感謝狀が、春夏秋冬に必ず屆いた。初めは氣にもとめなかつた佐藤であるが、數多くの患者中たゞ一人、きまつて感謝をよせてくるこの無名の男に、いつとはなしに興味を持ち、その名乘り出る日を、心待ちするやうになつてゐた。

掘出物

時計修理技術を修めた小川が、若松に歸つて、さゝやかな店を場末に開いたのは、昭和四年の夏であつた。資本のない彼には、高價な時計を仕入れて店に飾ることなどは、思ひも及ばないことで、忠實な修理だけが精一杯の努力であつた。かくて細々と生活を支へ、一家をもかまへたのである。しかし生きてゆくだけが漸くである彼は、まだ佐藤の前に名乘り出る勇氣はなかつた。相變らず春夏秋冬の感謝狀だけを無名でつゞけてゐた。ところが、無名ではすまされぬときが來た。それは佐藤夫人の逝去であつた。

彼が夫人の死を知つたのは、その逝去後數ケ月を經てからであつた。思へば大正十四年の正月元旦に、自分の枕元に立つて、ハンカチを眼にあてゝ同情してくれたあの優しい夫人は、彼の知らない間に忽然とこの世を去つてゐたのである。自分は同じ市内に住みながら、恩人の葬儀にも列しないでしまつたといふ悔恨が、小川の胸をしめつけた。彼は初めて自分の住所姓名を明記し、別府に轉住して

ゐた佐藤のもとに、心からの哀悼を書き送つたのである。佐藤からは折返し次の葉書がきた。それは小川の手にした、佐藤からの第一信であつた。

拜復

小生去月中旬より、豐後湯の平に避暑中、繼母病氣の報に接し、去る十一日歸郷看護仕居候。漸次快方に向ひ居候間、他事ながら御休心被下度候。

小生及亡妻は、人間としての務めを果すべく、努力致居候までに候處、度々感謝の御狀に接し、感激に不堪候。申上ぐるまでも無之候へ共、十分業務に御勉勵、一面合理的のどん底生活をなし、御成功有之度、切望仕候。

小川は時計の修理をしながら、古物商の鑑札も持ち糶市場にも出入りしてゐた。或日一面に汚點のある古ぼけた軸を、四十五錢で買つて來て店にぶらさげた。通りがかりの客がふとそれを見つけて、五圓で賣つてくれと云ふ申込みである。あきれて返事もしないでゐると、十圓ではどうだといふ。彼はびつくりするとともに、賣るのが急に惜しくなつた。

誰かに鑑定して貰はうと思つたが、適當の人がない。その中に、中學で圖畫を習つた藤井と云ふ先生が、大阪の大手前高女にゐるのを思ひ出し、さつそく手紙と共にその軸を送つた。一ケ月程たつて返事が來た。その結果、あの汚點だらけの軸は、有名な池の大雅の眞筆であることがわかつた。その手紙には、細々とその有名な畫家の經歷まで書き添へてあつた。小川はこのとき初めて、大雅堂といふ名を知つたのである。

大雅は享保八年に京都に生れた。父は菱屋嘉右衞門と云ふ扇屋渡世であつた。三歳にして字をおぼえ、五歳にして立派な字を書いたといふ。彼は後年、洛東眞葛ケ原に草堂を結んで、大雅堂と號した。妻は玉瀾と稱し、夫に學んで中々の名手であつた。

大雅堂は畫名大いにあがつたけれども、性來金錢に慾のない夫婦のことゝて、いつも貧乏であつた。客が畫料を持つてくると、入口の水甕を指ざして、それに入れて下さいと云ひ、商人が勘定を取りにくると、勝手にその中から持つて行つてくれといつた調子であつた。

ある人が大雅を訪問して遲くなり、泊ることになつた。玉瀾ののべてくれた蒲團にくるまると、その襟に少し垢がついてゐる。その客は「はゝあ、この家でも時には泊り客があると見えるわい」と思ひながら、八疊の間と一寸した取次の間だけの、小さな家を見廻した。しかもそこには、紙や絹や書物やが一杯で、夜具をひろげる場所もないやうな有樣であつた。

客は夜中に眼を醒ました。厠に行きたかつたので、勝手がわからず「御主人、御主人」と大雅を呼んだ。「はい〳〵、只今」と云ふ聲がすると、次の間の毛氈の下から、ひよつこりと大雅が轉がり出た。びつくりした客は、玉瀾の見えないのを不思議に思つて「御内室は」とたづねると、紙や絹の積み上げた中から、大雅夫人の頭がモツクリと出て來たといふのである。

かう云ふ生活の中に精進をつゞけて、遂に日本の文人畫を創成し、一代の師宗と仰がれた。本朝畫人傳によれば、『大雅が最も得意としたのは山水の圖であつた。人物も畫いたが、その形狀が甚だ奇であつた。山水でも人物でもすべて瓢逸怪奇の筆であつた。變幻出沒捕捉すべからざるものがあつた。一見極めて醜陋の畫のやうで、よく〳〵見ると、その筆意の深遠と氣品の高さとが、人の心を撲つのであつた』とある。彼の名は遠近にとゞろいて、その畫風は一世を風靡したのである。

小川が四十五錢で買ひこんだ軸物は、この大雅堂の作品で、京都東山の大雅堂の後裔も、初代の眞

筆であることを明言した。彼はさつそくこの由を佐藤に報じた。すぐ別府から葉書の返事が來た。

軸物は眞物と決定候趣、御喜び申上候。これは貴下の御精神宜敷ため、神より授けられたものに候。決して安賣なさゞる事を御勸め申上候。何れ大阪か東京にて處分すべきものと存候。寫眞でも撮り置かれては如何に候や。若し寫眞をとれば、裏面にその長さ巾等も記入し置かれ度ものに候。

からして親切な注意をしたにも拘らず、昭和十二年の秋、小川は子供と一緒に病床に呻吟する身となり、背に腹はかへられず、この軸を百圓で賣つてしまつた。しかし小川の妻には、これはどうにもあきらめられぬことであつた。彼女は終日、賣り拂つた軸を忘れかねては貧窮の身をかこち、この事を中心に、夫婦の間にきまづい沈默の續くことが度々であつた。

彼女は遂に意を決し、軸を買ひ戻さうとして買手の家を訪れた。百圓で賣つた軸は、百五十圓でなければどうしても戻してはくれないと云ふ。彼女は家中のめぼしいものをすべて質入した。それでも足らないので、姉や親戚にも哀願して漸く百五十圓をとゝのへることが出來た。そして交渉の結果、百三十圓で我が家に引きとることが出來た。この事を知つた佐藤は、十一月十九日に次のやうな手紙を書いた。

大雅堂の軸、一旦手離され候處、御買戻し相成候趣結構の事に候。右買戻しのため、入質まで相成候事は、餘りにも氣の毒に存候に付、無利子無期限にて、金百五拾圓御立替申上度候間、軸物を紙包にして持參致し、山手通七丁目、山本魯一郎氏に預け、小生から同氏に送り屆けおきたる送金小切手を御受取相成度候。

小生實は十分御打合せ申上候上にて、右樣取計ひ度存候へ共、明後午後九時當地發上京仕候に付、其暇無之何卒御諒承被下度候。何か御話も御座候はゞ廿一日午前十一時五十一分小倉着、同五十三分同驛發の二等車に乘車致居候に付、日豐線上りのプラットホームまで御出被下度候。

軸物は幸便の節當方に取寄せ御預り申上げ、御入用の節は何時にても御渡し可申上、尙若し望み人有之候はゞ御世話可申上候。前記壹百五拾圓にて質受け等も相成、商賣の資金にも被成度、小生は心掛けよき貴下の御窮狀を見るに忍びず、右樣取計ひ申候。

小川夫婦はこの手紙を押しいたゞいて感涙にむせんだ。さつそく山手通りの山本を訪れて小切手を

受取り、住友銀行支店から百五拾圓の金を受取つた。久しぶりに、夫婦は晴れやかな顔を、お互に見せ合ふことが出來た。

翌々日の朝、小川は粗末な果物一籠を買ひ求め、小倉驛の日豐線ホームに待つてゐた。手には生れて初めて買つた門司までの二等切符が、しつかりと握られてゐた。汽車がはいつて來た。小川はすつかり緊張して恩人の顔を見逃すまいと注意した。すぐそれとわかつた。まだ止らぬ二等車の窓から、老紳士が上半身を外に出して「小川君、小川君」と呼んでゐる。

生れて初めて二等車にはいつた小川は、あたりの空氣にどきまぎして、ろくに挨拶もせぬ中に、發車のベルがなりひゞいた。

「さあ小川君、發車だ。委しい話はあとから手紙でしよう。早く降り給へ。體に氣をつけてな」

「ハッ、門司までお供さしていたゞきます。御同車をお許し下さいませ」

小川は手にしつかり握つてゐた靑切符を、佐藤の目の前に差し出した。

「さうか、ぢやこゝにお掛けなさい」

小川は恐る恐る果物の籠を差し出しながら「お口にも合ひますまいが遠路のお旅故……」と云ふ中に、胸せまつて泣き出してしまつた。

門司で連絡船に乘るとき、佐藤は小川の肩に手をかけて、彼の顔をまじ〱と見ながら、しみ〲とした口調で云つた。

「君の大事な一日を費さしてしまつてすまなかつた。早く歸つて仕事してくれよ」

側につゝましく立つてゐた喜代子夫人も微笑みをふくんだやさしい聲で「御成功なさいませ」と激勵した。小川は白波をけたてゝ關門海峽を遠ざかつて行く連絡船が向岸につくまで、棒のやうに立つたまゝ見送つてゐた。

大雅堂の軸をあづかつた佐藤は、しきりと買手を物色した。大阪、京都、東京と心當りを探してみたが、思はしい買手はなかつた。なんといつても一面の汚點と貧弱な表裝が買手のつかない原因らしかつた。それで東京一流の表具師に依賴して、汚點を拔いて表裝し、立派な箱に納めた。しかし一且汚點拔きしたものは、どうしても保存が惡い、それらのために五十圓の費用をかけたものゝ果して賣れるものかどうか危ぶまれ、少からず佐藤もあせり、また氣をくさらせる日が續いた。

支那事變の勃發以來、生活合理化の運動は全國民の輿論となり、生活館の理事長である佐藤は、席暖まる暇もない程多忙であつた。その佐藤が、この大雅堂の軸のためには、我がこと以上の熱心さで

奔走した。漸く昭和十三年の十月になつて、手取二百五十圓の買手がついた。これが賣頃と思つた佐藤は、さつそく小川に電報を打つた。

タイカド　ウノエ五〇エンノウリアゲ　ニテハナスカ」セイカツカンサトウ

折かへし小川からは「一切おまかせする」と云ふ返電が來た。佐藤は直ちに周旋人に軸を渡して代金を受取ると、その夜委細を小川に認め、その中に次のやうに書き添へた。

小生は少しにても高く賣却し、御喜び被下候樣にと相當努力致し候へ共、何さまキズ物のことゝて、値が張り申さず、世話甲斐も無之落膽仕候。貴下も唯々御失望の事と御察し申上候。

最初、周旋人には、參拾圓の周旋料を拂ふことになつてゐた。ところが佐藤と小川の關係を知つた周旋人は、車賃として十圓だけ受取り、二十圓返してきた。それ故小川の手許には、佐藤から七十圓の金が送られてきた。これは當時、窮乏のどん底にあへいでゐた小川の一家にとつては、感謝しきれない惠みの慈雨であつた。

その窮乏といふのは、この年の夏、小川の住むあたりに、子供の痲疹が流行し三人の子供がそれにかゝつた。幸に上の子二人は全快したが、誕生を迎へたばかりの霞子(かすみ)だけは、なか〳〵なほらなかつた。漸くそれがなほりかけたと思つたら、今度は體全體に吹出物が出來、たへがたい痛みと痒さに、この世のものとも思はれぬ聲をふりしぼつて、夜もすがら泣きつゞけた。

彼の妻はその看病に身も心も綿の如くに疲れ、終夜泣き叫ぶ幼兒のために、假寢の夢さへ結べなかつた。その上、一家の柱石である小川が、強度の腦病にかゝつて臥床し、十日も二十日も仕事の出來ない日がつゞいた。收入は一錢もなく醫療費はかさむばかりである。米櫃もからになり、醬油瓶もからになり、薪もつきてしもうのを見ては、ぢつとして寢てゐることも出來なかつた。心を鞭打つて仕事着を着てみても、頭は割れるやうに痛み、眼が廻つてどうすることも出來ない、遂に床の上にくづれて男泣きに泣く始末。

米櫃の底をはたいてつくつた、重湯のやうなおかゆを食べて遊びに出た子どもたちは、すぐ歸つて來て、「お母ちやん、御飯、御飯」と泣いてせがむのである。一間だけの住居にある持物は、殆んど

質屋と屑屋に渡してしまつたところ、今まで苦しみと悲しみにたへて來た彼の妻は、突然ゲラ〳〵と笑ひ出した。發狂したのである。

醫者がきて診てくれたが、相當長い期間かゝるだらうとのことで、「とりあへず藥をあげる」と藥をおいて行つた。彼はそれを妻の口に入れやうとすると、妻は狂ひながらも病夫に飲ませようと夫の口に戻すのである。

二人の子を學校に出さねばならず、狂へる妻を見張らなければならない。その上全身吹出物の幼兒の手當は勿論、家内中のすゝぎ洗濯までしなければならない小川は、幾度か妻を殺し、病兒を背に、二人の子を左右に抱へて海に飛び込まうと思つたか知れない。遂に思ひあまつて別府の佐藤に速達便で窮狀を訴へた。

昨夜深更速達便入手仕候。只今は午前五時發の列車中に候。本日は立屋敷神樹會、明日は本城の愛郷會に臨み、十五日に若松救療會の評議員會に臨み可申、同日午前十時少し前、若松市役所に御出被下度、何とか盡力可仕候。

若し御出でが出來ねば十時頃御電話被下度候。

小川が洗ひざらしの茶ッ葉服を身につけて、市役所の前に立つてゐると、恰度午前十時佐藤が足早やにやつて來た。

「一寸こゝで待つてくれ給へ」

と社會課の前の廊下で云つて部屋に消えたが、間もなく出て來て小川を應接室に招き入れた。そこには社會課長がどつしりと椅子にかけてゐた。

「課長さん、救療會が出來て十六年になりますが、その長い間つゞけて感謝狀をくれたのは、この人だけですよ。僕は小川君の心の美しさに、ホト〳〵感心してゐます」

「いや全く同感です。しかし佐藤さん、私はまたあなたがさうやつて一生懸命、小川君のために奔走してゐられるのを見て、それ以上に美しいと思ひますよ」

「なあに、あなた、あり餘るものがつくすのはあたり前ぢやありませんか、しかしまた一方、そのためおかげを被つた者が感謝するのも、當然のことなんですね。ところがその兩方のあたりまへが、一向に實行されないから、世の中がむづかしくなるんですな。アハハ……」

そこに係の者が、書類を持つてはいつて來た。

「小川霞子を治療すべし」

といふ命令書の下に、柳川市長の印がべつたりと押してあつた。

霞子は七ケ月の治療で、大部分よくなつたが全治とまでは行かなかつた。妻の發狂も、小川が水天宮に滿願の當夜、不思議に全治した。この間佐藤は、屢々手紙を書いて、不遇な小川を激勵した。

　霞殿も病氣全快、一日も早く退院あらん事を祈り居候。人生に病苦と貧苦位苦痛のものは無之、小生は二者を經驗致し候ものに御座候。貴下も是非此兩者を征服し、一家擧つて健康に、家計にも餘裕出來候樣、協力して御努力相成度切望仕候。

またある日には、東京から、佐藤としては珍らしく長い次のやうな手紙を出した。

　小生及妻の風邪につき、御心配を掛け候處、幸ひ全快致候に付、去廿三日出立、廿四日着京、多忙に暮し居候間、他事ながら御安心被下度候。

　種々詳細に御通知被下、大いに安心仕候。奥樣は尙御病床にあられ御末子も尙通院とありては、中々の御心配、御長男の保育園預けは大いに安心なれども、尙十分の御働きも出來間敷、御同情申上候。

　併し奥樣も其內御全快相成可申、御末子も追々御快方の趣に付、近く皆々樣御元氣になり、貴下も自由に働きが出來、愉快なる御生活が出來申すべく、それを樂しみに御辛棒御努力相成度、切望仕候。

　御性格より見て、人の世話になる事は避けられ候こと、誠に結構にて、自立程貴きものは無之候へ共愈々御困りの節は、赤十字、救療會其他の方法も有之候に付、それを利用され度候。而して一家擧つて元氣に愉快に生活され、若し人の世話が出來る樣になれば、大いに世話被成候事は、尤も快心の御事と存候。

　小生は貧家に生れ候ため、學生時代は親戚五軒より四年半に亙り、二軒が五拾錢宛、二軒が三十錢宛、一軒が二十錢宛、卽ち每月一圓八十錢宛の補助を得候處、小生近年幾分の餘裕出來候に付、各家に對し逆に數千圓宛の補助をなし、昨年は更に右五軒に各壹萬圓宛を感謝の意味にて贈呈致し大いに喜ばれ居候。

　かくの如く御世話になつても、數十倍數百倍の謝恩を致す事を得ば、頗る愉快と存候に付、困つ

た時多少の世話になる事は餘り氣になされぬ樣、致され度ものに候。

佐藤はなんとかして、小川が必要以上に世話になるまいとする頑固さを、打ちくだからうとした。同時に、病み勝ちなこの一家に、榮養知識を注ぎ込むことも忘れなかつた。

病氣に打勝つには精神が尤も大切に候へ共、胃腸を健全にして榮養を採り、抵抗力を造る事が必要に御座候。從來の如き、肉や卵や牛乳よりは、却つて鰯の干したるものを骨ごと食ふことや、大豆若しくは其製品を始め菜食で結構、只咀嚼は十分せねば相成不申候。御參考のため「徹底咀嚼と玄米食や輕搗米食の實行を勸む」なる小生の書きたる小冊子を贈り候。御參考に相成候はゞ仕合せ可申候。

贈物などは、一切御見合せ願上候。

香煙

「小川君、大事が出來たぞ、びつくりするな」

大きな折鞄をかゝへた高橋高女の清水教諭が、突然露路裏にある小川の宅を訪ねてきて、表から大きな聲でどなつた。清水は、小川が中學二年のときの體操の教師で、それ以來目をかけてゐてくれるのである。

「先生、大事つて何ですか」

「驚くなよ、昨夜佐藤さんが急性肺炎で亡くなつたんだ。惜しいことをした。まだ七十三歳だつたつてなあ」

「ホ、ホ本當ですか、先生！」

「本當とも。ほれ、福岡日日新聞に寫眞が載つとるぞ。(戸畑の佐藤與助氏も風邪を押して別府に急行)とあるぢやないか」

小川は瞬間、目の前が眞暗になつた。つい二週間前、元氣な便りをくれたあの恩人は、もうこの地上にはゐないのだ。さう云へば、昨夕何氣なし家内に「今日佐藤さんに羊羹を送ればよかつたな」といつたら「さうおつしやれば、買物に出たとき買つてくるんでしたのに」と話しあつたが、丁度それが逝去された頃に當る。小川はそつと顔をあげて、部屋の隅の棚を見上げた。そこにはいつか古新聞から切拔いた佐藤の寫眞が、粗末な額縁にハメこんである。それは『生活費三割切下の提唱』を放送したときの佐藤の寫眞である。小川はそれを包紙の古新聞から發見し、安物の額縁に入れ大事に飾つておいたのであつた。

その寫眞は、微笑むが如く前方をみつめてゐるが、今にも小川に語り出しさうであつた。彼は風邪で數日床についてゐたのであるが、急いで藥瓶を持つて停車場にかけつけた。

別府の佐藤邸につくと、玄關にはたくさんの履物が竝んでゐて、足早に行きゝする人の顔には、ひそかな憂がこめられてゐた。丁度通りかゝつた紋服の婦人に、小川は未亡人への面會をたのんだ。待つてゐると、近くの葬儀事務室と書いた部屋から一人の紳士が出て來て、小川に「御用は」ときいた。彼はうや〳〵しく頭を下げて、未亡人への取次ぎをたのむと、じろ〳〵と彼を見ながら「奥様は病氣で臥せてゐられるから、お會ひになれません。そこの弔問簿に記帳して御引取り下さい」と云ふ冷やかな返事である。彼はハツとしてわが身を見廻した。なるほど、あまりにみぢめなわが姿であつた。浮浪人と見違へられても仕方はない。しかし何としても御燒香だけはしたい、さう思つて侚懇願してゐるところに、先程の美しい婦人が未亡人を伴つてきた。そしてすぐ佛間に通されたのである。

廣い佛間には、正面に黒リボンのついた故人の大きな寫眞が安置してあつた。香煙がいくすぢも、靜かに立ち昇つてゐた。小川はその部屋の片隅で、いつまでもいつまでもすゝり泣いてゐた。

その夜七時ころ親族一同が火葬場に御骨拾ひに出かけた。門前に數臺の自動車が竝んでゐたが、小川は親戚でもない自分が、間違つて近親者の車に乘つては失禮に當ると思ひ、遠慮して立つてゐた。ところが側の車の扉が開いて、あの親切な紋服の婦人が「さあどうぞ」とすゝめたので、それに乘りこんだ。すぐ後から立派な紳士が乘りこんできた。喜代子未亡人が、小川がまご〳〵してゐるのではないかと心配して「小川さん、小川さん」と呼んだ。小川が「はい、こゝに乘つてゐます」と答へたので、車が一齊にすべり出した。

小川は車の中の親切な二人が、故人とどういふ關係の人であるかを知らなかつた。それが佐藤家の

嗣子、明治專門學校教授の佐藤與助夫妻であることを知つたのは、ずつと後になつてからであつた。

御骨を拾ふとき、小川は灰の中に埋れてゐた一片をそつと懐紙に包んでたもとの中に入れた。御骨が歸ると親戚一同の燒香があつた。小川はみんながすんだ後で燒香する積りで隅の方に坐つてゐた。ところが突然「小川さん」と呼ぶ聲がした。誰も立たない。小川は自分でない他の小川と思つてゐたのである。

「小川輝男さん」

と呼ばれて、初めて自分だとわかり「はい」と大きな返事をした。そしてすぐ、その場にふさはしくない聲を出した自分のうかつさに氣がついて悔いた。しかし、それは決して、その場の空氣をかき亂したものではなかつた。むしろその大聲が、人々の胸に、更に大きな悲しみを、まざ〳〵と呼び起したのである。

一週間後、佐藤の生地折尾町の木城で埋葬式が行はれた。小川はそれにも參列し、野邊の送りにも加はつた。そして心ひそかに、毎月の墓參を地下の佐藤に誓つたのである。

彼は火葬場から拾つて來た佐藤の骨を背負つては、篠栗の新四國靈場を巡拜し、故人の冥福を祈ることを忘れない。

「身はこゝに心は信濃の善光寺、導き給へ彌陀の淨土へ」

巡拜者たちの御詠歌に交つて、小川もまたあの元旦以來の心の光であつた佐藤の靈に、心からの合掌を捧げるのである。

人情紙の如き世の中に、さしたる事も不致に係らず、恩に着て常に感謝の通信に預り、只々感激に堪へず候。

貴家病人の多きは何故に候や、或は家に日光が入らぬとか、空氣の流通が惡いとか、濕つぽいとかの原因には無之候や。飮食や運動には、十分御注意相成候事と存候。よく〳〵御研究相成度、御父上樣も御病氣の趣、御困りの事と存候。來る一月、四國の御歸りに御同伴の上當地へ入湯御豫定の趣、御孝心に感入候。其節は是非御立寄相成度候。

これは佐藤が逝去の二週間前、小川に宛てた便りである。小川は佐藤から新榮養法を敎へられて熱心な咀嚼の實行者となり、生活合理化の實踐によつて、生活も追々立直りつゝあつたので、多年の念

頤である老父を、その生地四國の漁村に伴ひ、歸途に別府の佐藤を訪れるつもりであつたが、その佐藤は小川がこの計畫を果さぬ前に、幽明境を異にしてしまつたのである。小川の心は重かつた。

苗圃

家訓四十四ヶ條

佐藤慶太郎は、遠賀川の流域で生れた。遠賀川は英彦山の麓に源を發し、筑豊平野を北流して響灘に注ぎ、その流域に筑豊炭田といふ石炭の寶庫をもつ川である。この遠賀川から洞海灣に、一條の運河が掘り割られてゐる。有名な栗山大膳の遺業と傳へられてゐる堀川である。このほとりで佐藤は生れた。

今でこそこの一帶は、西日本の心臓部と云はれてゐるが、佐藤の產聲をあげた頃は、靜かな農村であつた。洞海灣を圍繞する五大都市も、またその空を掩ふ煤煙もなかつた。

石炭を積むため、日夜喧騷をきはめる無數の船のきしめきもなく、のどかに堀川を上下する石炭舟が見られる程度であつた。

この靜かな本城村、委しく云へば福岡縣遠賀郡折尾町本城——折尾町に合併されたので——が佐藤家墳墓の地である。

本城の佐藤家は、由緒ある豪農であつた。明治維新までは附近三十六ケ村の大庄屋を、代々つとめてゐた家柄である。

その祖先は藤原秀郷の後裔、佐藤繼信から出てゐる。繼信は人も知る源義經四天王の一人で、屋島の戰に主君の身代りとなり、平敎經の勁弓の前に斃れた。繼信の後裔又三郎秀久は、時の執權北條高時の命に背き、豐前國中津郡伊良原村に配流され、白川姓を名乘つた。その後白川信元の弟孫三郎信經は、分家して筑前國遠賀郡本城村に移り住み、伊良原姓を名乘つた。天正十七年のことで、これが佐藤家の始祖である。

かくて伊良原家は、代々本城の庄屋をつとめた。その第十一代が又三郎信英で、慶太郎の孝曾祖父に當る。この信英は佐藤家中興の賢祖で、官民の信任厚く遂に大庄屋に推された非凡の人物で、天保九年七十三歳で逝去するまで、鄕土の指導者として大きな働きをした。天明六年と寛政四年の凶作には、大規模な窮民の救助を行ひ、當局から褒賞されてゐる。伊良原姓を先祖の佐藤姓に復したのも、この信英の時代であつた。

信英には多くの子女があつたが、慶太郎を中心にその系圖をたどると、父方も母方も信英に至るのである。即ち信英の娘婿、信通は十二代庄屋をつぎ、その子信里は十三代庄屋で、その三男孔作が慶太郎の父である。

また信英の子の佐八郎は、養子となつて能美家をつぎ、その娘ないをは孔作の妻となつて慶太郎を生んだ。慶太郎は濃厚に、信英の血を受けたのである。

信英はその六十五歳の文政十三年六月に、後世子孫に對する遺訓を書いた。それは四十四ケ條からなる處世訓で、家訓であり、遺言であり、子孫への宣言である。四人の男子に同文のものを與へたらしく、如何に子孫を愛し、大なる抱負と確信とを以てこれを傳へたかは、その最後に「我は血判をおしてゆづりおくものなり、先祖の精血おろそかにすべからざるもの也」と記してゐるのを見てもわかる。

また如何に用意周到に思ひめぐらしたかは、遺訓の最後に多くの空白を殘し「子孫は一ケ條二ケ條にても追加し、子孫に渡すべし」とあるのを見てもうなづかれる。

この遺訓を讀むと、佐藤の生涯が成程とうなづかれる。この先祖を現代に生かしたならば、恐らく

佐藤と大同小異の一生を送つたであらう。瓜の蔓には茄子はならぬといふが、この信英なくして、佐藤慶太郎は生れなかつた。佐藤の精神的苗圃として、この家訓の大要を紹介しておかねばならぬ。

眞先きにこれを書き殘す理由が書いてある。

我十歳にて父にはなれ、母の手に養育せられ、今年六十五歳になり、餘命短かきを悟れば、若年の頃より今にいたるまで、世の中の盛衰、智愚の計らひなど、見おぼえ聞おぼえしことども、末々の子孫に傳へ置きぬ。文筆は拙なれども、實事においては天地鬼神も照覽あるべし。

むかし今川了俊は名將におはして、子孫に遺言を與へ給へりしを、子孫は遺言に違ひ、終に國民を失ひ、我が身を亡し、血統斷絶せしは近きところの能き手本と思ひ、我が申し殘すことども、いさゝかも殘さずして用ゆべし。

から子孫に一本釘をさしこんでから、おもむろに三大恩を說き始める。

天地、父母、國君、三つの恩澤を忘るべからず。父母ありて我が身を生じ、天地ありて我が身體立つ。國君いまして身治り、家內をはごくむ。其餘はよく思ひめぐらすべし。

次に細々と數ケ條にわたつて、神佛への信仰を說く。例へば正月元旦先づ產土神社に參詣し、それから先祖の廟所に詣でよとか、墓は二度の彼岸、盆前、十二月二十九日には必ず掃除をせよとか、行き屆いた注意がある。また手習、學問、算法、謠等は、人に勝る必要はない、たゞ身分より少し過分に學べ、農業第一、稽古事は第二にせよとのべてゐる。

假初にも虛言謀計すべからず、たとへあしくとも正直に實事を云ふべし。空言謀計は、其場其場は都合もよく美しけれども、行末はよろしからず。實事は先き不都合にして末よろし。

これを佐藤の生涯、特にその商取引と思ひ比べると、興味津々たるものがある。約束を違へるな、輕重にかゝはらず打ちすてゝはならぬ、早くそのわけを話して了解を得よと、至れり盡せりである。

一族は勿論、他人なりとも親切をつくし、少しもかざりがましく不實な事すべからず。

無實の難に逢ひたりとも、其座にて申譯申開きは未練に見ゆるものなり。心靜かにして時を待つべし。實事一度はあらはるゝなり。又人の虚言謀計を悄むべからず。

自らには嚴に、他に對しては寛、人生六十路の旅に得たすみ切つた信英の心境である。このあたりから、家訓は經濟問題に及び、徹に入り細に亘つて、誤りなき生活の道を說き示さうとする。

金銀米錢を强て好むべからず。又嫌ふべからず。我身を苦しめし辛抱の金銀は久しく寶となり、謀計非道の米錢は久しく留らず、道を守りて金銀を好むべし。

田畑もあまり餘分には不好、丈夫に五六拾俵位より貳百俵ばかりの餘米にて事すむなり。百俵の身上は、六七拾俵にて年中立行くやうに仕法相立、かく別の非常の外は入りこさぬやうにして、年々少しづつ餘財出來ますやうに工夫すべし。餘米又は取替錢など多きは、却つて人間の身上の悪しくなるものなり。今少し足らぬといへば心引立るゆゑ、追々餘財も出來るなり。貧乏は心のしまりによるべし。

餘財ありとも商賣筋又は貸方等、手びろく致すは、百姓の本意にあらず、行末却つて身上の衰微となる事あり。年々すこしばかりの餘財は、無きものとして貯へ置き、自然の時の用に立つべし。安氣にして又丈夫なり。

更につゞいて凶年への備へを說く。そのための儉約をすゝめるが、吝嗇をいましめ、借錢の出來た場合の處理法を敎へる。それは、思ひ切つて居宅を賣拂へといふのである。

家訓は一轉して農事の注意に及び、害蟲の驅除方法、それに必要な油の買ひ方、また鹽の買ひ方を敎へ、更に名譽職は自分から求めてはならない、「事をはかるは人にあり、事をなすは天にあり」と云ふ格言を肝に銘ずべきであるといましめる。

またバクチ、カケ等の勝負事は、短氣我儘同樣、身を亡ぼす基だから、注意しても改めないならば兄弟か一族から、當局へ追放を願ひ出ろと强硬に命じ、借金をするな、投機をするな、小作人、下人はあはれみ、ゆめゆめ無理非道はすべからずと結んでゐる。

子供が大勢あつて別家させる場合は、幼年の時からその子の分として、餘財を引わけ備へておけ、

さうしておかないと、双方共困るときが來るぞと警告を與へてゐる。

嫁取り婿取り、娘を他家につかはすとて、身上不相應の衣類食物を始め、いろ／＼費がましき事すべからず、先かたにも能く引合ひ相はからへば双方のためにて、時の風儀に毛頭かゝはるべからず。

藏、脇屋の普請は望のまゝにすべし。居家は風ころびせぬやうに丈夫にして、狹く粗末なるをよしとす。

子孫に金錢を讓らんよりは、家業をよく敎へゆづるべし。

體驗を通してのかうした訓誡が、綿々と書き綴られてゐる。佐藤の一生は、この聰明な祖先の言葉をそのまゝに、實踐に移したものであつた。何れにせよ、佐藤慶太郎には、たしかに信英の再來を思はせるものがあつた。

年始盃

本城の佐藤家は、今十四軒になつてゐる。明治以來職業の關係上他郷に移り住む家も出來たが、毎年初めにはこゝに集つて來る。日は一月十五日を中心としたその前後の日曜日である。

一同揃つて墓參をし、歸つてから年始盃を取りかはす。その部屋には先祖織信公の像をかけ、その前に坐つて過去一年間の話合ひをし、年始貯金をするのである。これは祖先の祀り、共同佛事等の費用にあて、資產に應じて出すことにしてゐる。この會は表面年始盃と云つてゐるが、實際は先祖祭を機會に、その祖先の前で行ふ忠告會で信英の時代から始つてゐる。素行のをさまらなかつた者、非人道な行のあつたものに對しては、靜かに反省を促し、大酒を飲む者には、控目にすることをすゝめ、家運の傾いた者には、みんなでその建直しの助言をする。またその反對に、社會公共のために盡した者は、みんなでそれを褒めたゝへるのである。

年始盃の日には、なほ他にも一つの行事がある。それは共同貯金である。この貯金は日露戰爭のこ

ろから戰爭記念として始めたもので、この方は各家平等に月額十錢を積み立てゝゐる。これは各家平等であるが、年始貯金は資産に應じて出すため、各家に等級がつけてある。この等級は、三年に一度改正して、實際に即應するやうに考慮してある。

この共同貯金は永久積立で、國債を買ふことが原則とされてゐる。たゞその利子の一部は、年始盃、春日祭、共同佛事等に使用することが許されてゐる。

これらの共同行事には、必ず二軒の當元がある。當番制で各家が順にそれに當るのである。すべての行事には、簡素な獻立がきまつてゐて、無駄な手數がかゝらないやうに工夫されてゐる。

本城には鄕社の八劍神社がある。その境内には佐藤家の祖先を祀つた春日大明神の祠が併祀されてゐる。これは社寺奉行の許可を得て、佐藤一族の建立したもので、毎年三月十五日に春日祭をする。一族中の者は、老も若きも男も女も、およそ腰の立つ程の者はみなこゝに集る。玉垣の中にウスベリを敷いて坐し、午餐を共にして午後四時ころまで、樂しい團欒の時を持つのである。この日の獻立は取魚三つ、お吸物一つ、酒二升で、それ以上は絶對に飲むことが出來ない。子供たちのためには、別に菓子などを用意する。この時の相談で、共同佛事の日がきまる。

共同佛事は大抵五月頃である。これは二十年程前から始めたもので、本家の當主信隆等の主唱であつた。それまでは一軒毎に法會を營んでゐたので、招く方も大變であるが、招かれる方も幾度も出かけなければならなかつた。これを合理化し、更に佐藤一族の親睦を密にし、併せて斷絶して祭主のない佛を同族で祀らうといふことから、計畫されたのであつた。

佐藤一族の寺は、八幡市穴生にある淨土宗弘善寺である。この共同佛事を相談すると寺も大贊成、それで佐藤一族から、七十人分の會席膳が寄附された。料理一切は寺で引受けてくれるから、當元は各家のお客數を調べてそれをお寺に通知すればよいのである。

三年忌とか、七年忌とか、その年のものはすべて共同佛事に合せるから、毎年四五軒ある。多い年には半數の七軒のこともあつた。それらの家が、それ〴〵の關係者を招くので、大抵五六十人位の集まりになる。膳部代は、その人數に應じて按分し、その費用は一人一圓程度の簡素なものにきめてある。

十月十日と十一日には、八劍神社の秋の大祭が行はれる。十日には本城から御神樂があがり、十一

露光量違いの為重複撮影

少年時代に住んだ家

父の隱居所として建てた本城の家

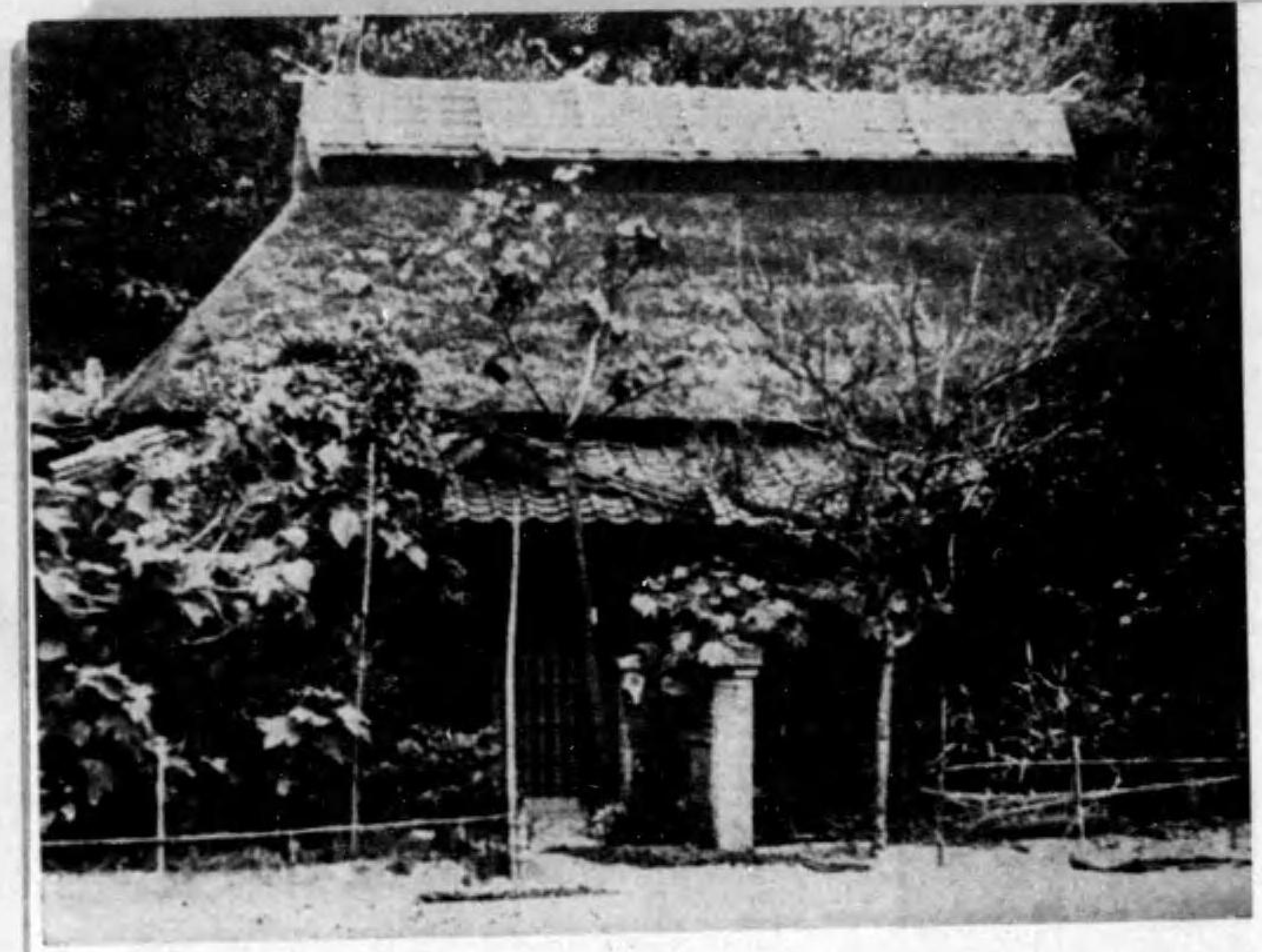
日には佐藤一族からの牛神樂が春日宮に奉納される。その時には親族一同玉垣の下にならんで、これを拝觀するのである。それが終ると、佐藤一族から供へられたお供物は、一齊に集つた會衆に分け與へる習慣になつてゐる。それ故、その日は特に參詣人が多く雜沓するのである。

後年佐藤が、生活改善に興味を持ち、晩年の殆んど全部をそのために費して悔いなかつたのは、決して偶然ではなかつた。かうした先祖以來の長い傳統の素地が、備へられてゐたのである。

露光量違いの為重複撮影

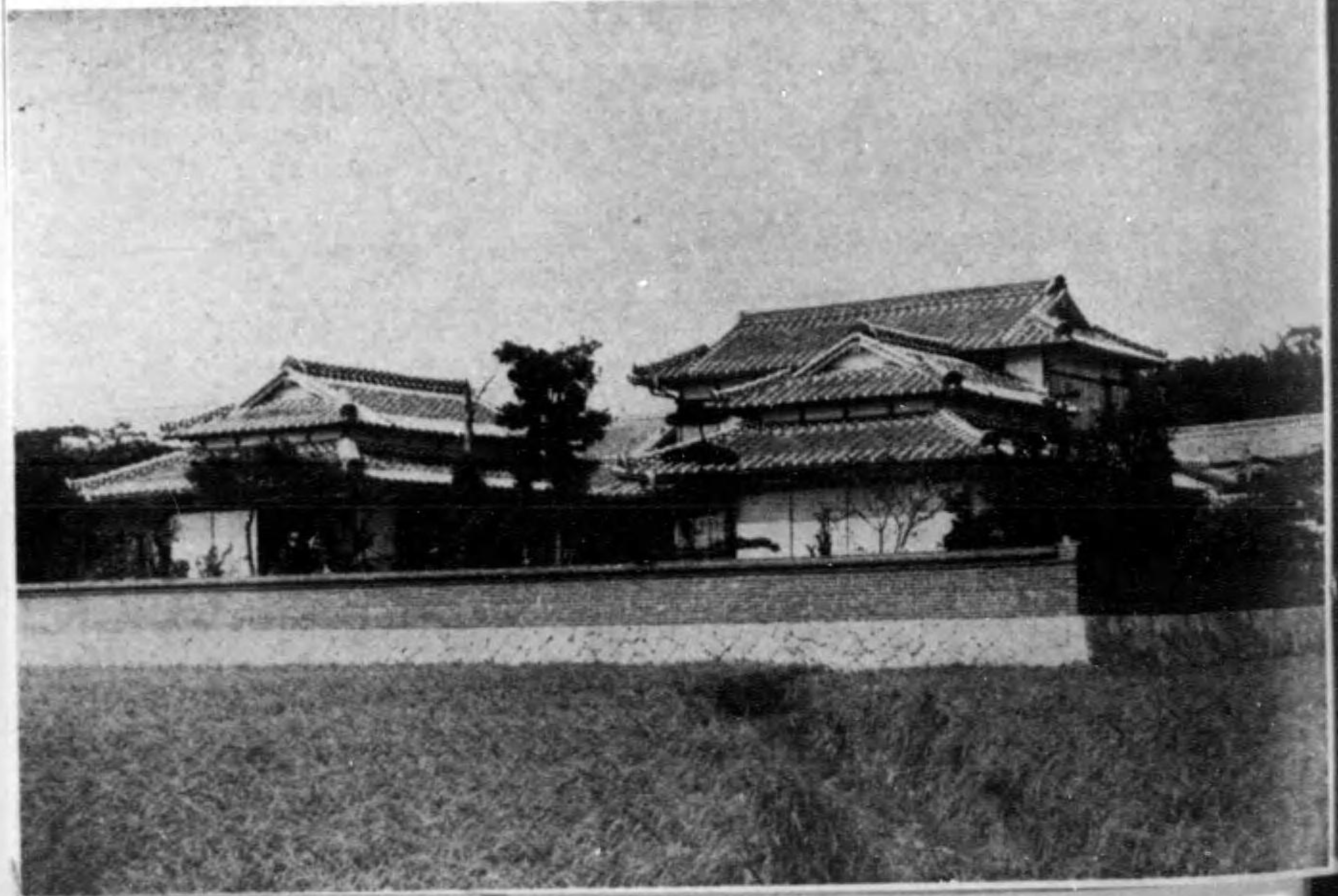
日には佐藤一族からの半神樂が春日宮に奉納される。その時には親族一同玉垣の下にならんで、これを拜觀するのである。それが終ると、佐藤一族から供へられたお供物は、一齊に集つた會衆に分け與へる習慣になつてゐる。それ故、その日は特に參詣人が多く雜沓するのである。

後年佐藤が、生活改善に興味を持ち、晩年の殆んど全部をそのために費して悔いなかつたのは、決して偶然ではなかつた。かうした先祖以來の長い傳統の素地が、備へられてゐたのである。



少年時代に住んだ家

父の隱居所として建てた本城の家



露光量違いの為重複撮影

父と母

地方の豪家に生れた慶太郎は、少年時代惠まれた生活を送らなければならない筈であるが、事實は生れながらにして貧窮のどん底にあつた。それを説明するためには、彼の父母の結婚にまでさかのぼらなければならない。

慶太郎の母は、八幡市小嶺の能美家の出である。能美家は屋號を室屋といつた。當時『小嶺の室屋か、行事の飴屋か、宇の島の萬屋か』と、近傍の大分限者と並びうたはれたことを見ても、相當の富豪であつたことがわかる。（行事は福岡縣行橋町に、宇の島は大分縣中津市附近にある）

能美家は先にもちよつとふれたやうに、信英の子の佐八郎が養子となつて繼いだ家で、四男六女があつた。長男の正左衞門の代は相變らず隆盛であつたが、その子儀平に至つて、全く淪落してしまつた。儀平は人一倍頭のよい人であつたが、どうしたことか壯年をすぎて脱線し、贅澤三昧の生活をしその上相場に手を出して、さしもの財産をまたゝく間に蕩盡してしまつた。

老父を伴つて溫泉へ

父孔作　母なを（明治二十二年）

兩親を中心に毎年催した觀菊會

露光量違いの為重複撮影

父と母

地方の豪家に生れた慶太郎は、少年時代惠まれた生活を送らなければならない筈であるが、事實は生れながらにして貧窮のどん底にあつた。それを說明するためには、彼の父母の結婚にまでさかのぼらなければならない。

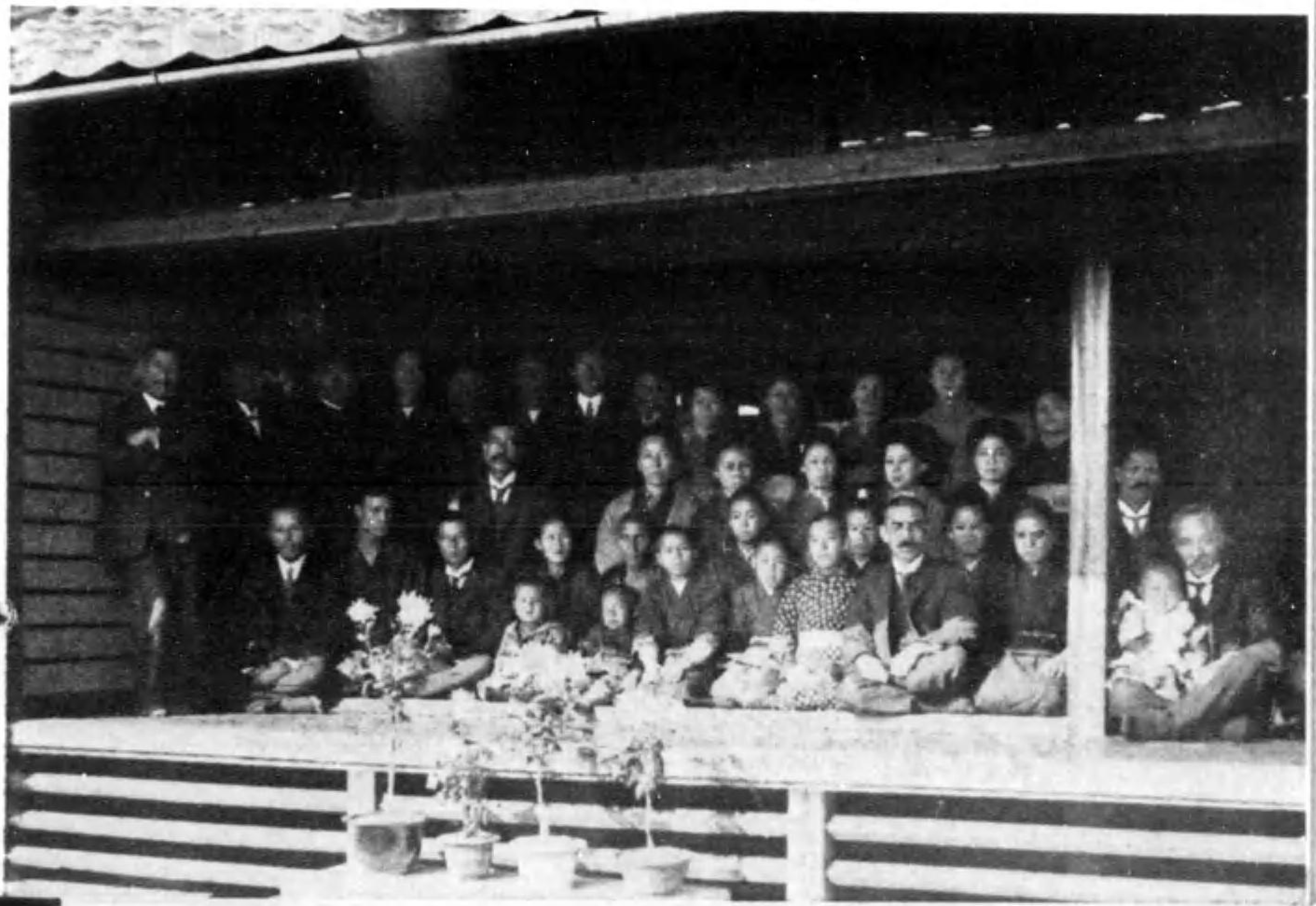
慶太郎の母は、八幡市小嶺の能美家の出である。能美家は屋號を室屋といつた。當時『小嶺の室屋か、行事の飴屋か、宇の島の萬屋か』と、近傍の大分限者と並びうたはれたことを見ても、相當の富豪であつたことがわかる。(行事は福岡縣行橋町に、宇の島は大分縣中津市附近にある)

能美家は先にもちよつとふれたやうに、信英の子の佐八郎が養子となつて繼いだ家で、四男六女があつた。長男の正左衞門の代は相變らず隆盛であつたが、その子儀平に至つて、全く沒落してしまつた。儀平は人一倍頭のよい人であつたが、どうしたことか壯年をすぎて脫線し、贅澤三昧の生活をしその上相場に手を出して、さしもの財產をまたゝく間に蕩盡してしまつた。

老父を伴つて温泉へ

父孔作　母なを（明治二十二年）

兩親を中心に毎年催した觀菊會



しかしこれはずつと後のことで、慶太郎の母なをの育つたころは、まだ能美家の全盛時代で、彼女は夢多い少女時代を、兩親と多くの兄妹に愛されながら、何不自由なく送つたのである。

堀川に沿つて陣の原といふ村がある。そこの庄屋は末松といつて、舊家でやはり豪農であつた。なをは望まれて、この末松家の長男卯衛門に嫁ぎ、間もなく女兒をもうけた。次いで生れたのも女兒であつた。長女をヤスヱ、次女をミツヱと名づけた。家庭は平和、若妻は二人の娘を抱いて、限りなく幸福であつた。

慶應二年、この平和な家庭に突如嵐が見舞つた。家の大黑柱である卯衛門が亡くなつたのである。世は將に明治維新に移らうとするときで、家茂薨じて慶喜が將軍に卽からうとする、國をあげての騷動の眞最中であつた。

たゞちに親族會議が招集された。問題は庄屋の株である。早く婿を見つけて繼がせないと、庄屋の株が他に移つてしまうといふので、何度も何度も集つて、候補者をあれこれと物色協議した。しかし所謂帶に短かし襷に長しで、どうしても適當な人物がない。その中に一人が、

「本城の庄屋（信里）の悴はどうだ」

と云ひ出した。他の一人が、

「人物は申分なしだが、年齢が違ひやせんか。孔作はたしか二十歳だし、こちらの嫁どんは二十八だからな」

「ぢやと云つて、外に候補者があるか。あるまい。なければ年齢の少々違ふ位は仕方がないぢやないか。この際は何よりも庄屋の株の方が大切だからな」

かうした話し合ひの結果、いや應なしに二人の結婚が成立し、孔作は末松家の當主となつた。それ故、末松家は血のつながらぬ夫婦養子となつた。それに加へて、家庭には嫁と同年配の出戻りの娘がゐたゝめ、家庭にはいつとはなしに不快な感情がたゞよひ初めた。

生來豪膽な孔作も、樂天家のなをも、遂にたへられぬ時が來た。二人は意を決して末松家を離れ、產土神社の前の藏本屋敷に別家した。そして相變らず庄屋をつとめてゐたのであるが、明治になつてその庄屋がなくなつてしまつた。身一つで出て來た二人には、財產とては何一つない。たちまち生活の途が閉されてしまつたのである。

慶太郎はこの頃、陣の原の藏本屋敷で生れた。明治元年十月九日のことであつた。（戸籍には十三日となつてゐるが、九日が正しい）

生活の途を失つた孔作は、堀川に沿つた渡場にある酢屋を買つて、酢の釀造を初めた。當時、酢は酒と同じ位に賣れたのである。その頃はまだ洞海灣の戸畑、若松港などは開けず、遠賀川口の蘆屋が石炭の積出港で、殷賑を極めてゐた。從つて交通機關の不備な時代であるから、堀川は地方の交通運輸の動脈であつた。孔作はそこに目をつけて、堀川を上下する船の船頭を相手に、酒、醤油、豆腐、蒟蒻、草鞋、草履、駄菓子などの小賣もした。着眼はたしかによかつたのであるが、元來さうした方面に馴れない二人のことゝて、貸倒れなどばかり多く、生活は極度に困難になつて行つた。

豐かな家庭に育つて、豐かな家庭に嫁入り、未だ曾て物質的な窮乏などといふものを知らなかつたいゝなをは、初めて世帶の苦勞を味つた。しかし彼女は非常に快活で、物事に拘泥しない性質であつた。どんな苦痛に出會つても、いつまでも惱むことなどはなく、すぐ諦めてしまふ潔ぎよさがあつた。

父の孔作は、商賣は下手だつたが、政治的な才能に惠まれてゐた。かういふ話が傳へられてゐる。

本城は百五十戸ばかりの村であるが、毎年秋になると田に乾してある稻束が盗まれる。折角丹精したものが根こそぎ持つて行かれるのであるから、みな憤激はしてゐるが、どうにも仕方がない。かうしたときみなの賴りにするのは孔作である。また孔作自身も、大いに張り切つて乘り出して行くのであつた。

忽ち村人の寄合ひが開かれた。孔作はその席上で、

「誰が稻盗人をするか、見込の名前を投票しようぢやないか。そして多數入つた者を盗人と認めて、その人間を村はづしにすることにしよう」

と提案し、さつそく實行にかゝつた。開票してみると、投票は不思議にも或一人に集中してゐる。するとその男が、

「私は絶對に後暗いことはしてゐません。しかし皆さんが私だとお認めになられたのは、私の不德の結果です。しかしみなさん、今こゝで私が村はづしにされては、私の一家は滅亡です。妻子を飢死させなければなりません。これから先、絶對に疑を受けるやうなことはしませんから、どうか村はづしだけは御勘辨願ひます」

と泣いて懇願したので許された。それ以後、稻束の盗まれることはピタリと止つた。

またこんなこともあつた。

本城、陣の原、永犬丸、長崎といつた各村は、長崎に水門を設けて堀川から水を引いてゐた。田植時ともなれば、水は農家の生命であるから、とかく爭ひが起きがちである。それで昔から、何日には

そちら、何日にはこちらと、水分けの不文律がきまつてゐた。

ところが或年のこと、水不足の苦しさから、水門のある長崎部落の者が、なんとか水下側の監督をさけようと、種々の工作をした。段々それが露骨になり、番小屋も建てさせず、民家も借さず、どうしても番につけないやうに仕向けてきた。水下側もこれにはホト／＼困つた。そこで例により、孔作の登場となつた。

彼は本城の秣場に、長崎の連中が毎朝草刈りに來ることを知つてゐた。それで或朝、すつかり仕事を終へて、刈つた秣を馬の背につけ、いざ歸らうとするとき、本城の連中に命じてつかまへてしまつた。秣泥棒だと云ふのである。さうして孔作の倉に監禁し、馬だけはわざと空地につないで、道を通る者の目につくやうにしておいた。

朝草刈りに出たまゝ、四人が四人とも歸つて來ない、馬まで行方不明であるといふので、長崎では大騷ぎになつた。その中渡場の酢屋の空地に、秣をつけた馬が四頭つながれてゐるのを見て來たといふ注進が入つた。さては水問題の復讐かと氣づいたが、どうすることも出來ない。遂に代表者が孔作方を訪れて、彼の前に兩手をついてあやまつた。

「どうも誠に申わけありませんでした。番小屋をお作り下さつても、民家でお休み下さつても結構ですから、どうか人間と馬だけはお返しを願ひます」

ひどい目にあつたのは、四人の若者である。小暗い倉の中に抛りこまれたはいゝが、もと酢の釀造に使つた倉なので、くさいことおびたゞしい。半日以上もぶちこまれてゐたので、へと／＼になつて出てきた。

孔作は晩年、赤煉瓦の塀をめぐらした、田舍には珍らしい立派な家に住んで、小鳥を飼ひ菊をつくつて樂しんでゐた。菊の盛りになると、佐藤は店の者を引きつれて見物に出かけ、父の老後を慰めてゐた。そんな老齡になつても、村に火事などがあると、眞先きに出かけて采配をふる孔作であつた。

佐藤はこの父孔作からは強い意志を、母なをからは稀に見る果斷さを、そして曾祖父信英からは徳義と理財の才能を傳へられて、この世に生を享けたのである。

朔風

酢屋の子

渡場の酢屋と陣の原の末松家とは、十町と離れてはゐなかつたが、孔作夫婦が別居してからは、互に往來がなくなつてゐた。誰よりもそれを悲しんだのは、なをが末松家に殘してきた、ヤスヱとミツヱの姉妹であつた。それでもまだミツヱの方は幼かつたので、人形遊びに夢中になつて、母戀しさを忘れることが出來たが、ヤスヱは旣に物心のついた八歲の子であつた。寢ても覺めてもやさしい母の姿が目先きにちらつき、その度每にホロリと涙がころがり出るのである。「決して母さんに會つてはいけない」と祖母や叔母に云はれるたびに、ますます會ひたい思ひがつのるのである。そんなときにはよくミツヱの手を引いて裏の田圃に出てゆき、もしや母さんが迎へにでも來やしないかと、一生懸命夕暮れの道に人影を探し求めるのであつた。

目と鼻の間に住みながら、可愛いゝ子を抱き上げることも出來ないなをは、人知れず物蔭から無心に遊ぶ姉妹を見ることで滿足しなければならなかつた。たび〳〵なをは「心配事は堀川に流してき

た」といつて、川べりから戻つてきたが、たち切れぬ娘たちへの愛着を、ひそかに流してきたのであらう。それは丁度乳房が張つてゐるのに、飲ませる子のゐないやうなやるせない苦しさであつた。僅かに、この淋しい母を慰めたのは、幼い慶太郎の存在であつた。慶太郎は姉二人の分まで母を獨占し貧しいながらも大事に大事に育てられてゐた。

明治六年慶太郎は六歳になつた。この年は恐ろしい年で、慶太郎の初めて出逢つた人の世の苦難であつた。それはこの地方に百姓一揆が勃發して、大荒れに荒れたのである。めぼしい金持、庄屋、役所などが一齊に襲撃され、忽ち燒かれてしまつた。

慶太郎は近所の女の人におはれて避難しながら、竹槍を持ち蓆旗を押したて、津浪のやうに喊聲をあげながら押しよせてくる人波を、生きた心地もなく眺めてゐた。近所のエビス屋に火の手があがつて、またゝく間に燒け落ちるのも、遠くから見てゐた。あの裏二階で、いつも機を織つてゐた小母さんはどうしたらうか。二階と下で、鞠を投げあつてゐた、目のつぶらな娘たちは、無事に逃げ得たであらうか。

運び出してきた鐵砲や刀は、みな一揆の連中に奪はれては大變だといふので、川の中に投げこんでしまつた。身の廻りの物だけを入れて來た長持の底が拔けて、途方に暮れてゐたところへ、木城の木家が燒かれてしまつたといふ噂も傳つてきた。當然元庄屋であつた慶太郎の家も、燒かれるものと覺悟してゐたが、孔作の例の機轉によつて、寸前にそれを喰ひ止め得たことがわかつたのは、暫くたつてからであつた。

孔作は自宅の前の街道の內側に、巾一間ばかりの灌漑用の堀があり、それに橋がかけてある。その橋の上に、酒や水を入れた大桶をならべておいた。そのうへ草鞋まで出しておいたから、一揆の連中は家を燒くのを忘れて、その酒や水を飮んで草鞋をはきかへ、禮さへ述べて立去つたのである。

かくして一難は去つた。しかしその後に來たのは、社會の不安動搖と、以前にも增した生活苦であつた。商賣の下手な孔作の家庭は、その日の糧にも事缺く窮乏の中に、徐々に沈んで行つたのである。

このときの百姓一揆は、この地方だけの現象ではなかつた。委しく云へば、明治二年の暮に高崎藩管內に起きたものが導火線となり、全國に燃えひろがつたものである。三年、四年、五年とます／＼火の手はあがつて、六年には最高潮に達し、全國では二百十餘件を數へるに至つたのである。これにはいろ／＼な理由を數へあげることが出來るが、要するに新政府の改革に對する不平不滿と、曾ての

支配勢力に對する復讐であつたと見られる。

この事件の記憶は、いろ／＼な意味に於て、慶太郎の生涯に大きな影響を與へたのであつた。

その翌年、村で初めて種痘が行はれた。子供たちが役場の庭に集つて、わい／＼と興奮して騷いでゐた。それらの群から少し離れて、小さな髷を頭につけた女の子たちが、早口でしやべりあつてゐた。その後の方に、血色のよくない男の子が、一人しよんぼり立つて聞耳をたてゝゐた。

そこに來合せたヤスヱは思ひ切つて「慶ちやん」と呼びかけた。慶太郎はびつくりして顏をあげ、そこに開きかけた蕾のやうな娘の顏を發見して、恥かしさうにすぐうつむいた。

「慶ちやん、あたしわかるな、あんたの姉さんバイ。さあ、あつちへ行つて話しようヱ」

ヤスヱは人のゐない柳の木の下へ慶太郎の手を引いて行つて、前かゞみになりながら、初めて弟と話し合ふことが出來た。はにかんでゐて、仲々ヤスヱの話に乘らなかつた慶太郎も、不思議な血緣のつながりにいつか我を忘れて、快活に母のことなどを語つてゐた。ヤスヱは別れるときに慶太郎の眼をぢつとみつめて、

「慶ちやん、これから時々姉さんにあつてくれるな」

ときいた。慶太郎は元氣な聲で、「うん」と答へた。

「ぢや歸らう。歸つたら母さんにな、姉さんが體を大事にしなさいやつて云ひよつたと、そつと話してな」

と云つてふと涙ぐむと、姉の顏をみつめてゐた慶太郎の眼にも、一瞬ふつと涙が湧いた。彼はそれをかくすやうに、草履の音をバタ／＼させながら、向ふの方へかけて行つた。

それから二人は度々會つた。勿論二人きりの祕密ではあつたが、旣に大人の領域に入りかけてゐるヤスヱは、祖母や叔母に知れても構はない、叱られたら一戰も辭さない決心をかためてゐた。ヤスヱにとつて一番悲しいのは、明年擧げる自分の婚禮に、生みの母に臨席して貰へないことだつた。一生にたゞ一度の振袖が見て貰へない歎きであつた。

かうした苦しい親子姉弟の關係は、明治十二年ごろまで續いた。孔作夫婦の媒酌人の病氣を機會に漸く兩家の和解が成り、慶太郎も末松家の表から姉を訪れることが出來るやうになつた。それは彼の十二歳のときであつた。

はぜ紅葉

朔風

慶太郎は使ひに行つても、ものを云ふことが出來ず、隅の方でもぢ／＼してゐて「何か用ですか」と云はれるまで、用事の切り出せないやうな子であつた。友達はいつも女の子が多く、おはぢきや、鞠つきや、まゝごとを一緒になつてやつてゐた。體も決して丈夫な方ではなかつた。そのころから胃腸が弱く、これで育つか知らんと、よく兩親を心配させたものである。

しかし氣だてはごくやさしく、親類や近所の老人たちからは、大人のやうに溫和しいとよく褒められた。母が一家の生計に苦しんでゐるのを、子供心に見兼ねたものか、時折裏山から枯枝を拾ひ集めてくることがあつた。そんなとき、母は涙を流さんばかりに喜んだ。父の孔作はその頃、佐賀縣地方の田地測量に傭はれて行つて留守だつた。當時、地租改正があつたので、器用な孔作はさつそく新しい測量といふ仕事に、飛びついて行つたのである。しかし一面それは、生活の不如意を打開する唯一の方法であつたかも知れない。後に殘されたなをは、慶太郎と弟の伊勢吉をかゝへて、孤軍奮闘をしなければならなかつた。

幼な心にも母の苦勞はよくわかつた。慶太郎は刈取つた田圃に出て、毎日落穗を拾つて歩いた。稻刈りの終つた廣い田圃では、よく子供等が集まつて「年打ち」をして遊んでゐた。先を尖らした經一寸前後、長さ七八寸の棒を、まづ一人が柔かい土に打ちこむ。次に他の子供がその棒をねらつて自分のを打ちこみ、それを倒す遊びである。彼等はそれを日暮れまで、時を忘れてやるのである。慶太郎はそれらの仲間には加はらなかつた。むしろ彼等を恐れてでもゐるやうに、彼等の群をさけては、田圃の落穗を探して歩いた。

九州には櫨の木がたくさんある。これは西洋蠟燭の傳來するまでは、なくてならぬ蠟の原料であつた。各藩が競つてこれを奬勵したので、秋ともなれば九州全土は、美しい櫨紅葉の一色に塗りつぶされる。その葉が落ちつくしてから、櫨の實が採集される。採集された後の草むらに落ちてゐる實が、落穗同樣たくさんある。慶太郎はよくそれを拾ひに行つた。當時米は一升四錢五厘であつたが、この櫨の實は一斤一錢五厘に賣れた。母はこゞえるやうな冷たい手に、櫨の實の一杯つまつた袋をかゝへて歸つてくる子を、抱かんばかりにして迎へるのであつた。

子供は風の子、凧上げ、獨樂廻しなどは、彼等にとつて無上の遊びである。しかし慶太郎はその何

れの仲間にもはいらなかつた。はいりたくもそれを持たなかつたからである。利發な彼は、貧しい母にそれをねだる勇氣がなかつた。「櫨の實を拾ひながら、凧のうなりをきいたあの淋しい少年の日の氣持は、一生忘れることが出來ません」と、後年の彼はよく語つた。

孔作は佐賀に行つたまゝ、約束の金も送つては來なかつた。食べる物もなくなつたある夏の夕暮れあまり家の中が暑苦しいので、川縁に凉臺を持ち出して、團扇を使ひながら親子三人が凉んでゐた。そのとき向ふから急ぎ足で來る人があつた。薄暗をすかしてみると、待ちに待つた父である。慶太郎はバタ〳〵とかけて行つて「父さん」と抱きついた。父の胸のあたりに頭を押しつけながら、ほの甘いしびれるやうな嬉しさに醉ひかけた瞬間「どうしたんなア」とびつくりした聲が頭の上から響いて來た。びつくりして見上げると、それは似ても似つかぬ他人である。慶太郎は一瞬驚愕の後、袖に顔を押しあてゝ、ワツと泣き出しながら母の方へかけ出した。その人は驚いて凉臺の母親の方に近づいて「一體どうしちよるとなア」と聲をかけた。なをは恐縮しながら、主人の留守のこと、子供がその歸りを待ちこがれてゐることなどを、問かれるまゝに話した。その人はいたく同情して、去りぎはに慶太郎の頭をなでながら、

「あんちやん！　父さんは、たくさん土産を持つて、歸つて來まつするばな。よく母さんの手助けをして、おとなしく待つちよんなさいねエ」

とやさしい言葉をかけて行つてしまつた。五つの伊勢吉は、母の顔を見上げながら、

「父さんはすぐ歸つてくるぢやろねエ。お土産をたくさん買つてくるぢやろねエ」

とあどけない言葉で云つた。慶太郎はあふれさうな涙をぢつとこらへながら、唇をかんでキラ〳〵光り出した空の星を見上げてゐた。

堀川を上下する船の船頭は、よく角打ちに酢屋の中にはいつて來た。彼等は「命あつての二合半」などと鼻唄をうたひながら、角打ち――一升枡の一角に口をつけて、釣瓶の水でも飲むやうに、舌をならしながら飲み、いゝ心持ちになつて出て行くのであつた。

「お内儀さん、つけちよつちくんないな」

さう云つては、金を拂はずに出て行く。村人が買物に來ても、現金買ひはめつたにない。みな盆暮の節季拂ひである。

暮近くなると、節季勘定書をつくつて、前もつて配つておき、それから掛取りに廻る。西南戰爭の

終つたころから、それは慶太郎の仕事になつてゐた。舊の正月前だから寒い頂上である。雪がチラホラ降つてゐる中を、尻をからげ、素足に草履で走り廻つてゐた。母のなをは、股引をつくつてやりたかつたけれども、どう算段してもそれが出來なかつた。「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」といふが、なをにとつて、それは我が腹を痛めた子であるだけにいとしかつた。

ある夕暮、慶太郎は道でバツたり祖母に出逢つた。父の母である。

「おばあちやん」

と慶太郎が元氣な聲で呼びかけると、祖母はびつくりして顔をあげ、まじ〳〵と慶太郎の姿を見廻しながら、

「慶ちやん、お前、股引は持つちよらんな」

「股引は持つちよらん。持つちよらんでも、うちやあちよつとも寒うないけん」

「まあ、足袋もねエかな、可愛さうに」

「どうもありません。うちやあ、掛取りに廻つちよります。お正月にお祖母ちやんの家へ行くけん、雜煮を御馳走してな、さいならツ」

寒さをハネ返すやうに云つて駈け去る孫を、彼女は涙をいつぱいためて見送つた。そして家に歸る

一間にこもつて、小さな股引を縫ひ始めた。

幾日かたつて、その股引がとゞけられたとき、慶太郎は嬉しくて嬉しくてたまらなかつた。さつそくそれをはいて、家の中を飛廻り、しまひには部屋の隅で元氣よく逆立ちを初めた。

朝雁

學制が發布され、全國各地に小學校の設けられたのは、明治五年の八月である。これより三ヶ月前には、日本に初めて汽車が出來、東京横濱間を走つてゐる。

慶太郎もその小學校に入つて、四ヶ年間の學業を終へた。それ以上の勉學に、遠方に行かうと思つても、赤貧洗ふが如き家庭の事情がそれを許さない。丁度その頃漢籍に明るい岡と云ふ神官がゐたので、近所の人たちが相談の上、その先生を聘して塾をつくることになつた。

生徒はみな近邊の者であつたけれども、米と澤庵だけを持つて行つて自炊し、一週間に一度だけ自分の家に歸る習慣であつた。

朝寢てゐると、雁がないて通る。それをきゝつけると、

「おい、一番雁が通つたぞ、當番は起きて御飯を焚け！」

と誰かゞどなる。起きて庭に出ると、清々しい朝の空氣に羽音を響かせながら、洞海灣の方から鶴

がたくさん飛んで來る。鶴が首を長くのばしてこちらをぢつと見つめると、小さな連中は、急にこわくなつて石を投げつけたりした。

塾ではやはり手習が重視されてゐた。草紙を早く眞黒にするのを、自慢にした。中には早く眞黒にしたくて、手習をせずに墨を塗りつける子などもあつた。また文庫の蓋に砂を入れて、手習をすることもあつた。

その中に塾は水卷村の吉田に移り、生徒も五六十人にふへてゐた。慶太郎はその中で、いつも頭角をあらはしてゐた。頭が冴えてゐて、當るべからざる意氣があり、よく相手を求めては議論を闘はせた。この頃になると、女の子とばかり遊んでゐた引つこみがちな慶太郎の面影は消えて、どこか膽ツ玉の据つた父孔作の性格が、あらはれ初めてゐた。

慶太郎はよく三國志や漢楚軍談などを調べておいては、不意に先生にむづかしい質問をして、先生を困らしては喜んだりする茶目も、時折やつた。先生が病氣で休んだりすると、さつそく先生代りになつて、みんなに回讀をやらせるのも彼だつた。

岡といふ先生が去ると林といふ先生がきた。林の娘は新しい教育を受けてゐたと見えて、塾生に初めて數學の手解きをしてくれた。

しかしこの程度の塾では、どうしても滿足出來ない連中が、段々出て來た。人の噂によれば、山口縣の清末といふところに、研瀾學舍といふのがあつて、士官學校の合格者がよく出るといふことであつた。

本家の信隆は、慶太郎よりは年下であつたが、やはり一緒に吉田の塾で學んでゐた。

「俺が調べに行つて來よう」

と出かけて行つたのはその信隆であつた。歸つて「中々よささうだ、みんなで一緒に出かけやうぢやないか」といふことになり、初めて九州の地を離れて、本州の土を踏んだのである。研瀾學舍は現在の山口縣豐浦郡清末町にあつて、廣井良圖の開いてゐた私塾であつた。

この學校では漢學と數學を敎へてゐた。當時の士官學校の入學試驗課目は、この二つであつたからである。生徒の多くは、その志望者であつた。さて慶太郎等が入學してみると、今まで經書は習つたが文章を書く方は殆んど習つてゐない。ところがこの學校の生徒は、十四五歲でみな一廉の文章を書くので、驚いてしまつた。

先生は新しく入つて來た五人に對して「誰か一人が代表して、經書の講義をしてみよ」と云つた。すると慶太郎がつと立つて、左傳の一句について三四十分しやべりまくつた。これには先生も驚いて

「もうよい、わかつた、わかつた」と云つてやめさせた。

慶太郎はこの學校には、四五ケ月しかゐなかつた。體が相變らず弱かつたのと、學資がつゞかなかつたことゝ、先生との折合が餘りよくなかつたことなどが、退學の原因であつた。

學校をやめた慶太郎は、再び渡場の兩親の下に歸つて、毎日ブラブラしてゐた。小學校の手不足のときなど、加勢に出かけることもあつたが、給料を貰つてのつとめではなかつた。十八歲から十九歲の春まで、かうした生活が續いた。かうしてゐる間にも慶太郎は、自分は將來何をなすべきか、どの方向に進んだらよいか、さうしたことをひそかに思ひめぐらしてゐた。

試煉

青雲

少年期から青年期へ、一歩踏みこんだ慶太郎は、いつまでも親のもとにぐづ〳〵してゐたのでは、自分の將來が開けて來ないことを悟つてゐた。なんとかして學問を身につけたい。日夜それのみを思ひめぐらしてゐた。しかし如何に學問がしたくとも、先立つものは金である。家の暮し向きは、窮迫のどん底こそすぎたとは云へ、息子を遊學に送り出す程の餘裕は絕對になかつた。あれを思ひ、これを思うて、怏々と樂しまない日が續いた。

それを見てとつた孔作は、愛する悴の希望を何とか充たしてやりたい一心から、ひそかに知人の誰彼に、學資のかゝらぬ方法はないものかと、聞き廻つてゐた。その結果選ばれたのが、福岡縣師範學校であつた。

明治十九年の三月、慶太郎は兩親の激勵を受け、入學試驗を受けるため、博多に出かけて行つた。彼が若しそのまゝ入學してしまつたら、實業家佐藤と全く違つた敎育家佐藤が出來てゐたかも知れな

い。さうすれば、上野の美術館も、大日本生活協會も生れなかつたであらう。從つて彼の事業に何等かの關係を持つた人々の運命は、全く違つた方向を辿つてゐたに違ひない。思へば人生は、まことに不思議なものである。

慶太郎はどう考へても、教育者になる氣にはなれなかつた。さればといつて、他に何か特別に志したものがあつたわけではない。とにかく彼は、父の希望した師範學校の試驗は受けずにしまつたのである。その代り舊藩公黑田家の設立にかゝる修猷館を受驗した。(現在の縣立中學修猷館の前身)胸をどき〳〵させながら發表を見に行くと、眞先に佐藤慶太郎と張り出されてあつた。四十九人の合格者中首席でパスしたのである。

父への報告は、歸途充分に腹案を練つてきた。そして、何食はぬ顏で、

「中譯ありませんが、師範學校は落ちました。あまり問題がむづかしかつたのです。それで仕方ありませんから、丁度、修猷館の試驗があつたのを幸ひ、その方を受けましたら首尾よく合格しました。ついてはどうか、その方へ出して下さい」

と云つた。𠮷作は腕組みをしながら、默つてそれを聞いてゐたが、突然「馬鹿ッ」と奴鳴りつけた。

「お前は親の苦勞を知らんのか。一體學資はどうするんだ。無鐵砲にも程がある。察するところ、師範學校は受けずに歸つたんだらう」

忰の眼をぢつとにらみながら、こゝまで云つてふと口をつぐんだ。烈しい叱責の言葉の裏には、無力な自分への自嘲と、愛する子へのいたはりとが含まれてゐた。慶太郎はうつむいたまゝ、首席合格の喜びを、胸深く疊みこんでしまつてゐた。

修猷館を受けたについては、慶太郎に一つの成算があつた。それは本家を始めとして、叔父叔母その他相當に暮してゐる親戚が何軒かある。それを廻つて賴みこめば、なんとかなるに違ひないと云ふ計畫である。それで翌日から親戚廻りを始めた。

本家の扇十郎を初めとして、みな快く承諾してくれた。毎月五十錢宛が二軒、三十錢宛が二軒、二十錢宛が一軒、都合五軒で月一圓八十錢の補助が保證された。(後東京遊學の際はこの倍額)當時は相當の宿屋が三食付十五錢であつたし、一里二錢位で俥に乘れた時代であるから、一圓八十錢は相當の金額だつたのである。彼は後に、學資の補助を受けた五軒の親戚に、各一萬圓宛を贈つて心から感謝の意を表した。しかし本家の信隆だけは「援助したのは亡父だから私が受けるべきではない」と謝絕したが、どうしても佐藤が承知しなかつたので、亡父の名に於てそれを受け、「自分の生活費には

露光量違いの為重複撮影

一文も使はず、公共事業に寄附します」と扇十郎の墓前に報告して五千圓は直ちに寄附し、殘りは目下計畫中である。美しいこれらの出來事は、五十餘年後のことで、その日の少年慶太郎は、學資の目あてがついたので、天にものぼる心地で、口笛をふきながら我が家へ歸つてきた。

憧れの修猷館に入學した慶太郎は、勝手が違つて全く當惑してしまつた。といふのは、この學校は教科書が全部原書であつた。入學者の大部分は、みな相當に英語を學んだ連中で、ＡＢＣも知らない人間はたつた三人しかなかつた。首席で入學し、いさゝか内心得意でゐた慶太郎は、眞逆樣に二階から突き落されたやうな衝動を受けた。その上、今までやつたこともない、兵式操練があつた。運動に何の興味もなく、しかも體の弱い彼は、銃を持つてやる體操には、ほと／＼閉口してしまつた。

慶太郎は必死になつて勉强した。數學も地理も歴史も、みな英語で説明し答へなければならない。「リーダー」は必ず暗誦させられるのだから、遊ぶ暇などは絶對にない。試驗は半年毎に施行されたが、遠慮なしにどん／＼落して行くので、上から落ちて來た者と合せて、第一回の試驗に六十五人ゐたのが、一年半目には十五人になつてゐた程の猛烈さであつた。彼は土曜に一寸外出する位のもので、寄宿舍から外に出ることは滅多になかつた。

明治法律學校在學時代（後列向つて最左端）

修猷館在學時代（十九歳頃）

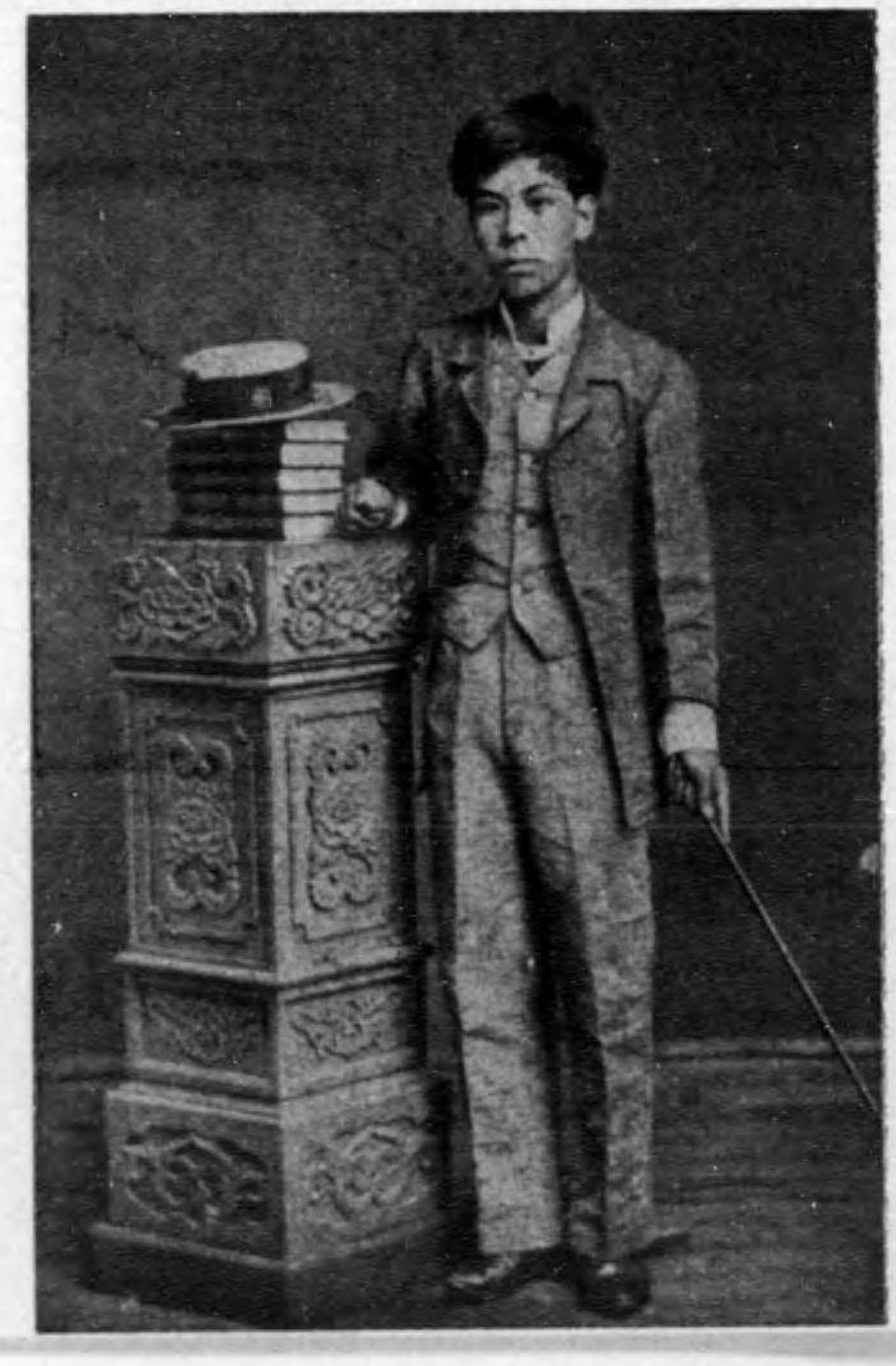
露光量違いの為重複撮影

一文も使はず、公共事業に寄附します」と扇十郎の墓前に報告して五千圓は直ちに寄附し、殘りは目下計畫中である。美しいこれらの出來事は、五十餘年後のことで、その日の少年慶太郎は、學資の目あてがついたので、天にものぼる心地で、口笛をふきながら我が家へ歸つてきた。

憧れの修猷館に入學した慶太郎は、勝手が違つて全く當惑してしまつた。といふのは、この學校は教科書が全部原書であつた。入學者の大部分は、みな相當に英語を學んだ連中で、ＡＢＣも知らない人間はたつた三人しかなかつた。首席で入學し、いさゝか内心得意でゐた慶太郎は、眞逆樣に二階から突き落されたやうな衝動を受けた。その上、今までやつたこともない、兵式操練があつた。運動に何の興味もなく、しかも體の弱い彼は、銃を持つてやる體操には、ほと〳〵閉口してしまつた。

慶太郎は必死になつて勉强した。數學も地理も歷史も、みな英語で說明し答へなければならない。「リーダー」は必ず暗誦させられるのだから、遊ぶ暇などは絕對にない。試驗は半年每に施行されたが、遠慮なしにどん〳〵落して行くので、上から落ちて來た者と合せて、第一回の試驗に六十五人ゐたのが、一年半目には十五人になつてゐた程の猛烈さであつた。彼は土曜に一寸外出する位のもので、寄宿舍から外に出ることは滅多になかつた。

明治法律學校在學時代(後列向つて最左端)



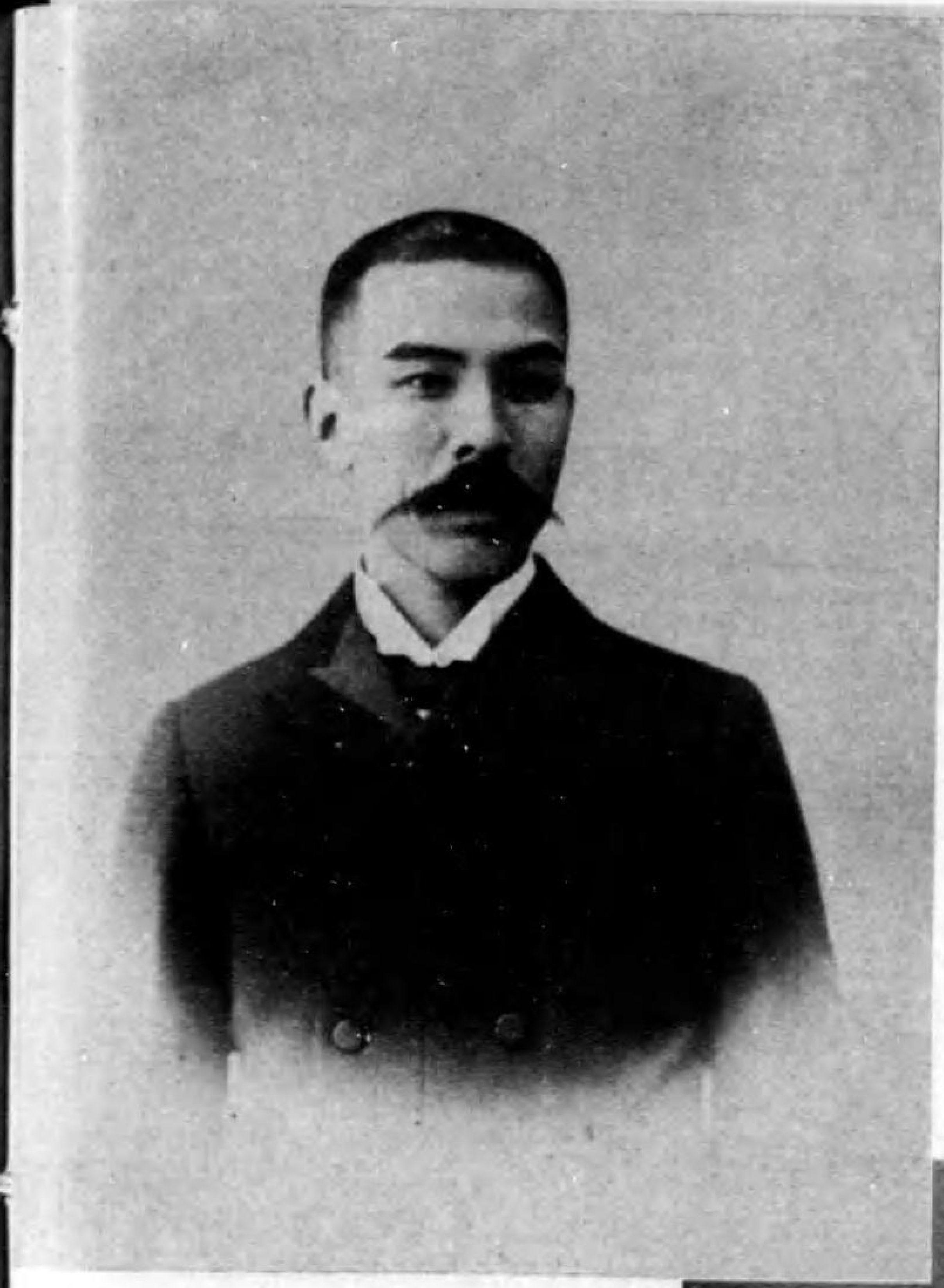
修猷館在學時代(十九歳頃)

露光量違いの為重複撮影

この修猷館時代の慶太郎に、終生忘れられない事件があつた。それは文部大臣森有禮の來校で、入學して一年ばかりたつた時のことであつた。

大臣が知事と督學官を從へて教場に入つて來た。授業は數學であつた。教師は授業をやめて生徒に起立を命じた。そして自分は教壇を下りて、直立不動の姿勢で大臣の方にむかひ、「文部大臣閣下に敬禮」と號令をかけ、生徒と一緒に敬禮した。森は鷹揚に答禮して、炯々たる眼光で生徒の顔を見廻した。教壇にもどつて講義を續けた教師の聲も、こゝろなしふるへを帶びてゐたやうであつた。

教師の説明が終ると、突然慶太郎は指名されて立ち、一つの問題を與へられた。それを始めから終りまで日本語を使はずに英語だけで説明し、答を出さなければならないのである。少々あがつてやつてゐると、森が「ウ、ン」と首を傾けた。「間違つたかな」と思ふと、胸がどきどきする。冷汗が流れる。心を落ちつけて檢討して行くと、漸く間違が發見出來た。それを直すと、また森が「ウ、ン」と云つた。慶太郎は額の脂汗をぬぐつてホッとした。そのときの安心と喜びは、いくつになつても思ひ出した。



壯年時代の佐藤夫妻

露光量違いの為重複撮影

壯年時代の佐藤夫妻

この修猷館時代の慶太郎に、終生忘れられない事件があつた。それは文部大臣森有禮の來校で、入學して一年ばかりたつた時のことであつた。

大臣が知事と督學官を從へて教場に入つて來た。授業は數學であつた。教師は授業をやめて生徒に起立を命じた。そして自分は教壇を下りて、直立不動の姿勢で大臣の方にむかひ、「文部大臣閣下に敬禮」と號令をかけ、生徒と一緒に敬禮した。森は鷹揚に答禮して、炯々たる眼光で生徒の顔を見廻した。教壇にもどつて講義を續けた教師の聲も、こゝろなしふるへを帶びてゐたやうであつた。

教師の説明が終ると、突然慶太郎は指名されて立ち、一つの問題を與へられた。それを始めから終りまで日本語を使はずに英語だけで説明し、答を出さなければならないのである。少々あがつてやつてゐると、森が「ウヽン」と首を傾けた。「間違つたかな」と思ふと、胸がどきどきする。冷汗が流れる。心を落ちつけて檢討して行くと、漸く間違が發見出來た。それを直すと、また森が「ウヽン」と云つた。慶太郎は額の脂汗をぬぐつてホツとした。そのときの安心と喜びは、いくつになつても思ひ出した。

道いばら

明治二十年の夏、夏季休暇で歸省してゐるとき、和田國次郎に會つた。和田は慶太郎より二歳上で、當時東京の山林學校の學生であつた。和田と話してみると、九州第一の都福岡で、天晴れ秀才のつもりでゐた自分が、みぢめな田舎者に感ぜられて來た。まだ東海道線も開通しないときだから、東京は遙かに遠い夢のやうな都であつた。そこへさへ行けば、學問が地に落ちてゐるものを拾ふやうに出來さうな氣がした。

慶太郎の氣がすでにふら／＼になつてゐるところへ、次から次へと和田は東京の話を聞かせるのである。先輩の添田壽一は舊藩公黒田家に召抱へられ、若殿のお供をして洋行するさうだとか、銀座の赤煉瓦の商店街の美しさや、その年の正月から市中の一部に點燈されたランプの何倍も明るい電燈の話など、一つとして彼の心をかき亂さないものはなかつた。もう福岡に歸ることが馬鹿々々しくなつた。將來成功するためには、どうしても中央に出て學問をしなければならない。さう考へるともう我慢は出來なかつた。しぶる父をとう／＼說き伏せ、夏休みが終つて歸京する和田と一緒に、生れて始めて東京の土を踏んだ。

東京についても、將來の方針をきめてない慶太郎は、軍人を見れば自分の弱いのも忘れて軍人になりたいと思ひ、裁判所を見學すれば、判事になつてみたいと思ふ。結局、友人たちのすゝめもあり、また當時の法科萬能の時流の影響もあつて、明治法律學校に入ることにした。こゝさへ出れば、判事にも檢事にも、また辯護士にもなれるからといふのであつた。

明治法律學校は駿河臺にあつた。現在の明治大學の前身である。彼は朝暗い中から、こゝに通つて來た。といふのは、當時の明治法律學校は名だけは堂々たるものであるが、敎場は講堂一つきりといふ小さなものであり、講師も司法省の役人や裁判官などが、出勤前と退廳後に講義をするため、授業は早朝と夜とにあつた。即ち一日二回登校して授業を受けるのである。體の弱い慶太郎にとつては、相當の負擔であつた。

その頃彼は牛込に住んでゐた。本家の若い叔父義應と信隆と慶太郎と三人で、六疊の間に陣取つてゐた。冬になるとよく三人は五厘宛出しあつて、燒芋を買つて食べた。ヂヤンケンをして買手をきめるのだが、叔父が當ればきまつて「信隆お前行つてきてくれ」と云ふし、慶太郎が當れば、胃腸の弱

い彼は「食べたらない」と云つて動かない。結局元氣な信隆が一錢五厘を握つて燒芋屋にかけつけ、煙の出てゐるのを持ちかへると「御苦勞」とも云はずに手を出すのは、待ちかまへてゐる二人であつた。

慶太郎と信隆は、子供の時から氣がよく合つて、終生最も親しい關係が續いた。貧しい慶太郎は、いつも外へ行くときには、信隆の着物を借用に及んだ。しまひには、どちらが持主かわからないやうな狀態であつた。

慶太郎の體は、相變らず壯健とは云へなかつた。二十二年の憲法發布のときには、脚氣で高尾山の中腹にある二軒茶屋に轉地してゐた。それ故、新聞などは三日も遲れて讀んだのであるが、森文部大臣がその朝刺客の手にかゝつたことを知つたときには、修猷館の教室を思ひ出して、暫し暗然としたものである。

卒業試驗も感冒にかゝつて、四十度もの熱を出してゐたが、幸にパスすることが出來、明治二十三年七月、明治法律學校三ケ年の課程を終へることが出來た。しかし健康的に云へば、滿身創痍と云ふ有樣であつたから、とても辯護士や判事檢事の試驗などは受けられない。さればといつて、いつまでも東京にブラ〳〵してゐるわけにも行かない。慶太郎の心は暗かつた。

こゝでまた我等はもう一度、奇しき運命の糸を思ふ。彼が健康で、法律家として立つたならば、晩年の事業はどうなつてゐたであらうか。鄉里に引き上げた彼のために、終生を支配する運命がそこに待つてゐた。

彼が三年間、病弱な身に鞭つて學んだ駿河臺、勉學に疲れた頭を休めるべく學校の裏側の高臺にのぼり、遙かに聳える富士の姿に見とれたそこに、後年新興生活の旗をひるがへす主人公にならうとは、彼自身も全く豫期しなかつたことであらう。

旗を卷いて退いたそこに、今や彼は四十五年の歲月を隔てゝ、新しい旗をたてるべくやつて來た。彼の感慨や果して如何なるものがあつたであらうか。

轉回

故郷の山河は、失意の彼をそのふところに、暖かく抱擁した。傷いた身も心も、金風の訪れとともに、日毎癒やされて行くのを感じた。明治二十三年はかうして過ぎ、二十四年も僅かに筑豐鐵道敷設の問題に奔走してゐる信隆に、法律關係の助力をするに止まり、ひたすら健康の增進につとめてゐた。生涯に於ける最も失意の時代であり、幾度か我が身の不運をかこつたことであつた。

當時日本の工業は、漸く勃興し、外國工業の移植が盛んに行はれ、機械工場が續々と設立されてゐた。明治十八年には蒸汽力を用ふる工場が、僅かに五十三にすぎなかつたものが、二十一年には二百五十四、二十二年には、三百三十九、二十三年には三百七十九、二十四年には四百九十五といふ飛躍的な發展であつた。この蒸汽力使用の增加は、必然的に石炭の增產を要求した。遠賀川流域の炭田がにはかに活氣づいたのは當然である。同時にそれまで、響灘に面する蘆屋が石炭の集散地であつたのが、交通機關の發達につれて、それが洞海灣に面する若松に移りつゝあつた。その若松で、手廣く石炭の賣買を營んでゐたのは、山本周太郎の經營する山本商店であつた。

山本周太郎は黑田家の御殿醫、永沼澹一の次男である。この澹一は漢學に造詣深く、また書道にも達し、醫を業として遠賀郡水卷村の立屋敷に住んでゐた。

同じ立屋敷に、山本と云ふ舊家があり、娘が二人あつた。周太郎はその姉娘カタの婿養子として、山本姓を名乘るに至つた。非常に進取的な人物であつたので、初め若松に出て、黑田家の石炭取扱所に勤務してゐたが、後獨立して山本商店を起したのである。

山本の親友に村田吉景があつた。若松の出身で當時縣會議員をつとめてゐた。山本はこの親友に、山本商店を自分に代つて經營し、義妹俊子の婿にふさはしい人間の推薦方を賴んでゐた。俊子は山本家の次女で、周太郎の妻カタの妹である。小さい時から山本商店の帳場に坐つて、會計の一切を引受け、すでに二十四歲になつてゐた。

村田が白羽の矢をたてたのは、明治法律學校を出て、鄉里にブラ〳〵してゐる慶太郎であつた。この話を慶太郎に持ちこむと、丁度親戚の醫者から、「法律家はお前の體に無理だから、方向轉換をしたらどうだ」と、しきりにすゝめられてゐた際だつたので、遂に意を決して實業界への道を選ぶことになつた。

明治二十五年五月一日、慶太郎は憧れの法律家志望を全く清算し、實業家として立つべく、山本商店の門をくゞつた。同時にまた倭子と結婚して、山本姓を名乘り、新生への第一歩を踏み出したのである。

慶太郎は新妻とこんなことを語りあつた。

「身に樂をたくまないこと、居宅に望みを云はないこと、報酬を目あてに働かないこと、この三つを守つてたゞ誠實に商賣を勵まう。お前さへ俺を信じてくれるなら、俺は必ず大成してみせるよ」

「わかりました。必ず守ります」

倭子は終生、この日の言葉を從順に守り通したのであつた。

山本はその頃すでに土地の顏役であり、店よりは社會的な方面に忙しかつた。また新興都市の若松には、彼の手腕を必要とする公私の問題が、山積してゐたのである。それで山本としては、慶太郎を義妹の婿養子として將來分家させ、店は悴の魯一郎につがせ、自分は專ら社會的な方面に奔走する心組でゐた。慶太郎としても佐藤家は弟の伊勢吉にゆづり、山本商店を守り立てやうと決意してゐた。しかしこれは、弟伊勢吉の逝去によつて自然修正され、山本家とも離れて獨立することになつた。しかしこのやうな關係から、戸籍は佐藤であつても、紋章だけは山本家の三つ輪の紋を終生用ひた。これは暫く後のことに屬する。

ともかく彼は、實業界への出發に當つて、無形の財産をつくることを、第一の念願とした。無形の財産とは「仕事についての知識を得、經驗を積み、そして眞面目に忠實に、眞劍に働いて誰からも信用される」といふことであつた。實業人は給料などよりも、この無形の財産の集積に全力を傾注すべきであるといふのが、彼の人生觀であり、處世の信條でもあつた。彼はまづ、この信條の實踐から出發したのである。

當時の石炭商の店員たちは、殆んど教養のない者が多く、酒と女と賭博が生活の大部分で、誰もそれを不思議に思つてゐなかつた。肝心の石炭の研究などは、誰もやらうとしない。暇さへあれば、八八賭博をやり、負ければやけになつて飲み、勝てば、おごるといふ有様であつた。この中に交つて、無形の財産の蓄積を處世の信條とした慶太郎は、周圍とはおよそ不似合な、際立つて變つた存在とされたのも無理はない。

彼の石炭商一年生の指導者は、妻の倭子であつた。六法全書を繰ることは知つてゐても、ソロバン

を弾くことを知らなかつた彼である。傳票の扱ひ方、記帳の方法、取引先との交渉方、すべて俊子から教はつたのであつた。

しかし時には、彼ならでは處理し得ない事件が持ち上り、彼の眞價に周圍の者が驚かされたことなどもあつた。それは入店後間もなく、上海へ海外電報を打たなければならないことが起つた。しかし誰も英文電報の書ける者はない。「そんなことなら私が行きませう」といふわけで、洞海灣の渡しを渡つて小倉に行き、打つて歸ると、間もなく上海から返事が來て、外國商會との契約が成立した。彼も得意であつたが、俊子は彼以上に喜んだ。

だん／＼商賣の實際がわかつてくると、慶太郎の犀利な眼は、忘れられてゐる根本問題に注がれ出した。商品たる石炭の研究である。

石炭はどうして出來たか、どんな風に分布されてゐるか、各石炭の性質、品位、またそれ／＼の適當な使途は、等々、一塊の石炭といへども、研究となると實に複雑なものである。

更に、採掘の狀態や坑内から搬出される模様、選別精選の實際、炭礦から市場に送られ、更に消費地に運ばれて消費されるまでの經過、以上のやうな實際の研究が必要である。

取引についても、若松の同業者間の取引、消費地の石炭商との關係を初めとして、それに附隨する金融關係や、取引代金の回收方法等、慶太郎の前には大きな問題として横たはつてゐた。彼はそれを一々分析檢討するとともに、如何にすれば冗費を省き、經營を合理化し、需要者に格安の石炭を供給することが出來るか、實際の現場にのぞんで、犀利な頭を縦横に活躍させた。

一旦かうと思つて打ちこんだら、徹底的に究明しなければ止まない慶太郎である。彼は石炭の性質や品位について研究した結果、一目見て何炭坑の何層のものであるかゞ、わかるまでになつた。

あるとき安田善次郎が、ある炭礦に投資するため、調査の必要が起つた。それで關係銀行の支店長に「若松一の石炭の實際家をよこして貰ひたい」と、依頼して來た。當時の若松には、石炭商が二百五六十軒あり、その店員を加へると、多數の專門家がゐたわけであるが、選ばれて上京したのは、石炭界にまだ日の淺い慶太郎であつた。いつの間にか彼は「石炭の神様」と云はれるやうになつてゐた。今でこそ科學的に分析し、含有成分はいくら、熱量は何カロリーあるかゞわかつてゐて、それによつて取引が出來るが、當時はそんなことがまだ行はれてゐなかつたので、彼の目利きは至極便利なものであつた。

ずつと後に、彼が獨立して現場とはだいぶ遠ざかつたころ、店に手傳をしてゐた従弟があつた。神戸高商を出て、商賣の實際を見たいといふので來てゐたのである。その青年――佐藤要が、あるとき

各地の炭礦見學に出かけて、小さな石炭の塊をたくさん持ち歸つた。それを佐藤の前に出して云つた。

「あなたは石炭に精通してゐられるさうだが、これはどこの石炭でせうか」

佐藤はその中から四つばかり小塊を取上げて、それは何層、これは何層と云ふと、要はびつくりして、佐藤の顔を穴のあくほど見つめて、小さい吐息をもらした。

若松港は當時まだ築港會社もなく、港口は非常に淺く、干潮面は僅かに五尺程度で、百五十噸位の船は滿潮時でなければ出港出來なかつた。それで石炭は門司まで運び出して、汽船に積込まなければならない。したがつて門司に貯炭しておかねばならない。積込むのは割合に樂だが、さうすると揚卸しの人足賃、艀賃、地代等がかゝり、その上石炭も相當に痛むのである。

慶太郎はなんとかして、直積みをしたいと思つた。若松から積み送つた石炭を、そのまゝ汽船に積込むのである。しかしこれは、あまり早く若松から積出すと、門司で長く滯留するから、滯船料を支拂はなければならない。それでは折角直積みを計畫した甲斐がなくなる。さればといつて、汽船入港間際に積出すことは、艜延着のためむづかしいし、また風波のため艀船の航海出來ないこともある。そこで迅速にしかも費用を少くするためには、特に天候や潮流まで研究しなければならなかつた。

そのころは天氣豫報がなかつたので、明日の天氣、風の方向、潮の干滿を大いに研究した。そして明日は西北風と見れば、前日から艀船を下關方面におかないと、帆を利用して汽船に近よることが出來ないから、至急その手配をしなければならない。もしこの手配が遲れると、一々小蒸汽船でひいて汽船に近よらなければならないから、荷役が遲れる上に小蒸汽船賃を支拂はなければならない。その上、港は艀船で一杯になり、小蒸汽船で引き出すことすら困難になる。反對に、東南風と見れば、艀船を門司におくやうに、手配せねばならぬ。その上關門海峽の潮流は非常に早く、一時間六七浬に及ぶことがあり、特に門司海岸近くには「ワイ」といふ流れがあつて、一般とは反對に流れてゐる。それらをよく研究しておかないと、迅速にしかも費用を費はない能率的な荷役は出來ない。

一般の業者は、天候も潮流も研究しようとはせず、小蒸汽船だけを賴りにしてゐるときに、慶太郎は綿密な計畫の下に、かうして能率をあげてゐた。ある時には、自ら熱心に外國船の積込を指揮してゐて、海に落ちてひどい怪我をし、門司の川卯旅館に永い間療養生活を送らなければならないこともあつた。かく彼は、ひたむきに自己の職務に驀進したのである。

慶太郎はある日、門司海岸の貯炭場を、石炭仲仕の親分、いろは組の村田爲吉を伴つて歩いでゐ

た。その細い道路の眞中に、小さな石炭の一塊が落ちてゐた。それを村田は話しながら拾ひ上げて、殆んど無意識のやうに側らの貯炭山へ投げこんだ。慶太郎はすつかり感心した。何千噸、何萬噸といふ貯炭の山が無數にあるのだから、こぼれ落ちてゐる一塊や二塊は、何でもないと云へば云へるのだが、それをふと拾ひ上げて投げこんだ彼を、大いに襃めた。

　ところが更に歩いて行くと、また一塊の石炭が道に落ちてゐた。今度は慶太郎が拾つて、一寸それをたしかめてから片一方の石炭の山に返した。その兩側には、一方に藤棚、一方には本洞といふ石炭が貯炭してあつた。

「佐藤さん、藤棚と本洞とは隣坑區ですぜ。それで同じ炭層を採掘してゐるのだから、どちらの炭か分る筈はないと思ひますが、あなたは一寸たしかめられてから返された。どちらのかわかつたのですかね」

　村田は不思議なこともあるものだと云ひたげな樣子で、慶太郎にから問ひかけた。

「そりやわかるさ。僕は若松に來る石炭といふ石炭はみな見てゐる。毎日見てゐるんだから、色合や、割れ具合や、縮みの模樣などを見ると、たとへ同じ炭層の炭でも、すぐ判別出來るんだ」

「さうかねえ」

　今度は村田が感心して、新しいものでも見るやうに、そこらの貯炭の山を見廻した。

　慶太郎は販賣についても、獨自の道を拓いた。それは石炭の性質と消費先の要求とを、一致させやうと試みて成功したのである。

　大隈炭の販賣をする時であつた。彼はすでにその炭の特質を研究してゐたので、早速名古屋地方の飴屋に向けてみた。飴屋では出來るだけ焰の長い石炭を必要とするから、大隈炭は大歡迎を受けた。また土地の狹い和歌山のやうなところでは、灰の置場に困るので、特に灰分の少い炭を要求する。こゝへ大隈炭を送ると大好評であつた。更に適當な場所はないかと考へて思ひついたのは、捕鯨船であつた。捕鯨船は鯨を見つけると、全速力で追ひつかなければならない。大隈炭は火持ちはあまりよくないが、一時的にポツト燃えて非常に火力が出るから、向けてみたのである。豫想通り、捕鯨船は爭つて大隈炭に殺到した。この大隈炭は、筑豐の石炭では下等の五層炭であつたが、その特殊の品質を利用して適所に差し向けたゝめ、値段は非常によくなつて、他の石炭の賣行きの惡いときでも、この炭だけは何時も不足といふ狀態であつた。

涙

慶太郎の弟伊勢吉は、頭腦明晰な青年であつた。第五高等學校長崎醫學部を卒業して醫學得業士になり、一年志願で入營した。父も母も、永い苦勞が二人の子の成功によつて、徐々に酬ひられてくるのを樂しみに、希望にみちた明暮を送つてゐた。母のなをは、伊勢吉の立派な醫師姿を想像して、除隊して歸る日のために、夜具の手入れなどを初めてゐた。それは樂しい毎日であつた。二人の話題は朝から晩まで、可愛いゝ悴で持ち切つてゐたのである。

この伊勢吉が、間もなく除隊と云ふときになつて、急にポツクリと死んでしまつた。明治三十年の秋であつた。悲しい知らせを受けた母親なをは、腦貧血を起して倒れ、一時重態に陷つた。慶太郎はすぐかけつけ、數ケ月の間病床につききりで看護した。自分の用も足せない母の世話を、慶太郎は誰にもまかせず引き受けたのである。

親と子は、久しぶりに、しみ〴〵と語り合つた。語つても語つても話はつきなかつた。めつきり白

髮のました母は、子供のやうに素直であつた。子故に鬪つて來た長い生涯なのに、今その一人を奪はれて、彼女は一時に年老ひ、精も根も體中から拔けてしまつたやうであつた。

あの夏の夜の涼臺が見える。よその人をお父さんと思つて飛びついて泣き出した子、膝に抱かれて自分を見上げながら「お父さんはお土產をたくさん買つてくるぢやろねエ」と云つた可憐なあの子、食なく衣なく、乞食のやうなあはれな生活から、自分の食を節して守り育てゝ來た二人の子、あゝその一人は、永久に取去られたのだ。殘つた一人が枕元で親切に看護をしてくれゝばくれる程、母の心は亡き子への哀愁にさいなまれる。この子は生れつき弱かつたが、どうかこの子だけは天壽を全うさせたい、たとひ自分はどうならうとも——母親の心と體は、もはや盡きやうとする蠟燭のやうに、僅かな餘光を保つてゐたのである。

一旦全快したかに見えたなをは、翌々年の六月六日の曉方、六十三歲で多難な一生の幕を閉ぢた。慶太郎は暫くの間、仕事も手につかず、ボンヤリした毎日を送つた。

凱歌

旗あげ

思ひがけなくも愛弟を失ひ、つゞいて慈母をあの世に送つて、悲嘆のどん底に沈んでゐた佐藤も、今は悲しみを一擲し、心氣一新、新たなる發足をすることになつた。

山本商店では一人息子の魯一郎が、一昨年の春慶應を卒業し、今は新妻を迎へて立派に店を切り廻してゐた。新時代の空氣を吸ひ、今をときめく慶應で鍛へあげて來た頭と腕を、存分にふるはせる方が、店のためにも本人のためにも、また自分らのためにもよい。佐藤はから考へて、周太郎を無理に說得して山本商店から離れて獨立する同意を得たのである。

佐藤は正月の休みを利用して、佐賀、長崎方面の石炭市場を見學し、着々と獨立の準備をすゝめてゐた。さうして四月限りで山本商店を退き、明治三十三年五月一日の朝、佐藤商店の旗擧げをした。

店は六疊一間、そこには松材の古テーブル二卓と、古ぼけた籐椅子が三脚あつたきりだつた。その

椅子は主人と小僧と來客用のもので、一脚六十錢の代物であつた。店員は妻の俊子のほかに、小學校を出たばかりの小僧が一人だけ。しかも俊子は一家の主婦としての務めの他に、店員としては會計一切を一人でやるのである。店は山本商店の借屋で、すぐその裏にあつた。海岸通りの所謂出船千艘、入船千艘といふ和船の輻輳してゐる便利なところであつた。朝の入潮には、堀川をのぼる船が見られた。その頃の海水はきれいだつた。佐藤は毎朝冷水浴をしたが、時にはその海水を汲み上げて入ることなどもあつた。

佐藤商店は、寄り場のすぐ近くであつた。寄場には毎朝早くから石炭商や運送業者などが集つて、石炭の賣買や船の貸借などの取極めをしてゐた。佐藤も毎朝そこに出かけて行つて、機敏な商取引きをしてゐたのである。

店はこの通り貧弱であつたが、八年間堅實に蓄積した信用は莫大であつた。銀行も取引先も、この人なら間違ひはないと信用してくれたので、石炭を仕入れても現金は一文も要らない。買つて賣る間の手數料で、店の經費と、どうやら食つて行けるだけの費用が殘るといつた有樣であつた。

その年の十月に、突然石炭の景氣がよくなつた。晝夜をわかたぬ活躍と、第百三十銀行支店の好意もあつて、約一ケ月で純益二千五百圓をあげることが出來た。勿論これはこの月だけの景氣ではあつたが、年末の決算期には約三千圓の金が殘つてゐた。

次第に取引先は擴まり、仕事は順調に進んで行つた。明治三十五年の暮には、銀行預金が三萬圓程になつた。彼はこれを條件づきで銀行にあづけた。その條件といふのは、決して引出さぬ代り、銀行は年一割の利子を拂ふことゝ云ふのである。これによつて年三千圓の收入がある、それを經常費にあてれば、扱つた石炭の利益だけは全部殘るといふ彼の計畫であつた。佐藤商店の基礎は、すでに定まり、店員も幾人か增し、店も擴張された。夫婦は明るい氣持で、明治三十六年の新年を迎へ屠蘇を汲みあふことが出來た。

佐藤の商取引は「正直を以て一貫する」といふことにつきてゐた。彼は常に、店員に誠實といふ言葉を語つてきかせた。若い店員たちは「ほうれ、また大將の一貫が始つたぞ」とさゝやきあつた。當時「若松の佐藤なら」といふことは、今の言葉で云へば「インチキのない男」といふ意味であつた。商談をまとめるために客をつれて料理屋に行くのは、業者の常套手段であるが、彼はそれをしなかつた。駈引のないといふことが、佐藤の駈引であつたのである。

自分は正しい取引をしてゐるのだから、新聞や雜誌を恐れたり、御機嫌をとつたりする必要はない

と云つて、絶對に金は出さない。提灯持ちの記事を書いた雜誌を持つて來て賣りつけようとしても、買はない。新聞仲間では佐藤商店から廣告料を貰へば、新聞記者の金鵄勳章ものだと云つてゐた。

御得意に對する手紙でも、決して「被下度」とは書かず、多くは「相成度」と書いた。そんなことから、「佐藤は頭が高い」といふ世間の評判を氣にして、注意する店員もゐたが、これはとう〳〵最後まで、殆んど「相成度」で通してしまつた。

出張すると、必ず豫定よりも早く用事をすまして歸つてきた。他の者の半分位の日數で、廻つてしまうのである。店員たちが一體どんな祕訣があるのかと調べてみると、佐藤は前以てハガキを出し、お得意を驛まで呼び出しておく。混み入つた用事の場合は一汽車下車するが、大抵の場合は停車時間で話をつけてしまうやり方であつた。その通過時間の通知も、殆んど電報は使はない。一日さへ早く出せば、電報の必要はないといふのが彼の持論で、萬止むを得ない場合の外はハガキですました。

佐藤は商賣の祕訣を聞かれると「石炭は一番頂上の値で賣つてはいけない。それより僅か下げたところで賣るやうに」と常日頃云つてゐた。十圓が頂上だつたら、九圓八十錢程度で賣れといふのである。さうすれば向ふでは有難いから、商取引は確實なものになる。いつも先方に儲けさせてやるといふことを忘れてはいけないと云つてゐた。しかし自分は、手數料取りに終始し、冒險的な商取引は絶對にしなかつた。それ故、人が十萬圓儲けるときは五千圓か三千圓といふ風に、確實ではあるが遲々たる歩みを續けた。その代り絶對に後退をしなかつた。この確實な行き方が、長い間に信用を增し加へ大をなした所以であつた。

大陸の曠野にたちこめてゐた暗雲が、遂に日露の開戰となり、間もなくそれが我が國の大勝利となつて幕を閉ぢた。戰後の經濟界は未曾有の活況を呈し、石炭の需要も激增した。佐藤はこの機會をつかんで、縱横の活躍をした。さうして遂に石炭の仲買だけでなく、自ら炭礦の經營に乗り出すことになつた。

育英

佐藤が山本商店を退いて獨立したとき、義兄の山本から明治鑛業株式會社の株券百株を贈られた。この株はその後間もなく買取人が出來、彼の手に六千圓の金が入つた。彼はまづその四割の二千四百圓を妻の佼子に與へ、殘りの六割、三千六百圓を何に使はうかと考へた。

考へた結果秀才の應援を思ひ立つた。それは自分の苦しかつた學生時代を思ひ起したからである。

彼は終生、毎月五軒の親戚から送られた一圓八十錢(東京時代はその倍額)の惠みを忘れることが出來なかつた。この體驗は、頭のいゝ人間に學資のことに思ひわづらふことなく、存分の勉強をさせてやりたいと思ふに至つた。これが社會に對し、また國家に對する御奉公である。勿論三千六百圓ばかりでは足りないであらうが、あとは自分のポケツトから出して行けばよい。から決心すると、福岡の中學修猷館の英語教師平山虎雄に、人選方を依賴したのである。

平山が最初に推薦して來たのは、後のスペイン公使矢野眞であつた。矢野は明治三十七年に修猷館

を首席で卒業し、一高に入つてから、無條件ならばといふ約束の下に佐藤の世話になつた。休暇になると、さつそく矢野は若松の佐藤宅に泊りに行き、幾日かを佐藤と一緒に生活した。子供のない佼子は、殊に矢野を可愛がり、自分の實子のやうに面倒を見てゐた。そのころはまだ餘り餘裕のない時代であつた。事實、佐藤の店位の石炭屋はざらにあつた。

佐藤は早起きであつた。まだねむり足らない矢野を呼び起しては、熱い朝湯につれて行つた。まだ外は暗かつた。佐藤は浴槽の中に體を沈めながら、矢野を相手に天下國家を論じては喜んでゐた。

「僕は少しでも金が出來たら學生を世話して、その學生を通して天下國家に奉仕しようと考へてゐるのだから、大いに頑張つて貰ひたい」

と激勵したり、また自分の貧しかつた學生時代の話などを目を細くして、愉快さうに語つた。

「僕の學生時代は貧乏だつたからなあ。十錢の金を持つて行つて、ウドンを二杯食べ、酒を一本飲むのが無上の極樂だつた」

こんな話の後では「僕に一萬圓の餘裕があつたらなあ」と歎息したりした。

矢野はその後外交官として、スペインの動亂に活躍した。フランコ政權の承認も、彼の大きな働きであつた。その頃佐藤は、毎朝非常な熱心さで海外電報に目をさらしてゐた。スペイン動亂の記事は

隅から隅まで讀んだ。それはひそかに矢野の身邊を氣づかふと共に、國際外交戰の檜舞臺に活躍してゐる育ての子の消息を、一刻も早く知りたかつたからである。

昭和十三年の二月、矢野は外務省との打合せに歸朝した。佐藤は矢野を生活館に招じて、樂しい一夜を送り、出發前もう一度の會見を約した。しかし公務多忙な矢野は「顏だけでもいゝから」といふ佐藤の手紙と電報を受取りながら、別府へ立寄る暇もなく風雲急な歐洲へ歸任した。それが二人にとつては、最後の面會であつた。

九州帝大醫學部病理學教授の醫學博士大野章三（舊姓桂）が、佐藤の援助を受けるに至つたのは、伊藤寛作の紹介であつた。明治四十一年八月の暑い日の午後一時すぎ、桂は綠炭坑の事務室に佐藤を訪ねて行つた。

桂は當時五高を卒業して、九大の前身福岡醫科大學へ入學を決定したときであつた。桂が學資の補助を受けたい希望を率直に話すと、佐藤は熱心にその話に耳をかたむけながら、うなづいて聞いた後、卒業までの學資を出すことを承諾した。

「桂君、僕も若いときは苦學して勉強したのだ。だから君には充分同情するが、全部なにもかも引受けるといふことは出來ない。これから一定の額だけは毎月送るから、それ以上入用なものは、他に方法を講じて僕をあてにせぬやうにして貰ひたい」

「はい」

「この金は自分の費用を節して、將來國家の人材となり得る人を養成したいと思つて使ふのだから、他には何等の意味もない。後日これを返却して貰はうとか、何か僕自身のためにして貰はうとか、そんな意志は一切ない。たゞ一つだけお願ひがある」

佐藤はさう云つて、微笑しながら桂の顏を見つめた。桂は緊張して、次の言葉を待つた。

「それは將來、君に多少でも餘裕が出來、そしてまた僕の意見に同意してもらへるならば、これと同樣の意味で、國家有用の材を養成して貰ひたいのだ。どうかね」

「はい、他日若し、さうした境遇になりましたら、必ず御期待に副ひたいと思ひます」

「いや、ありがたう。それで僕も充分だ。體を大事にしてうんと勉強してくれ給へ」

桂は香月の方へ歩いて行きながら、佐藤の言葉をくりかへし〳〵かみしめた。汗が流れても、ぬぐふのを忘れてゐた。蜩のなく聲がそこゝの山々から、かしましく聞えてきたけれども、彼の耳には少しもそれが聞えなかつた。

桂はそれから毎年休暇には佐藤の宅を訪れて、彼の話をきくのが樂しみだつた。佐藤夫妻もわが子の歸省を迎へるやうに、歡迎して幾日でも泊めておいた。その頃夏休みになると、桂同樣佐藤の援助を受けてゐる秀才連が集つてきた。

東大法科の矢野眞、五高の矢野純太郎、神戸高商の佐藤要、東京女高師の佐藤イワ子、中學修猷館の三宅與助といつた連中であつた。この秀才連を相手に、話ずきな佐藤は、大いに天下國家を論じては喜んでゐた。

佐藤に養成されたこれらの人々は、今や各方面に頭角をあらはし、國家有爲の人材となつてゐる。矢野眞は外交官として現に泰佛印國境畫定委員長として活躍してゐるし、矢野純太郎は工學士で渡邊製鋼所重役、佐藤要は上海で實業家、その妹のイワ子は長崎縣の高女校長夫人、三宅與助はその後望まれて佐藤家の嗣子となり、現に明治專門學校の教授で、同校の鑛山工學採炭工學兩科長になつてゐる。東京計器重役の石田芳助も、やはりその一人である。

醫學博士野口雄三郎は、バセドー氏病治療については世界的の最高權威である。佐藤の生涯にとつて、この野口は切つても切れない關係にあつた。二人が初めて知つたのは明治四十年の春であつた。公立若松病院の新任外科部長として迎へられた野口の歡迎會が、町の料亭絲屋で開かれた時で、佐藤もそこに出席してゐたのである。

新任外科部長は二十七歳とは云へ、滿二十五歳になつたばかりであつたが、澁川流やスポーツで鍊へた六尺近くの堂々たる巨軀であつた。しかも談論風發、青竹を割つたやうな性格で、若い日の故伯爵後藤新平を髣髴させるやうな男であつた。佐藤はすつかり共鳴して、自分より一廻り以上も若い野口の大風呂敷に、共鳴の拍手を送つたのであつた。

野口は、世に筑豊炭田は後七十年の壽命しかないと云はれてゐるから、それがなくなつたら若松地方を一大療養所にしようと思ふとこゝでも挨拶した。獨逸のエッセンの實例を持ち出して「人の嫌ふあの若松方面へ吹き流される八幡製鐵所からの不燃煤煙は、結核療養には却つてあつた方がよい」などゝ素人達を驚ろかし、更に「その時には、若松中の失業した運炭用帆前船は、東洋の各地から患者でも運ぶがよろしい」と氣焔をあげた。ところが今日では、あの石炭中に肺病の特效藥とも云はれるクレオソートの含まれてゐることは周知のことゝなつた。

これが動機となつて、佐藤は殆んど體を野口に任せるだけでなく、大小の私事まで打ちあけ、最後まで信賴を續けて來た。

ある日何かの用事で病院を訪れ、冗談を云つて笑つてゐたが、ふと眞面目な顔になつて、「先生は外國に行つて來てはどうですか」と野口にすゝめた。そのときは野口もすでにこれを決心してゐた頃であつたから、それなりで別れた。ところがその後しきりに電話をかけて、「先達の話はどうしました、費用の不足分は自分が出したいのだから」とすゝめて來た。野口の側では、九州一流の金持も控へてをり、若松市も出張費は出すといふ決議だから即答はしなかつた。しかし佐藤といふ人間が誠に一本筋の人物だから、その注文はいれて、逆に彼を世上知名の人にしてやるかな位には考へた。結局これが實現して、經費の三分の一程を佐藤に一時出さして、三十歳になつたばかりの野口は、憧れの獨逸に出かけて行つた。野口が歸朝すると野口好きの佐藤は、野口門下の學術研究費にと、若松病院に五千圓の寄附をした。野口はこれで病院へ附屬研究室を新築した。後年佐藤は、その峻拒にかゝはらず「洋行費は個人的入費だ」といふ名目で「これだけは强いて受け取つて貰はねば」といふ野口の言葉に從つた。

大正十一年、野口は別府に病院を建てた。佐藤はその建設費中に拾六萬圓を出した。初め野口は、別府などに落つくつもりはなく、全國にわたつて病院建設の候補地を物色してゐた。現に復興院の副總裁であつた松木幹一郎や當時山下鑛業の總務をしてゐた柳田友麿などは、今の小田急沿線大山園附近の土地を選定し、野口を東京に引出すべく計畫し、その話はたいぶ進行してゐたのである。これを知つた佐藤は、どうしても野口と離れ難い氣持から、東京の決定直前に別府の土地を契約し、野口の引止めに成功したのである。

しかし野口は、曾て一度もその金の禮どころか、その厚意に對しても感謝の辭を述べなかつた。佐藤もまたそれを求めてもゐなかつた。

「老人になつたら御近所に一緒に住みたい」

佐藤はくりかへしさう云つてゐたが、昭和九年遂にそれを實現して、野口宅のすぐ前に、道路を隔てゝ住宅を建てた。野口はあるとき「金持からたゞで金を出して貰つたのでは名譽でもないから」と云つて、佐藤から出して貰つた金の全額を返しに行つた。すると翌日、佐藤はその包みをそのまゝ持つて來て、「この金はもはや私のではない、先生に差上げるつもりだつたが、それでは困るからこれは改めて貴方へ寄贈したい」ときつぱりいつて置いて行つた。これは佐藤年來の素志でもあつたらしく、野口も結局受けることになつた。しかし相かはらず改つた禮は云はずにすました。

斤先掘

佐藤が大きくなつたのは、炭礦の經營に手をつけてからである。しかし初めは、自分で經營するつもりはなかつた。石炭を買取るつもりで、仰木豊太郎等三名が協同經營で初めた緣炭礦の斤先掘に、出資したのである。緣炭礦は遠賀郡の南部、香月町の附近にある炭礦で、貝島の所有であつた。

金は貸したが、石炭はさつぱり出ない。だん〳〵深みに入つて、遂に三分の一の權利を引受けた。その中また止むを得ず一切の權利を引受けなければならなくなり、云はゞ仕方なくなく引き取つたのである。明治四十一年三月頃のことであつた。

ところが佐藤の手に一切の權利が移つてから、不思議によい炭層につき當り、忽ちの間に注ぎこんだ資本の回收は勿論、素晴らしい出炭の活況を呈するに至つた。これに力を得て、四十三年の九月には、貝島所有の高江炭礦を買收經營した。この炭礦は五坑まであり、從業員も千人から使つた。今や佐藤は風雲に乘じ、採炭と販賣の兩方面に手をのばし、上海に支店を置き、マニラのマドリガルと提携して南洋にまで乘り出し、一時は向ふところ敵なき有様で、華々しい武者振りを示した。

しかし如何に華々しい活躍はしても、彼自身の持前である堅實主義は決してくづさなかつた。いや益々それを固くとつて奮鬪した。どんなに景氣のよいときでも、決して手一杯の仕事はしなかつた。まして借金政策は絶對にとらず、必ず持金の六割だけを使ふといつたやり方であつた。景氣の惡いときは、坑夫の賃金は安い。さういふときにはどん〳〵坑道を掘りすゝめておき、景氣がよくなるとその途端に、全能力をあげて石炭を掘り出すと云つた調子である。實によく先が見えた。そして決斷が早かつた。母親ゆづりであらう、實に思ひ切りがよかつた。

高江炭礦の五坑を開くときであつた。それ〴〵の係長が岸田礦長の宅に集つて、豫算を組むことになつた。皆に新しい手帳と鉛筆が渡つた。ふと一人の係長が佐藤を見ると、彼はその新しい品には手をふれず、自分のポケットから古いボロ〳〵になつた手帳と短かいエンピツを出して計算してゐる。

「新しい手帳と鉛筆がそこにありますが」

とその男が云ふと、彼は「いやこれで」と云ひながら、せつせと鉛筆を動かしてゐた。注意したつもりの男は、いつまでも忘れられない感銘を受けた。

佐藤の意志は鋼鐵のやうに强かつた。一旦やらうと決意したら、決して途中でへこたれるやうなことはない。

東洋汽船への賣込みもその一例である。

佐藤は東洋汽船が、某財閥の石炭のみを使用してゐることを知つてゐた。しかもその價格が暴利に類することも調べてゐた。なぜかと云へば一財閥に獨占させて、競爭させないからである。これでは株主に對して、重役の責任が果せないわけである。單に自分の石炭を賣込みたいからばかりでなく、社會正義のためにも、これに割込む必要がある。から思ふと、さつそく上京して社長淺野總一郎を訪ねた。第一回は遂に面會出來なくて歸つた。それで引込む佐藤ではない。再度上京して訪ねた。

「汽船會社の最も大きな支出は石炭だ、その問題で面會を求めてゐるのに、會はないといふことは、株主に對して不親切を通り越し、無責任だと云はれても仕方がありますまい。どうしても一度會つていたゞきたい」

と取次を相手に頑張つた。漸くのことで、「自動車に乘るまへに玄關でなら會はう」といふことになつた。てぐすね引いて待つてゐるところに淺野が出て來た。

「淺野さん、ともかく一度、私のものを買つてみて下さい。さうすれば、たゞ一回で今迄の暴利が是正されます」

「うむ、面白い。もう一度來い」

といふことになつた。さつそく時間を打合せて訪問すると、今度は應接室に通して、至れりつくせりの待遇である。

「よし、君の話はよくわかつた。さしあたり二萬噸契約しよう」

淺野がから云ふと、佐藤はさつそく用意して來た契約書を差出して、

「それではとゝへ御署名下さい」

淺野はあきれて、

「僕が一旦買ふと云つたら買ふよ。それは後で會社の係とやつて貰ひたい」

「いや、いけません。折角これだけでつち上げたものが、不成立に終る心配があるからお願ひするのです。一寸ペンを動かして下さればいゝのです。さあどうぞ」

とう〳〵淺野はその契約書に署名させられてしまつた。佐藤は意氣揚々と九州に歸つた。下關につくと、その財閥の門司支店の男につかまつた。さすがの佐藤もギョッとした。

「佐藤君、東京に行つて來たのぢやないか」

もう情報は入つてゐる。さすがに大財閥だけのことはある。尤も敵方にとつても、これは重大な事件には相違ない。佐藤は瞬間度胸を据ゑて、大きく出て相手の度膽を抜いた。

「さうさ、君たち、何をボヤ〳〵してゐるんだ」

某社が南洋の大會社に、永年獨專的に石炭を賣込んでゐた。或年佐藤は自分の部下の名で入札に割込みそれを落してしまつた。さあ困つたのはその門司支店である。第一他の者に落札されたとあつては、社の體面にかゝわると云ふので、支店長は佐藤を訪ねて、「是が非でもゆづつて貰ひたい」と懇願した。佐藤は例によつて正々堂々の論陣を張り、譲らうとはしない。遂に支店長は最後の切札を出して、「金は要求通りいくらでも出すから」と云ひ出した。

「君は僕を金で買へる人間と思ふのか」

と、きめつけたので、支店長は遂にあきらめて歸つて行つた。佐藤は大會社をやつつけたので痛快でたまらない。大いに氣をよくしてゐたが、間もなくひどい目にあはされた。といふのはからだ。

佐藤は峰地炭礦の一等炭を一手販賣してゐた。量は多くその上、質が飛切りよいので、これは佐藤にとつて大切な武器であつた。ところがその會社が、一手販賣契約中にも拘らず鑛主にその契約を破棄させて、その權利を買收してしまつた。この時ばかりはさすがの佐藤も藏内鑛主に向つて、「俺を男にしてくれ」と談判したが駄目であつた。

高江炭礦の成功は、礦長岸田牛五郎の手腕によることが大きかつた。岸田は後に縣會議員となり、縣參事會員までした男である。手腕力倆の人であるから、子分共の不平は一手に押へてゐた。押へが强すぎると、怨みは礦主に集つてくる。

突然岸田が亡くなり、その葬儀がすむと、たゞならぬ不穩な空氣がたゞよつた。坑夫の親分たちが礦主に談判があるからと云つて、歸りかけた佐藤に面會を求めた。面會の場所となつた礦山の合宿には、全山の傑物が集つて、佐藤一人を取卷いてゐる。そして云ふことを聞かなければ、目に物見せるぞと云はんばかりの嚴談を初めた。しかし佐藤はビクともしなかつた。恐らく抜身で追ひかけられたとしても、逃げなかつたであらう。何故なら、自分が間違つてゐないと確信すると、世の中に何もこわいものがない彼であつたから。

「一々回答を求めたのに對して答へるが、その前に條件がある。それは俺の云ふことを初めから終りまで、默つてきくといふことだ。途中で勝手な口を入れるなら、初めから何も云はんから、君等勝手

にせい。默つて聞くといふなら、話す」

默つて聞くと云ふことに相談が一決したので、一々順序をたてゝ話した結果「礦主の方がよくわかる」といふことで完全に了解がついた。話が終つたのは夜であつた。驛まで六七町ある。事務所の者が心配して、「お送りしませう」と云ふと、「馬鹿云へ」と笑つて、小暗い道を一人で歩いて行つた。すゝきの穗が微風にゆられて、やかましく蟲のすだく大正十年の初秋のことであつた。

佐藤のためには水火も辭せぬと云ふ人間が、炭礦の中にたくさん出來たのはこのときからである。

佐藤の炭礦經營は、明治四十一年三月の貝島所有の綠炭礦の斤先請負採掘に始つて、同四十三年九月には、高江炭礦の買收經營に乘出し、大正二年十月には山口縣厚狹郡の須惠炭礦、同四年四月には鹿兒島縣大島郡の名音鑛區と上石良鑛區を買收して、滿俺鑛の採掘に從事した。

大正十一年十月には久原炭礦を買收經營した。しかしこれらはみな、嗣子興助が教育界に終始せんとする意志堅く、事業繼續の意がなかつたので、晩年の奉仕生活に入るとともに、徐々に整理されて行つた。

みちしほ

若松市は、今でこそ七萬五千の人口を擁してゐるが、明治の初年にはさびしい一漁村にすぎなかつた。筑豐炭田の開發と、鐵道の開通によつて、今日の殷盛を來たしたので、云はゞ石炭商によつて育てられた都會なのである。だから町の世話役も、自然さうした人たちが昔から當つて來た。

明治三十二年頃であつた。新進氣鋭の實業家が七八人集つて、懇話會を結成した。これは月一回集つて晩餐を共にし、互に親睦を計り、修養しやうといふ目的であつた。佐藤はその主唱者の一人であり、幹事役であつた。

大正七年の六月に市會の改選があり、佐藤は立候補して當選し、市會議長に選ばれた。佐藤の議長就任中は、何等問題なく、圓滿な四年を過した。たゞ一つ殘つてゐる挿話がある、それはかうだ。

大正九年の春であつた。佐藤は市の有志者數名を引きつれ、縣廳に押しかけて行つた。問題は縣立

若松中學校長の不意轉任についての抗議であつた。この校長は、若松中學が縣立に移管される前、市立若松中學校としては比較的多額の俸給を以て、特に招聘された人物識見ともにすぐれた教育者であつた。それを突然、市に何等の話もなく、學校が縣立に移管されたからといつて、轉任させるとは何事かと云ふ次第である。

この校長移動の膳立をしたのは、當時の福岡縣視學官石田馨であつた。彼は久留米の縣立中學明善校の校長が缺員になつたので、その後任には若松中學校長を拔擢するのが適當と信じ、知事に内申したのである。しかし若松市から抗議の出ることは豫期されたので、上司に對して云つた。

「抗議が出ると思ふが、これが正當だと信ずるから斷行して下さい」

かくして突如發令されたので、佐藤の抗議となつたのである。石田と佐藤は相對してどちらも負けずに議論した。若い石田は純理論で行き、佐藤は油の乘り切つた時代のことゝて、相當鼻柱强くぶつつかつた。しかしいくら議論をしてみても、旣に發令後のことである。部長や知事のところにも持ちこんでみたが、結局どうにもならなかつた。

石田が後に東京府の學務課長となつたとき、美術館建設に百萬圓寄附の申出者があつた。會つてみると、往年若松の中學校長移動問題で抗議を申出た相手の佐藤慶太郎であつた。これには二人とも「ほゝう」といつたまゝ、あまりの奇遇に驚きの目をみはつた。石田はその後乞はるゝまゝに佐藤の最後の事業であつた新興生活館の理事に就任し、この奇遇の結末に美しい花を添へた。

奉仕

新たなる發足

佐藤には、比類を見ない卓越した先見の明と、果敢な決斷力があつた。その上、石橋を叩いて渡る堅實さがあつた。身を守るには極度に質素、その上理財には甚だ巧みであつた。産をなすに必要な條件は、殆んどみな備へてゐたといつてもいゝ。

彼はこの上になほ天の運に惠まれてゐた。もしこの運に惠まれなかつたとしたら、如何に豐かな才能を持つた彼であつても、果してあれまで行けたかどうかは疑問である。

彼は日本工業の勃興期に獨立開業し、日露戰後の好況に際會した。そしてまた、大正三年から七年までの歐洲大戰による未曾有の好況の波にのり、大正九年の恐慌時には、病氣のため、急速に事業整理に着手してゐて、その打撃を僅少で喰ひ止めることが出來たのであつた。

云ふまでもなく日本の資本主義經濟は、歐洲大戰によつて異常の發展をし、遂に獨占資本主義の段階に入つたのである。尤も戰爭勃發の當初に於ては、大なる不安を感じて、むしろ經濟界には沈滯の

色さへ見えたが、大戰の進行と共に、各國の平和的産業機構が破壊されるに及んで、軍需品の注文が殺到し、加へて世界市場に對する日本の平和的商品の進出となつた。

これを佐藤の關係してゐた鑛業方面でみると、それまでは一割乃至二割程度を示してゐた事業會社の標準利潤が、大正五年の下半期に於ては、九割一分二厘に躍進し、六年同期には實に十二割三厘の最高を示すに至つた。しかし平和の回復とともに、大戰中放棄されてゐた列國の商品販路に、再建擴張運動が行はれるに及んで、脆弱な地盤に立つわが財界は、自肅且つ警戒をすべきであつたのに、なほ企業熱、投機熱に浮かされてゐた。遂に來るべきものが、大正九年の三月に至つて來たのである。全國は大恐慌の旋風の中に卷きこまれてしまつた。

彼は幼い時から胃腸が弱かつた。法律家を志しながらも、それを途中で放棄しなければならなかつたのもそのためである。獨立してからも、始終これには惱まされた。各地の溫泉をめぐり、遂に大分縣の湯の平が、胃腸に特效のあることを知つて、毎年夏の一二ケ月をそこで過すやうにした。それは明治四十年ころからのことで、昭和十二年の夏まで、毎年必ず出かけて行つた。

大正二三年ころには、殆んど休んでゐることが多く、一年を通じて事務所に顏を出すのは、延日數にして二三ケ月位のものであつた。半病人半働きといつた形で、忙しい中を休養や溫泉行に割かなければならなかつた。

大正九年、三菱鑛業が初めて株の解放をしたとき、プレミアム付で募集をした。皆爭つて申込みをし、しめ切つたところへ例の大恐慌が起り、株價は大暴落をした。從つて申込者はみな躊躇した。三菱では到底實行の出來ないことを思つて、申込者一同に對し、「破約しても意存はない」旨の通知を發しプレミアムを返した。ところが、佐藤はカン／＼になつて怒つた。

「そりやいかん、これでよろしいとお互に一旦約束した以上拂戻しをするとはけしからん。ゼロになつても俺は買ふ。三菱ともあらうものが、何たる事か！」

と名古屋のホテルから、三菱に强硬なる一書を送つた。大抵の者が喜んで破約した中に、彼のみは堂々と大株主におさまつたのである。

これが三菱鑛業の重役に推された主要なる原因ではなかつたかと思ふ。大正九年十一月の株主總會で監査役に選ばれ、その逝去までその任にあつた。三菱系以外の重役としては、諸戸清六と彼のみであつた。

佐藤としては、相當の資産も出來、經驗や知人や地位も出來て、これから中央の財界に乘出し、常一線に立つて大いに我が志を伸べやうとしてゐた矢先、彼の最も信頼し、彼の體に最も委しい主治醫の野口博士から、重大なる忠告を受けた。それは事業界から手を引かなければ、命の保證は出來ないと云ふ爆彈的忠告であつた。

野口は彼の體を診察して云つた。

「こりや、いかん。一切の事業から手を引いて養生するのでなくては、この體は保たん。もしこのまゝ世俗の活動をつゞけて行くといふなら、自分は絶對に健康を保證することは出來ない。あなたの行き且つ活きる道は別にあるから、斷然事業から手を引きなさい」

佐藤は大正七年の九月、養嗣子與助の海外留學を横濱埠頭に見送つて、歸宅後、間もなく流感にかゝつた。その後八年、九年と連續的に三年間續け、そのつど肺炎を併發しさうになつたのを、やつと喰止めて來てゐたので、この忠告には從ふより途はなかつた。彼は涙をのんで、すべての事業から手を引く決心をした。しかしこのやうな決心と實行は、中々凡人には出來難いものである。佐藤といへども多分の未練がないわけではなかつた。それをなし得たかげには、俊子夫人と甥の山本晉一郎の一通りならぬ協力があつたのである。

常日頃佐藤には、人生に對して彼一流の理想があつた。食はんがために働くのが、人生の目的ではない。卽ち衣食住の滿足が、人間究極の理想ではない。では何が人生の眞の目的かと云ふと、社會の幸福のために何事かをなすのが、理想であり希望でなくてはならないと云ふのであつた。

それならば、彼自身は何を以て社會の幸福に寄與するかといへば、富であり、金錢であつた。「學者でも政治家でもない私に出來ることは、眞面目に働いて得た淨財を以て、世のため人のために捧げるといふ金錢奉仕が、私の描く最高理想でありました」と、後年彼自身が述べてゐる。

今やその年來の理想を、實踐に移す機會が到來したのである。事業から手を引いた彼には、もはや生活費以外には財産が不要になつた。その生活費も、三菱鑛業や若松築港その他の役員手當で充分である。祖先の祀をつぐ養子には、生活に困らぬだけのものをわけ與へ、事業は着々整理して、餘分の金は全部社會事業に投じ、夫婦の死後は特に指定した寄附の外は、遺産の全部を國家若くは市に相續を願つて、一物をも殘さぬ決心をした。

殘る生涯はたゞ奉仕の一路あるのみ。彼の心は澄み切つた秋空のやうに、明るく輕かつた。

彼が奉仕生活に足をふみ入れて、最初に關係して效果をおさめたのは、石炭聯合會の創設である。

大正六年には十二割餘の利潤率をあげた鑛業界も、大恐慌のあとを受けて氣息奄々たる有樣であつた。つまり生産過剰となつたのである。それならば生産調節をすればいゝのであるが、自由主義經濟當時のことゝて、そんなことは夢にも考へられない狀態であつた。しかしこのまゝ捨てゝおけばお互に墓穴へ拍車をかけて、日本の炭業界は自滅に瀕する。これは一刻も捨てゝはおけない國家的大問題だと信じた佐藤は、遂に決心して起ち上つたのである。

彼は東西に飛び歩いて、主なる炭礦業者に說いた。異口同音の答は「それは結構だが、實現不可能だ。折角の骨折だが無駄だから止めてはどうか」と云ふ意見ばかりであつた。事實、筑豐炭と北海道炭は競爭炭であり、宇部炭と常磐炭はこれまた競爭炭である。かうした敵同志を集めたところで、到底調節の協定などが出來るはづはないと信じたのも、當時としては無理からぬことであつた。

しかし佐藤の考へはそれを突拔けて、もつと大所高所から達觀してゐた。彼は石炭礦業家の利害は大體に於て共通してゐるのだから、努力さへすれば必ず一致させることが出來ると信じ、ます〳〵熱心に說き廻つた。遂に麻生、松本などの大御所が共鳴して動き出したので、初めて大正十年三月、全國の有力な業者が一堂に會して、この問題を協議することになつた。

それまでは、地方的な石炭組合はあつたが、全國的な聯關がないから、お互に顏は知り合はなかつた。面白いのは、その會場で初めて三井と三菱が名刺の交換をしたのであるから、他は推して知るべしである。初めて會つたのであるが、多くは敵同志と云つた氣持が中々拔け切らないので、お互の腹の探り合ひ、駈け引きが暫くつゞいた。數回の會合を重ねた結果、漸く一致が出來て、その年の五月から實行に一步を踏み出すことが出來たのである。かうして石炭礦業聯合會は生れたが、中々お互にザツクバランな話が出來ず、仕事の進行しない場合が往々起つた。さうしたとき、佐藤の直情直言は大いに推進力を發揮して、この多難な事業を進展させたのである。

石炭礦業聯合會が母體となつて、自主的統制をする昭和石炭會社が生れ、それが現在の日本石炭會社となり、石炭の統制は國策に卽應して圓滑に行はれてゐる。また日滿支の連絡機關として、日滿支石炭聯合會も出來た。この石炭礦業聯合會がなかつたならば、今日の統制は相當の困難に逢着したであらうことは想像出來る。佐藤にはこの點に於て先見の明があつたと云ひ得よう。

佐藤が筑豐石炭鑛業會の記念號に載せた「所感」と題する記事がある。參考のために再錄しよう。

所感

佐藤慶太郎

歳月の流れるのはまことに矢の如く、本年は筑豊石炭礦業會創立滿五十周年に相當し、同會に於ては五十年史及同月報五十周年記念號の編纂を企畫され、私にまで感想文を徴せられ、まことに欣快且つ光榮に存じます。

顧みれば、この永い年月の間に、同業先輩は既に多く物故され、今や幽明境を異にし、實に感慨無量なるものがあります。然るに私は、健康を惠まれて本文を寄稿することが出來、まことに幸福と申さねばなりませぬ。

私が石炭に關係を持ちましたのは、明治二十五年五月、若松の山本周太郎商店に入り、石炭商業の見習を始めた時でありました。さうして明治三十三年四月、獨立して石炭業を開業し、明治四十一年には、他の組合員と協力して高江炭礦の一部、而も四隔炭一層のみの斤先掘に着手し、明治四十三年には高江炭礦を買收して獨力これが經營に任じ、一面販賣方面にも相當活躍致しました。その間、炭界不況のため、度々困難に直面致しましたが、日露戰役及び歐洲大戰に遭遇し、私としては相當の成績を擧げることが出來まして、仕合せに存じてゐる次第であります。

然るに大正九年末に病を得、醫師の勸告によつて、營利事業から全然手を引く決心を致すの止むなきに至りました。その當時は、折角幾分の資金、信用、經驗、知人も出來てゐましたので、これからだと樂んでゐた際のことでありますから、非常に遺憾に思ひましたが、天意とあれば致し方ありません。そこで決心を固め、それからは整理に專念し、漸く昭和六年に清算を終り、只今では三菱鑛業會社以外は、全く石炭と關係のない形となりました。

私は實業に從事した當初から、眞面目に熱心に業務に精進すると同時に、極度の節約をし、幸に幾分の資産が出來たら、生活費を除いた全部を國家社會人類のために捧げる考へでありましたから、營利事業を斷念すると同時に、金壹百萬圓を東京府美術館建設費として寄附し、その後整理の進行と共に、幾分まとまつた寄附だけに、約五拾萬圓を捧げました。最近は金壹百五拾萬圓を提供して、財團法人佐藤新興生活館を設立しました。今後も出來得る限り、社會のためお役に立ちたいと念願致してをります。微力ながらかく志の一端が實行出來ましたのも、先輩諸氏の御援助御指導と、石炭のおかげであると深く感謝致してをります。

炭業關係中、私が幾分斯界に貢獻したと思ひますことは、送炭調節の問題であります。石炭の不況には隨分度々遭遇致しましたので、その都度これは何とか方法を講じなければならぬと感じつゝも、有力な會社や礦主から何の提議もないので、微力な私が出る幕ではないと考へ、遺憾ながらそのまゝ經過致しました。ところが、大正九年末に於ける炭界の不況は、實に慘憺たる有樣で、到底默視する

に忍びなくなりました。これが對策としては、送炭調節の外はないと確信し、先輩諸氏に提議しましたが、先輩の多くは、「それが出來れば誠に結構だが、とても相談のまとまる見込がつかぬから、そんな提議はせぬ方がよろしからう」との意見でありました。

然るに私は、送炭調節の事たるや、困難には相違ないが、元來同業者の利害關係が一致してゐるのだから、努力一つではその困難を突破することが出來るに違ひないと確信し、熱心に主張しました結果、成否はともかくとして充分努力してみようとの賛成を得、大正十年三月、炭業始つて以來最初の全國炭業者の主たる者が東京に會合し、數回會談の末、さしも困難であつた送炭調節問題も、會合者全部の賛成を得て一決し、同年五月から實行に入り、その結果炭況の回復を見るに至り、その後も需給が平衡を得ない時は調節が實行され、炭業の安定を得るに至りました。

送炭調節問題の決定と同時に、炭業者全體の利害に關する事項を調査協議研究し、斯界の繁榮をはかるため、石炭礦業聯合會が組織され、その後昭和石炭株式會社が設立されて販賣の統制が出來、いよ／＼炭業の安定を見るに至りましたことは、斯界にとつては申すに及ばず、國家のため誠に喜ばしく存ずると同時に、當時を追想して感激に堪へない次第であります。

かく炭業の安定を見るに至りましたのは、結構のことでありますが、炭價は各種工業を始めとし、一般生活に重大な關係がありますので、炭業者は暴利をむさぼるやうなことがあつてはならぬのみならず、出來得る限り原價を低下し、廉價で消費者に供給することに努力せねばならぬと考へます。

私の考へとしては、礦業方面では出來るならば、全國少くとも一地方毎に會社を設立し、炭礦の合同をはかることが必要と存じます。それが出來ねば、せめて共同排水とか共同發電とか、或は物資の共同購買等により、原價の引下げに努力せねばならぬと考へます。

また販賣方面では、一大會社を設立して全國を打つて一丸となし、東京に本社を、各地に支店、出張所、出張員を置き、各方面の石炭は品質種類により等級を附し、同種若くは類似のものは混合し、たとへば筑豐何等炭、北海道何等炭として供給すれば、積込み輸送販賣等非常に便利になるのみならず、諸掛り費を著しく減ずることが出來ると共に、從業者の如きは現在の一割か二割あれば充分だと思はれます。

この問題につきましては、私から提議したことがありましたが、これまでの從業者に對する人事の問題につき、各社共難色があり、終に實行されずに終つてゐますが、私は昭和石炭會社に一歩を進めてこれが實現に努められんことを切望致します。

かく一面には、統制によつて炭業の安定を得、一面には原價を低下して廉價な石炭を消費者に供給

することは、炭業者の責任であると存じますので、折角御努力を切望する次第であります。(了)

☆

これは昭和十年の九月に佐藤の執筆したものである。まだ支那事變の起らない前、勿論第二次歐洲大戰の勃發など誰一人夢にも考へなかつたとき書いたものであることを思へば、轉た感慨にたへないものがあるではないか。そこには既に、經濟新體制の口火が切られてゐる。

佐藤は營利事業から手を引くことによつて、新しい世界に雄々しく飛躍し始めたのである。

美術館

銀座に近い木挽町の水明館に泊つてゐた佐藤は、洗面をすましてくると、茶をすゝりながら、女中の持つてきた朝刊に目をさらしてゐた。何か非常に興味を覺えたものがあつたらしく、目は紙面に吸ひつけられたまゝ、身動きもしない。暫くたつと、今度は坐禪でもしてゐるやうに、ぢつと考へこんだ。大正十年三月十七日の朝のことである。

「もしもし、帳場かね、こちらは二階の佐藤だが、昨夜の夕刊があつたら、持つて來てもらひたいがな、うむ、なに、うん、夕刊。さう、何新聞でもいゝ。うむ、うむ」

女中が夕刊を持つてくると、しきりに何か探して讀んでゐたが、また帳場へ電話をかけた。

「九時半に東京府廳へ電話をかけてくれ、通じればすぐ出るから」

それからまた朝刊を取上げて、讀み初めた。新聞は時事新報、讀んでゐるのは社説である。それは「常設美術館」と題するもので、次のやうな社説であつた。

常設美術館

東京の如き大都市に、常設美術館を設立するの必要ある次第は、曾ても再三本欄内に述べたることあり。然るに明年の平和博覽會を機會として、同館を建設せんとの運動を生じたるに、東京府に於ては博覽會經費の關係上、かくの如き大建築をなすを得ざるも、一時的の美術館を設くるの方針なりといふ。而して常設美術館の建築に要する經費は、約百萬圓に過ぎざるに、一時的のものも約廿萬圓を要するが如し。

これらの計算にして略誤りなしとすれば、此機會に常設美術館の建築を實行し得ざるは、甚だ遺憾と云はざるを得ず。西洋諸國の大都市には、それぞれ幾種の常設美術館ありて、一國の文化藝術を代表するの例なるは、今更申すまでもなき所なるに、獨り我國に於ては一時的の展覽會の如きものを開くことはあれども、常設的の美術館は殆んど未だ何れの都市にもこれを見るを得ず。只東京帝室博物館の構內にある大婚記念の表慶館のみは、常設美術館と稱して可なるに似たれども、規模大ならずして陳列品の種類も特種の性質を帶び、正しき意味に於ての常設美術館と云ふを得ざるは、甚だ物足らず思はるゝ點にして、卽ち少くも我國第一の都市たる東京には、是非とも完全なる常設美術館を設け

一面には國の文化美術を顯揚するとともに、他の一面には美術家の奮發を奬勵するの場となすの必要あるべし。

今更申すまでもなきところなれども、我國民の特徵として、世界に誇るところは、美術上の手腕に富むとともに、各種の工藝品に含まるゝ美術的分子の裕かなる一點にあれども、此長所は我國民のみの一手專賣に非ず。文運の發達するに隨ひて、西洋諸國に於ける美術上の研究も、ます〳〵精緻を加へ、我國に於ても一度油斷する時は、他の後塵を拜せざるを得ざるの恐れあるに就いては、舊來の狀態に安んじて改良進歩を怠るべきに非ず。

而して、我國の美術工藝品は、重要なる輸出品の一に屬し、その通商上の盛衰は、決して輕視するを得ざれども、此種の工藝品卽ち應用美術を以て目すべきものは、所謂純正美術の盛衰によりて支配せらるゝものにして、若しも美術としての美術が振はざるに於ては、此種の工藝品も亦やがて、その惡影響を被るに至るべきは、理の睹易きところなるを以て、卽ち純正美術は獨り國の文化を裝飾するのみに止らず、亦實に物質的利害にも輕からざる關係を有することを認め得べし。

これを以て見るも、美術の保護奬勵は、我國に取りて大切なる事業の一に屬すること明白なるにも拘らず、その點に關する施設貧弱を極め、僅かに文部省の展覽會が東京に於ける年中行事として、人

の注目を惹くに止るは、美術國を以て自ら誇るに似合はしからざる事實と云はざるを得ず。

常設美術館の設立の如きも、疾くより實行して然るべきものなるに、今に至るまで國の事業として も、東京府市の事業としても、着手せられざるは、我輩の豫てより遺憾に思ふ所なるに、今度の計畫も亦頓挫を免れずとありては、ます／＼遺憾と云はざるを得ず。これに關して是非共希望したきは、東京府が旣に二十萬圓を以て一時的の美術館を建築するの方針なる以上、此際富豪及び有力なる美術家の協力により、右の金額を基礎として常設美術館を建設するに足るべき資金を集め、その建築を實行するの一事なり。かりに建築費を約百萬圓とすれば、約二十萬圓に八十萬圓を加ふるものなるを以て、方法の如何によりては、これだけの金額は敢て難事にあらざるべし、此際常設美術館のことに、心ある人々の一考を望むものなり。

☆

佐藤は電話が府廳に通ずると、阿部知事に出てもらつた。

「もしもし、阿部閣下でございますか。私は九州若松の佐藤です。いつぞや、東海道線の食堂車でお近づきいたゞきました佐藤です」

「いやどうも暫くでした。御壯健ですか」

「ありがたうございます。おかげさまで」

「いつ御上京でした」

「四日に出て參りました。例の採炭制限問題で飛び歩いてゐます。まあどうやら目鼻だけはつきました」

「それは結構ですな」

「ときに閣下、至急お目にかゝりたいのですが、御都合いたゞけませんでせうか。美術館問題につき少々考へるところがありまするので、御高見をお伺ひしたいと思ひます」

「ぢや、丁度今あいてますから、すぐお出かけ下さい」

「ではすぐおぢやまいたします」

東京府知事阿部浩は、原敬の三羽烏と云はれた傑物である。佐藤と阿部の二人は、ある時東海道線の食堂車で偶然向ひあつて坐つたのが機緣となつて、大いに國事を論じ共鳴するところあり、知り合ひの間柄であつた。佐藤は直ちに府廳に阿部を訪ねた。

「平和博覽會の御準備で、どんなにか御多忙でせう」

「ありがたう。景氣挽回策として、どうしても現下の日本、特に東京にとつて必要だと思ひまして

ね」

「是非御成功を祈ります。ときにだいぶ新聞では、美術館問題がやかましいやうですが、美術家たちの建設計畫はものになりますか」

「いや、絶對に駄目です。出來やしません」

「これはまた馬鹿にハツキリしてますね」

「第一金が出來ません。假に出來たとしても、敷地がさう簡單にきまりますまい。設計、建築それらが來春の平和博までに間に合ふものですか」

「ぢや、やはり一時的なもので間にあはせるわけですか」

「この際としては、それより外に方法はありますまい。しかしなんとかして、永久的な美術館が欲しいとは考へてゐるのですがね。この不景氣ではとても見込はありません」

「それは遺憾なことです。どうでせう、私に今不要な金があるのですが、それで建設しようぢやありませんか」

「不要の金つて、どんな金です」

「昨年の暮ですが、主治醫から忠告されましてね、事業から手を引いたのです。それで自然事業資金として用意しておいた金が不用になつたわけです」

「成程、それは御厚志ありがたい。がしかし佐藤さん、あなたから折角寄附してもらつても、別口の寄附が到底集まらんから、これは殘念ながら不可能です」

「一體どれ位要るのか知りませんが、百萬圓位では出來ませんか。その位でしたら銀行にあづけてあるんですが」

「百萬圓?! ほう、あなたはそんな金持ちなんですか」

「おやおや、あなたはそんなに私を貧乏人と思つてゐたのですか」

さすがの阿部もちよつと度膽をぬかれた形であつた。當時東京市の方は仕事がたくさんで多忙であつたが、府の方は至つて影が薄かつた。阿部はすつかり興奮して、是非それを府に寄附してくれるやうにと、幾度もくりかへして述べた。

「私は美術館さへ出來ればそれで結構なのです。對手は府でも市でも、また文部省でも何でも構ひません。知事さんが是非とおつしやれば、私は喜んで府に寄附します。しかし寄附者は他府縣人でもかまひませんか」

「一向差支へありません。ではどうでせう、明日もう一度お會ひ下さいませんか。もう少し具體的に

御相談をしたいと思ひますから」

「承知しました。それではまた明日」

佐藤の氣持はその日の空のやうに、廣々と晴れわたつてゐて心樂しかつた。何とはなしにぶら〳〵歩いてみたくなりお濠端の方へ行くと、大きな鯉がいくつも、いくつも悠々とおよいでゐた。

美術館問題が起つたのは、東京府が景氣挽回策として平和記念博覽會を計畫し、その中に美術館を設ける案が發表されてからであつた。その案によれば、平和記念博覽會場に一時的な美術館を他の館と同樣に設け、美術品の陳列をしようとするのであつた。これに對して、東西の美術家が一齊に起つて、この際永久的な美術館を建てよと大運動を起したのである。

平和記念博覽會は、大正十年一月二十六日の臨時府會で決定したもので、總豫算六百萬圓、建物總工費四百萬圓中美術館は八百坪、二十四萬圓の豫算であつた。

博覽會場は竹の臺と池の端で、建物はすべて獨逸式、入口には百二十尺の大圓柱をたて、その上に平和の女神を配し、會場の正面に平和館、その周圍に化學工藝館、染織館等十數館が立並ぶ豪華なプランであつた。

三月十一日には博覽會事務局の職制が決定し、阿部知事が會長に就任した。事務局は四月早々上野美術協會前に建設され、事務は六月から開始されることになつた。その他の建物は、設計を六月までに完了し、七月から工事に着手することになつて、準備はいよ〳〵本格的となつて來た。

かうして準備が着々進められると、かねて常設美術館の建設を熱望してゐた美術家側から、それを機會に、博覽會終了後、その美術館を常設館にしようといふ運動が猛烈に起つた。音頭取りは、日本畫、洋畫、彫刻その他二十一美術團體からなる竹の臺茶話會で、既に府と市には猛烈なる陳情を開始してゐた。三月十五日には全東京の美術家に檄を飛ばして大會を開くことになつたが、その準備會で丸山晩霞は、東京朝日新聞の記者に、次のやうに語つてゐる。

「美術國日本とうたはれる我が國に、常設美術館の一つもないことは、云ふまでもなく大恥辱であるが、默つてゐれば何時出來るか見當もつかぬので、此の機乘ずべしとは茶話會所屬各家の一致するところで、お互に非常な熱で實現を期してゐる。

中には大きすぎる程の計畫を抱く人もあるが、大多數は今回平和博が三十萬圓で建てやうとするところへ、政府や市の補助を仰ぐか、又は有志家や美術家自身の據金によつて、他に三十萬圓程つくつて六十萬圓内外とし、博覽會設計のものより一歩進んだものを建て、そのまゝ後に殘すやうにしたい

と希望するのである。

今はまづこれだけ實現出來ればとその貫徹を期して、いよ〳〵大會を催すのであるが、府當局も記念事業として何か遺したい望はもつてゐるのであるから、强ち實現不能といふこともあるまい」

☆

大正十年三月十六日の東京朝日新聞は、その前日行はれた「美術館建設會議」の模樣を次のやうに報じてゐる。

☆

平和博覽會記念事業として、美術館を建設しようと奮起した竹の臺茶話會二十一團體を中心とする美術家大會は、既報の如く十五日午後一時から、本郷燕樂軒に開催された。

國民美術協會石井柏亭、林間社小池素康、日本水彩畫會丸山晩霞、日本美術院木村武山、日本畫會荒木十畝、獨立繪畫會鳥谷幡山、日本金工會佐藤美崇、國民美術協會坂井犀水、讀畫會廣瀨東畝、太平洋畫會石川寅治、日本漆工會赤塚自得等の諸氏。

茶話會側の外には、南薰造、山內多門、飛田周山、東城鉦太郎、川村淸雄、吉田博、石井滴水、伊藤大八、金杉英五郎博士の諸氏等まで八十餘名の出席、定刻評議員會を開いて政府建議案や決議を作製、愈々三時より大會に移つた。

坂井犀水氏の開會の辭、小池素康氏の經過報告があり、金杉博士が座長に推されて議事に入つた。石川寅治氏が朗讀した建議案は滿場一致可決、二部に分たれた決議案は、第一部を丸山晩霞氏、第二部を廣瀨東畝氏が交々朗讀、第一部中お祭騷ぎ云々に對して修正意見も出たが、結局委員附託の形で可決、實行委員選定の段に進んで鳥谷幡山氏が「事重大であるから、出來得べくんば、我美術界全體に互る有力者を網羅したい」と主張し、遂に氏の主張が通つて、茶話會廿一團體を詮衡委員として、これが一兩日中に八方に奔走して、五十餘名の有力實行委員を選定することゝなり、晩餐に移り大いに前途を祝福して七時すぎ散會した。

☆

翌日の時事新報夕刊は「常設美術館を建てる財源が無い。美術家の建議に對し、府では拒絕する模樣」と題し、次のやうに報道してゐる。佐藤が阿部知事に會ふ朝に見たのは、この夕刊である。

☆

明年三月上野公園で開かれる平和博を機として、一部美術家の間に永久的美術館建設を目論見るに至り、府議小池素康氏等が先達となり、數十の美術家を語らつて運動を開始したことは、既報の如く

なるが、府が平和博を開催するに至つた動機は、全く産業部が設置された關係と、戰後産業界の大發展振りを天下に紹介するにあり、隨つて豫算の如きも殆んど切り詰めて、平和博は總豫算六百萬圓、しかもこれら財源は一切增稅によらぬ事を言明してゐるために、特に百萬圓近くの巨費を投じて、美術館を建設することは、全く不可能だと云ふ理由で、斷然拒絕する模樣である。

☆

一方佐藤は、三月十八日に阿部知事と再び懇談し、二十日と二十一日には、同知事宛の手紙を書いてゐる。二十二日になると、阿部から「明日正午前後に御面談いたしたい」と電話があり、翌二十三日にはだいぶ長時間懇談してゐる。そして二十四日の夜東京を出發歸途についた。

四月二日、別府に來た阿部から若松の佐藤宅に電話があつた。翌三日に佐藤は風雨を冒して別府に行き、長時間阿部と會見して、願書提出の打合せをした。そして四日と五日と二日がかりで文案を練り、漸く書き上げたのは五日の夜半であつた。出來上つた寄附願は、六日の朝書留便で、東京府知事宛送り出した。

その寄附願ひは、半紙二枚に細字で認められてゐた。この書留が府の學務課に廻つたのは四月十二日で、その處理に當つたのは、主席屬の船越源一であつた。寄附願の全文は次の通りである。

美術館建設費寄附願

本　籍　福岡縣若松市
現住所　東京市京橋區木挽町三丁目　水明館止宿

佐　藤　慶　太　郎

一、金壹百萬圓　美術館建設費寄附

右不肖慶太郎、家元寒素、十分學業ヲ修ムルノ資ニ乏シカリシヲ以テ、明治二十五年義兄ノ經營ニ係ル石炭商店ニ入リ、其ノ業務ヲ補助スルコト八年、同三十三年ニ至リ僅カニ數百圓ノ資金ヲ以テ、獨立石炭商ヲ開業セリ。

然ルニ既ニ御賢知ノ如ク、石炭商ハ我國第一流ノ資本家ニヨリ、經營セラレツヽアルモノ少カラザルニ拘ラズ、其取引上動モスレバ、種々ノ弊習行ハル、是不肖ノ最モ遺憾トスル所ナリシ。不肖以謂ラク、眞率着實ニ此ノ事業ヲ經營シ、幸ニ幾分ノ資金ヲ得ルアラバ、國家的社會的ニ、最モ有效有益ナル事業ニ之ヲ使用セント。爾來一意專心奮勵努力セシ結果ハ漸次業務進展ノ曙光ヲ見、其ノ基礎又確立スルニ至リタルヲ以テ、更ニ進ンデ石炭礦業ニ着手シ、目下株式會社佐藤商店礦業部

ニ於テ、高江炭坑ノ經營ヲナシ、其ノ販賣部ニ於テ、高江炭及廣岡惠三氏ノ大隈炭、坂本金彌氏ノ久原炭等ノ石炭販賣ニ從事ス。又目下ノ公職及關係ヲ有スル會社ニテハ、若松市會議長、筑豐礦業組合常議員、若松石炭商同業組合評議員、三菱鑛業、若松筑港其他二三會社ノ重役ナリ。

不肖ノ閲歴ハ大要前叙ノ如クニシテ、開業後久シカラズシテ生活ノ安定ヲ得タルヲ以テ、早速自己ノ宿望タル理想ノ一部ニ着手セリ。不肖人物養成ヲ以テ、國家社會ノタメ最モ必要ニシテ又最モ有效ナリト信ジ、體格、頭腦、品性等ヲ具備シタルモノニシテ、學資ノタメ其志望ヲ遂グル能ハザル境遇ニ在ル者ニ、無條件學資ヲ給與スル方針ヲ取リタルニ、已ニ學界官界及實業界ニ、相當ノ位置ヲ占ムル者多數アリ。又若松病院ニ研究室ヲ寄附シテ研學ノ便ヲ得セシメタルニ、有益ナル研究ノ結果ハ續々公表セラルルニ至リ、其效果ヲ豫想以上ニ擧ゲツツアリ。尙某醫學博士ニ、一層ノ研究ヲ爲サシムベク、目下拾五萬圓内外ノ豫算ヲ以テ、病院ヲ建設セシムベク設計中ナリ。

不肖斯ク國家若クハ社會ヲ利スベキ、有益ナル事業ニ貢獻スベキ目的ヲ以テ奮鬪セル結果ハ、一家ノ生計及鑛業、商業ニ必要ノ資金ヲ控除シタル以外、壹百萬圓ノ餘裕ヲ生ジタルヲ以テ、之ヲ表記ノ如ク美術館建設費ニ寄附セントスルモノナリ。而シテ、美術館ノ建設ヲ冀望スル趣旨ハ、我が日本帝國ハ東洋ノ美術國ヲ以テ中外ニ推稱スル所ナルノミナラズ、世界ノ美術國トシテ自ラ誇ルモノナキニ非ザルニ拘ラズ、今尙一ノ常設美術館ヲモ有セザルハ、我國識者ノ海外諸邦ニ對シ、常ニ忸怩タラザルヲ得ザル所ニシテ、又我古美術ノ保護ヲ永遠ニ期シ、我が新美術ノ進展ヲ將來ニ促ス所以ニ非ザルベク思考ス。蓋シ、不肖微力自ラ揣ラズ、僅少ナル寄附金ヲ提供シテ、美術館ノ建設及其經營ヲ閣下ニ懇請スル所以ナリ。

然ルニ些々タル壹百萬圓ハ、到底理想的美術館ノ建設經營ヲ全ウスベキニ非ルベキモ、不肖多年苦心努力ノ存スル所ナルヲ以テ、能フベク之ヲ有效ナラシメ度、隨ツテ其敷地ノ如キモ、本金額以外ニ於テ、適當ノ方法ヲ以テ適當ノ土地ヲ選定セラレ、將來ノ維持、保存、若シ能フベクンバ裝飾設備費モ亦本金額以外ニ於テ、相當ノ方法ヲ設ケラレ度、依リテ以テ大正聖代ノ文化ニ涓埃ノ貢獻ヲ爲スコトヲ得バ、獨リ不肖慶太郎ノ本懐之ニ過グルモノナキノミニ非ルベシ、希クハ閣下幸ニ微衷存スル所ヲ諒トセラレ、速カニ相當ノ御詮議ヲ遂ゲラレ、御聽許アランコトヲ。

右及出願候也

大正十年四月六日

右　佐藤慶太郎

東京府知事　阿部　浩殿

☆

船越はこれを讀んでびつくりし、同時にまた心から感激した。こんな多額の寄附であるから、既に上司には話があつたのかも知れないし、或は既に内定してゐることかも知れぬと思ひ、その書類を持つて石田課長の席に行つた。

「この書類は御承知になつてゐますか」

石田はそれを受取つて、讀んでゐたが、その眼は驚きに變つて行つた。

「いや何も聞いてをらん。知事は御承知かも知れないから、行つて聞いてみよう」

さう云つて出て行つたが、すぐ引返して來て、

「知事に話したら、（あゝその話は聞いとる、すぐ受ける手續きをしてくれ）と申された」

「それではすぐ手續きをいたしませう」

船越は課長に一禮して自席に歸つたが、異様な感動がいつまでも頭の中を占領して離れなかつた。

この報道が郷里若松地方に傳へられたのは、四月十四日の夕方であつた。即ち十五日付の福岡日日

新聞には、東京電話として特大號の活字を用ひ『美術館建設に百萬圓の寄附、若松佐藤氏の美擧』と題し次の如く掲載してゐる。

☆

美術館建設運動は、數年來美術家連により唱導せられ居りしが、福岡縣若松市會議員佐藤慶太郎氏は、一昨十二日東京府の美術館建設費として、阿部知事宛百萬圓の寄附を申出たり。東京府は協議の上、快くこれを受納する事となれり。此の百萬圓を資金とし、不足額は美術家の寄附に俟ち、上野竹の臺に永久的の大美術館を建設することゝなれり。これがために、美術館建築委員を特置し、愼重なる協議を重ねて設計等に着手する事となりたり。寄附金受納の上は、正木美術學校長、森文學博士外數氏の囑託ある由なり。

☆

續いて福岡日日は、翌日の夕刊に『全財産の半を投げ出した佐藤氏、寄附は年來の素志であると昵懇の兩氏語る』と題し、野口若松公立病院長と、石井若松市長の談話を掲げてゐる。地方としては、降つて湧いたこの事件に、如何に衝動を受けたかゞ察せられる。

☆

福岡縣若松市鑛業家佐藤慶太郎氏が、東京府の美術館建設費として百萬圓を寄附した問題に關し、同氏と昵懇の間柄なる若松公立病院長野口雄三郎博士は語る。

佐藤君は豫て、國家に聊かなりと貢獻すべき事業に、百萬圓程度の金を寄附したいといふ意志があつたやうだ。そして教育事業がよからうかとの質問があつたので、その節私は、教育事業は國家の力に依るべきもので、個人の事業としては至難であるから、自分は國民の品性を高めるやうな事業に寄附するやうに意見を述べておいた。

佐藤君は、誰にも相談せず、獨斷でやることが多いから、今回も全く事實であらうと信ずる。

石井若松市長は曰く。

佐藤君は旣に公職としては若松市會議長、若松石炭商組合評議員、三菱鑛業株式會社監査役、筑豐石炭鑛業組合常議員、若松築港株式會社取締役其他大小の重役を兼任してゐる。

現在の財産は、二百萬圓位だらうと思ふから、百萬圓寄附したとすれば、全財産の半を擲つたものである。同君は遠賀郡折尾町本城の生れで、明治法律學校を卒業し、明治二十四五年頃若松市の石炭商山本周太郎方で石炭商に從事し、三十三四年頃から獨立經營した。

その後炭礦事業に關係し、歐洲戰亂中石炭の好況時代に莫大の利益を收め、今では二百萬圓以上の資產を有してゐる。而して氏は寡言沈默衒氣のない人で、今度東京府美術館に百萬圓を寄附したといふ事も、恐らく獨斷でやつたことゝ思ふ。

家族は夫婦の間には子供が一人もないので養子を迎へ、大阪の祇園淸次郎氏の令嬢と緣談成立し、先般結婚の式を擧げた。氏の趣味としては別に聞かないが、俊才養成といふことには、頗る力瘤を入れてゐる模樣である。若松公立病院長野口博士が、同病院外科部長時代その人物を見込み、自ら洋行費を支出して獨逸に留學させ、世界的人物を作つたやうなわけである。

その他大學に入學させて養成した人物は多數ある。自分の養子に迎へたのも、自分が見込んで養成した人物である。

☆

四月十六日の福岡日日新聞朝刊の時事論評『鐘が鳴る』欄には、次のやうな批評が載つてゐた。

☆

若松の礦業家佐藤慶太郎君が、東京府美術館に百萬圓を投げ出したのは、大部世間の注目をひいたやうだ。

日本も今日では、百萬圓と云へばさう魂消る程の寄附ではないが、それでも、百萬と云ふ金はやつ

ぱり大金である。

特に今は不景氣風が強く吹きめぐつてゐる。筑豐の炭界もお多分に洩れない方だ。それに佐藤君は富の程度から云ふと、從來筑豐では第二流以下の礦業人として知られた人だ。その人が百萬圓を無雜作に投げ出したのだから、一時は嘘ぢやないかと想はれたのも無理からぬ。

聞けば佐藤君は今度その全財産の半分を投げ出したとのことだが、愈々以て思ひ切りが宜い。日頃田舍ツペイ、田舍ツペイと地方を馬鹿にしてる都人士も、これを聞いたら二度びつくりせざるを得まい。堂々たる大實業家が百萬圓の寄附を小便したり、珍品で節操や政友を賣つたりする大政黨の總裁もゐる世の中だから――

佐藤君は男振りをあげたと同時に、子孫萬全の計を立てたと云へる。

☆

この發表當時、佐藤は夫人同伴で大阪の實業家祇園清次郎宅を訪問し、そこからまた所用で旅行して祇園邸に歸つてくると、旣に各新聞に出た後であつた。妻の俊子は終生會計をあづかつてゐた。それ故實印は俊子が金庫にあづかつてゐて、佐藤はいつも妻の手からそれを受取つて使用してゐた。だから金に關しては、いつも妻と相談の上處理してゐたのである。ところが今度は、假にも全財産の半に當る百萬圓といふ多額の寄附である。萬一溢られては困る、から思つたので、全く何の相談もせずに、他の書類と一緒のときに實印を捺し、寄附してしまつたのであつた。祇園邸につくと妻の俊子が待つてゐた。奧の座敷に二人が坐ると、先づ俊子が口を切つた。

「あなた、今度はいゝことをなさいましたね。よく思ひ切つてやられました」

「いやお前にはすまん。いろ〳〵都合もあつたものだから、相談もせずにしてしまつてな」

「いゝえ、あなたの金をあなたがよいことのために使ふになんの遠慮が要るものですか。私はたゞ有難たいと思つてゐます」

協力幾十年の辛苦は、この瞬間あとかたもなく拭ひ去られた。二人は捧ぐるものゝみの知る幸福感が、いま自分たちの足許に、渚の波のやうにひた〳〵と快く押しよせてくるのを覺えた。

佐藤夫妻が若松に歸つてきた四月十八日、山の手にある佐藤の邸に、新聞記者がどや〳〵と押しかけて來た。記者たちの質問に對して、佐藤は次のやうに答へてゐる。

「豫て公的事業に、多少まとまつた金を寄附したいと云ふ心組でゐたところ、去る三月採炭制限問題で上京中、恰かも東京美術館建築問題が持ち上つて、美術家や學者たちが躍起になつて實現運動をし

露光量違いの為重複撮影

てゐたので、遂これに寄附したらといふ氣を起し、阿部東京府知事に相談をかけた。ところが阿部知事は勿論、原首相及び後藤東京市長も大いに賛成してくれたので決心し、百萬圓寄附願書を正式に提出したやうな始末である。

實は今少しく働いてから、多くまとまつた金を寄附したい存念でゐたが、近來少々健康を害し、老先きも短い事とて、ならば存命中にといふ心から、取敢へず全財産の中から生活費と營業資金を控除した殘り全部を寄附したやうな次第で、世間に吹聽される程のことではない。

自分は美術については、何の知識も趣味も持たないが、常設美術館が新設されることによつて、本邦特殊の古美術品の海外流失を防ぐことが出來、帝室及び貴族富豪等の家庭に秘藏されてゐるところの古美術品を、一般の觀覽に供することが出來るやうになつたら、國民思想を振興し、品性を高める上に、頗る有意義なものになるのではないかと信じてゐる。

美術家の同館建築委員の計畫は、建築費に四十萬圓、裝飾及設備費に三十萬圓、合計七十萬圓で拵へ上げるやうになつてゐたやうに思ふが、それでは餘りに貧弱なので、私の寄附金はその計畫と別個のものとなし、三階建千坪位の建物だけに、その全額即ち壹百萬圓を投じ、裝飾及設備費は別途の金を使ひ、さうして比較的完全なるものをつくつて貰ひたいものだといふ希望を述べておいた。

東京府美術館

美術館正面入口の記念胸像（朝倉文夫作）

露光量違いの為重複撮影

てゐたので、遂これに寄附したらといふ氣を起し、阿部東京府知事に相談をかけた。ところが阿部知事は勿論、原首相及び後藤東京市長も大いに賛成してくれたので決心し、百萬圓寄附願書を正式に提出したやうな始末である。

實は今少しく働いてから、多くまとまつた金を寄附したい存念でゐたが、近來少々健康を害し、老先きも短い事とて、ならば存命中にといふ心から、取敢へず全財産の中から生活費と營業資金を控除した殘り全部を寄附したやうな次第で、世間に吹聽される程のことではない。

自分は美術については、何の知識も趣味も持たないが、常設美術館が新設されることによつて、本邦特殊の古美術品の海外流失を防ぐことが出來、帝室及び貴族富豪等の家庭に祕藏されてゐるところの古美術品を、一般の觀覽に供することが出來るやうになつたら、國民思想を振興し、品性を高める上に、頗る有意義なものになるのではないかと信じてゐる。

美術家の同館建築委員の計畫は、建築費に四十萬圓、裝飾及設備費に三十萬圓、合計七十萬圓で拵へ上げるやうになつてゐたやうに思ふが、それでは餘りに貧弱なので、私の寄附金はその計畫と別個のものとなし、三階建千坪位の建物だけに、その全額即ち壹百萬圓を投じ、裝飾及設備費は別途の金を使ひ、さうして比較的完全なるものをつくつて貰ひたいものだといふ希望を述べておいた。

東京府美術館

美術館正面入口の記念胸像（朝倉文夫作）

露光量違いの為重複撮影

敷地は勿論東京府または市から、無償提供と云ふことになるだらうと思ふが、未だ確定的敷地を見出してはゐないやうである。私の寄附金採納の件も、まだ東京府會で決議したわけでないが、東京府としては建設後少からぬ維持費を要するので、これが財源を見出す必要もあるから、同美術館の實現は、今後多少時日を要するであらうと思ふ」

☆

それから間もない或日の夕方であつた。市の有力者たちから、夕飯を差上げるからお越し願ひたいと云ふ使が見えた。何事か知らんと思つて、その料亭に行くと、間もなく宴席になつて、佐藤は正面に坐らせられた。

「どうしたのかね、僕を正面に据ゑたりしてさ」

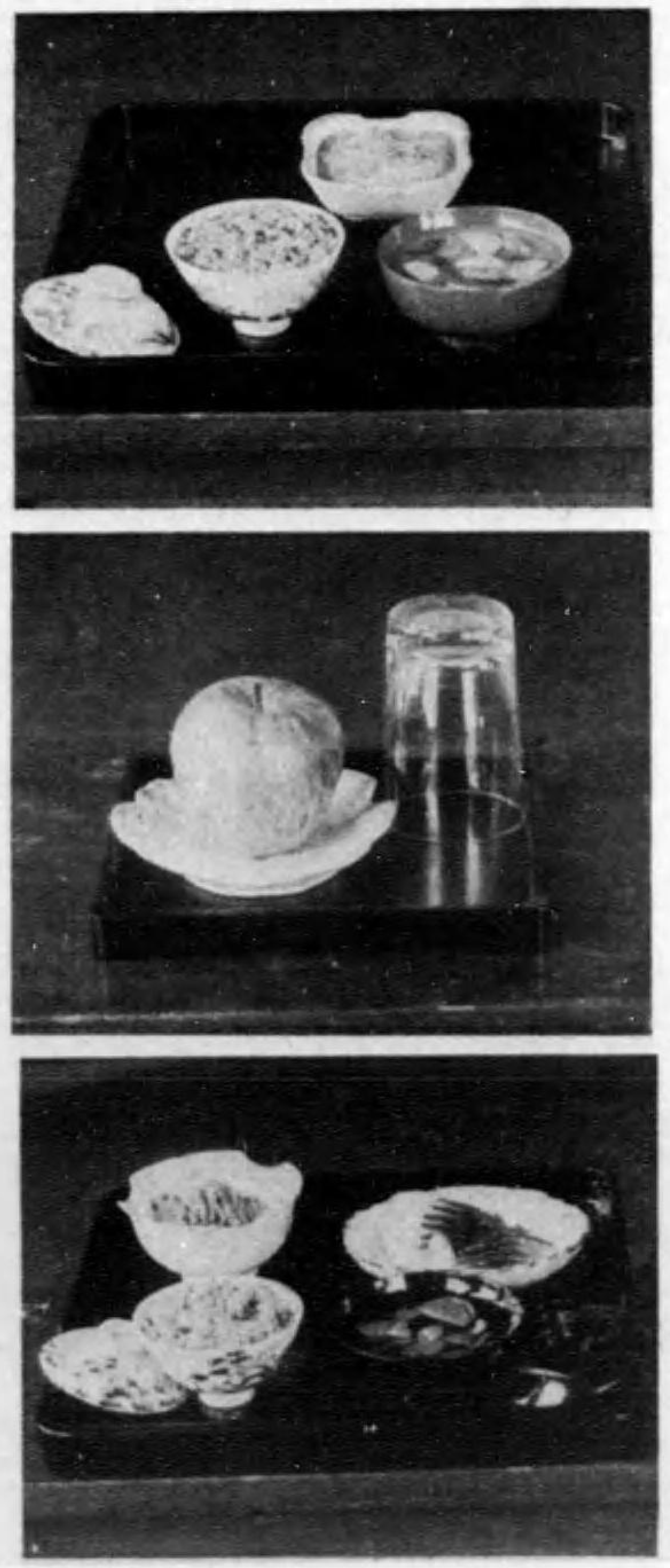
「まあいゝ、すぐわかるから君は遠慮せずにそこに坐つてくれ」

「さうかい、まあそれぢや遠慮せずに坐らうか」

みんなお互に顔を見合せて、意味あり氣な顔つきをしてゐる。佐藤は例によつて堂々と不景氣に對する政府の對策を論じ初めた。

「おい佐藤、いつも君は人の顔さへ見れば社説みたいな話ばかりする。時には少し社會欄の艶つぽい

改良後の食事（上より朝・晝・夕食）



病弱時代の胃下垂狀況（黒く垂れたのが胃・丸いのは臍）

改良前の食事（上より朝・晝・夕食）